

---

# FANTASY ESCAPER ~ 幻想の脱出者 ~

真野 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FANTASY ESCAPER 〜幻想の脱出者〜

### 【Nコード】

N2185S

### 【作者名】

真野 優

### 【あらすじ】

そう遠くない未来。

一つのコンピュータが発明された。

史上最高の性能を誇るそれは、とある技術を開発に使用された。

ヴァーチャル・リアリティ・システム

「VRS」。これを用いた科学者とゲームプログラマーたちは、全感覚投入型MMORPG、『ユグドラシア・オンライン』を産み出した。

発売当初から絶大な人気を獲得したこのゲームに突如異常が発生した。

それは、「約三十万人のプレイヤーが仮想現実から戻れなくなる」というもの。

異変に気付いた現実世界の技術者たちも、閉じ込められた三十万の命を救いだすため、立ち上がるが・・・。

現実と幻想、二つの物語が今交差する。

\*今現在、更新速度が低迷中です。不定期更新になりますがお許しください\*

## Prologue ユグドラシア・オンライン（前書き）

初めましての方もそうでない方も。

なるべく一週間に一回は更新したいと思いますので、しばらくの間、お付き合いをお願いします。

用語についての解説、訂正、質問等は要望があり次第追加していきます。

もちろん、それ以外でもポイント評価、感想問わず何時でもお待ちしております。

それでは、FANTASY ESCAPER（幻想の脱出者）

開幕です！

## Prologue ユグドラシア・オンライン

### 『オンラインゲーム』

この単語を聞いて、普通はこういうものを思い浮かべるだろうか。そう、普通はPCや家庭用ゲーム機で、ボタンを操作して遊ぶ、あのゲームに他ならない。

その常識が覆されたのが、20??年秋のこと。

世界で最も優秀とされたスーパーコンピューター、『ブレインマネージ電脳の処理者<sup>ヤ</sup>』が作り上げた、全感覚投入型システム、『VRS』を取り入れ、ゲームとしたものが開発された。

『ユグドラシア・オンライン』と銘打たれたマッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム、略してMMORPGは、脳に小型化した電極を取り付け、専用の機械に接続し、電気信号をメインサーバーに送って遊ぶ仕組みになっている。

仮想世界の中での時間の進行速度は、現実世界のおよそ六倍。

つまり、ゲームの中で一日過ごした後にログアウトしても、現実に戻ってみれば四時間しか経過していないことになる。

それを利用して、ゲームに没頭して現実世界で寝たきりになるような中毒者が出ないよう、現実時間の単位で八時間・・・つまり、ゲームの世界で二日間たった時点で、強制的にログアウトするような仕掛けが施してある。

強制終了の三十分前に警告が出され、セーブとログアウトを勧め

られるため、間違えて、とかついうっかり、というようなことは無い。

それでも強行すれば、最後にセーブした以降のデータが消去されることになる。

運営もそういった方法で、出来るだけ負担を少なくしているとはいえ、人間の動きなどという膨大な容量のデータを逐次処理できるのも、ひとえに『電脳処理者』のおかげである。

人間では何千万人が束にかかっても敵わないような演算領域と処理速度、この二つを持って世界最高のスパコンの地位を保っている。以上、閑話休題。

そして、次にノンプレイヤーキャラクター、つまりNPCをどうするか。

従来のオンラインゲームでは、クエストを出してくれたり、情報をくれたりする、プレイヤー以外のキャラクターは、固定されたメッセージを表示するだけだったが、VRMMORPGとなるとそうもいかない。

そのためか、高レベルのAI、人工知能を使用するという案は、比較的早期から出されていた。

『電脳の処理者』があれば、人工知能ぐらい造れるだろう、というのもあったかもしれない。

こうして生み出されたのが、『AI・ミコト』である。

最高スペックを持つスパコンとAI、二つの最新科学技術の開発者の息子が、幼いうちに亡くなってしまい、その子の名前を付けたAIだという噂が流れているが、真偽のほどは本人やそれに近い人々しか分からない。

もちろん、各プレイヤーがそんな裏事情まで正確に把握している

わけではない。

決められた手順に従って仮想世界に自身の意識を移したプレイヤーは、普通のオンラインゲームと同じく、自分のキャラクターの容姿を決め、名前をつけたり種族を決めたりしてゲームを始める。

そして、自分が本当にそのキャラクターになったかのように操作して、敵モンスターを狩ったり、プレイヤー同士で戦ってみたり、好きなようにアイテムを生産したりして楽しむ・・・はずだった。

実際にプレイヤーを募って行ったテストでも何の問題も発見されず、「絶対安心」「初心者歓迎」「自由に遊べる」が売りのはずの、『ユグドラシア・オンライン』

しかし、待ちに待った四月八日、全国一斉発売の日、午後八時ジャスト。

「Good life and have a nice day  
am」

突然、視界いっぱいに紅いテロップが映し出された。

その瞬間、ログインしていた全てのプレイヤーの意識が闇に刈り取られた。



## 第一章 A c t 1 運命の始動

二〇???年四月七日 P M 2 3 : 5 9

都心の某ゲームショップには、大行列ができていた。  
おそらくこの現象は、日本各地で起きているに違いない。

理由はもちろん、今日発売される「ユグドラシア・オンライン」  
を購入するため。

テストのテスターにも選ばれず、予約にも落ちた僕、仙崎竜哉  
は、こうしてようやく寒さがマシになってきたとはいえ、初春の真  
夜中にこんなところに並んでいる。

でも、全く寒さを感じない。  
理由はもちろん。

「うおおっしゃーっ 後五十秒・・・四十秒・・・」

「やってやるぜええっ！」

「いよいよあたしの天下ねっ！」

「ふっ・・・V R S か。どんなものかこの目で確かめてみようじゃないか」

などと、盛り上がる客の熱気で、熱いぐらいだから。

よく聞けば、最後の一人はあまり盛り上がってはいないようだけ  
ど。

「確かに楽しみなのは同じだけど、いい年した大人達まではしゃぎ  
過ぎだろ」

辺りの歓声にかき消されるような音量で、ボソツとつぶやいた僕  
の声を耳聡く聞き取って、間髪入れずに反論してきた少年がいた。

小学校のころからの幼馴染で、ずっと同じ学校に通っている、新

宮翔。

見るからにゲームよりスポーツ！といった感じで澁刺としているが、意外なことにそこそのゲーム好き。

「当たり前だろ、最新技術だぜ？ほら、初めて月に人間が着陸した時も同じような感じだったらしいじゃん」

「また古いネタを……。でもま、確かにそうかもね。最新技術って単語に良く反応するのは、子どもじゃなくて大人だからね。お、そろそろだよ」

「……3、2、1、……」

さながら、小規模な戦争が勃発した。

「俺が先だ！」

「ちよつと！どきなさいよアンタ！」

「んだとコラ！」

狭い入口付近に人がひしめき合い、ものすごいことになっている。ドアや店内の棚が、かなりの被害を受けているに違いない。

もつとも、僕もその列に押しのけられないよう、高校一年生のくせに、身長百五十センチという小柄な体を最大限に活かして、列の奥へ奥へと進んでいるから、人のことは言えた義理じゃないけど。

だって、「買えなかった奴のために余分に買っておいて、オークションで高値で売り付ける！」とか「今日来られない知り合いのために！」とかで一人何個も買う人もいるから、実は足りなくなる可能性があるんだ。

「ちよ、落ち着いて、落ち着いて二列にお並びくださいっ！」

しかしこうなることを予想してか、あらかじめ配置されていた複数の店員が、慌てて列を整理しようとするも、焼け石に水で全く効果がなかった。

「行くぞ、竜哉！」

「言うまでもないよ」

かくいう僕たちも、あらかじめ「三人」分のゲームディスクが買える金額を持ってきておいて、先にたどり着いた方が「三つ」買っておくという戦法で、棚へと駆けた。

なぜ二人じゃなくて三人分なのかというと、僕らには共通の幼馴染がいて、そいつも絶対やりたيدろうから、あらかじめ買っておいてやり、原価の一割増しで売りつけよう、という話だ。

多分、今を逃したら、当分このあたりでは買えなくなりそうだからね。

もしすでに彼女が持っていたりしたら、その時はネットオークションで高額で売りに出す。

「竜哉！取ったぞ！」

およそ一分後、真剣におしくら饅頭を演じていた人々をかき分けて、翔は綺麗なパッケージのゲームディスクの箱を、「三つ」掴みとった。

「会計よろしく！後で払うから！」

「任せとけ！」

威勢のいい返事を残し、翔の姿は再び人込みに隠れて見えなくなった。

用事が無くなってしまった僕は、迷惑そうな視線を受け、慌てて後退する。

やきもきしながら待つこと数分。

ボロボロになった翔が、みつつのゲームディスク戦利品を掲げつつ店の出口から姿を現した。

「って、ゲームを買うだけでどうやってそんなボロボロになれるんだ！」

普通に納得しかけた自分を心の中で一発殴り、慌ててツツコミを入れた。

「いやー。肘打ちを食らったり足で蹴られたりと大変だったぜー」  
言ってる内容と、その喜色満面の顔が、恐ろしいまでに不釣り合いで、思わず僕は嘔き出した。

「ごほつごほつ・・・とにかく無事に？買えたんだからいったん家に帰ろう。こんな時間からプレイするわけには・・・いくか。予め買ってある専用のヘッドギアは、枕とかで隠したら、寝てるのか遊んでるのか分からないな」

「おお！その手があったか！いやー、明日学校が終わるまでプレイできないと諦めてただけだな。さすがは『悪代官』」

僕は、迷わずにぎりしめた拳を、翔の鳩尾に叩きこんだ。

本来なら脳天をゴツンとやってもいいところだが、生憎身長百七十センチの翔に脳天チョップは難しい。

「だからその渾名で呼ぶなって何回も言ってるだろ？それに僕は自分がそんなだつて認めた覚えもない」

「な、なら反応しなくていいじゃねーかよー」

「明らかに自分の方を見て言われたら誰だつてそう思うさ」

さっきの掌底が思いのほか効いたらしく、なかなか復活せずに腹を押さえている翔を尻目に、僕は自分の家めがけて歩きだした。

「ちよつと待て！代金を返してくれー！」

「・・・チツ。分かったからさつさと帰ろう。そして一刻も早く口グインする！僕は『リュウヤ』って名前にするから」

自分の財布から、野口英世さんを五枚抜き、翔の手に押し付けると、代わりに紙袋からゲームディスクを一つ掴んで、再度歩き始める。

「名前そのまんまだな」

ようやく復活した翔を横目で見ながら、僕は期待に胸を膨らませてやや遅めの帰路に就いた。

「ただいまー」

等と言う訳もなく、こつそりと足音を忍ばせて自分の部屋へと辿り着き、慌ててドアを閉めて大きな音を立てるなどと言うベタな真

似はせず、最後まで無音で行動すると、ゆつくりと、丁寧に買ってきたばかりのゲームのパッケージを開けた。

どうせ翔は開けることを優先して、綺麗に破ろうなんてことは間違いない考えていないだろうな、と頭の片隅で思いつつ、中から説明書を取り出した。

「えーと、何々・・・あー、チュートリアルがあるのか。なら今読まなくてもいいな。よし早速ログインしよう」と

そう決めた僕は、別に広いわけでもない、機能優先のシンプルな部屋に置かれているベッドにダイブすると、枕元に置いてあるヘッドギアを装着し、左横についている挿入口に、ドーナツを薄くしたような形のディスクを入れた。

VRCを使う時は、基本安全な自室などで寝転がるのがルール。

肉体は寝ているのと同じ状態だから、車の中でヘッドフォンと間違えて装着したりするとかかなり大変なことになるし、そこまで行かなくても、立ったまま仮想世界へ入り込むだけで危険。僕はわざわざ危険に身を晒す趣味もないので、ルールに従って横になった。ウィーンと音がして、ヘッドギアが作動しているのが分かる。

さて、どんな世界が待っているのかな

そう思ったところで、僕の意識は一旦黒く塗りつぶされた。

「初めまして。私の名前はクレア。あなたの名前は？」

ふと優しい白色の光で目を覚ました僕の目の前には、まあテンプレに、純白く輝く綺麗なお姉さんが、鏡を持って浮かんでいた。

多分、名前を答えるとそれがキャラクターネームとして登録されるのだろう

「えーと、『リュウヤ』で宜しく願います」

名前はあえて簡単なものにしておいた。

いちいち凝ったのを考えるのも面倒くさいし、大抵のハンドルネームはリュウヤで通している。

それに、既に翔にこの名前で教えてあるしね。

「『えーと、リュウヤ』さんですね」

「ちっがーう！えーと、要らない！」

「ふふふっ。冗談ですよ、リュウヤさん。ではあなたの外見を設定してください」

NPCにからかわれたことに若干驚きと悔しさを覚えたものの、ときばきと予め決めておいた容姿に近いものを打ち込んでいく。

「うん、良い出来だ」

鼻屑目かもしれないが、現実の自分と違いかなりの長身にやや茶色がかった緋色の髪、オレンジの瞳で、他は残念ながら現実の自分と変えられなかった。

強いて言うなら、バランス補正でやや目が大きくなったぐらいか。眼鏡はアクセサリーとして装備されるので、一番髪と目の色にある金色のものにしておいた。

普通なら絶対そんな色のはつけないが。

最後に鏡を見せてもらったが、まあまあ出来だった。

「最後に、種族を教えてください」

これもよくあるパターン。

僕は基本前衛より魔法職の方が好きなため、魔法に適している『エルフ』にしておいた。

「ヒューマン」「ドワーフ」「バンパイア」「ジン」の四つと比べてもMPと魔法攻撃力が高い反面、物理攻撃とHPは低い。

決め終わると、クレアはNPCとは思えないような微笑みを浮かべて言った。

「では、後は向こうで説明します。良い人生を」

「わかりました。行ってきます」

そんな挨拶を最後に、僕の体が淡く発光し、目の前がグニヤリと歪んだ。

## Act 2 チュートリアル

「ここは……」

国境の長い トンネルを抜けると雪国であった。じゃなく、失神後の短い読み込み中の時間を超えると、異世界であった、と言った方が正しい。

マンションなど影すらも見当たらず、中世ヨーロッパ風の城が遠くにあった。

今僕がいるところは、森の入口。

どうやらここでチュートリアルが始まるようだ。

しばらくそこで跳んだり走ったりして、自分の身体感覚を確かめてみたけど、現実世界と全く変わりがなかった。

むしろ、体が軽くなったような気がする。

そんなことをしていると、ふと目の前に光の球が出現した。

だんだんとその光の球は人の形になってゆき、小説に出てくるような妖精が現れた。

掌に乗るような小さいサイズの妖精が、ゆっくりと口を開いた。

「初めまして、こんにちわ。私はフェア。これからチュートリアルを始めます。初めに言っておきますが、ここで学んだ内容を忘れた場合のことを考え、チュートリアルの内容を一冊に纏めた本がありますので、慌てずに覚えてください」

こいつがチュートリアルをしてくれるのかー、とあまりにもフェアが小さすぎて、何か頼りなく思いながらも、僕はうんうんと頷いた。

「まずはじめに、アイテムウィンドウの開き方から説明しますね」



およそ十五分後、だいたいの基礎知識を叩き込まれた僕は、初めての狩りへと行くことになった。

『ユグドラシア・オンライン』だけあって、今僕たちがいる大陸は、ユグドラシアという名前だそうだ。

で、そのユグドラシアにはかつて、一人の創世神がいた。数百年前に、異次元の魔物を率いた邪神が現れ、ユグドラシアを蹂躪していた。

その邪神や魔物と戦い、創世神は深手を負うも、見事邪神を打ち滅ぼした。

が、魔物を討伐し終える前に、傷で命を落とした。いや、その寸前で自らの傷を治癒するため、千年間の眠りに入った。そして残った魔物が繁殖し、人間と競い合いながら順調にその数を増やし、今に至っていると。

なんともありがちな展開だが、それはしょうがない。RPG、特にMMOとなると、大抵のストーリーは使い古されているからね。

紆余曲折、今回僕が狩るモンスターは、レベル1の<チャイルドウルフ>。

こいつを五匹倒せば、チュートリアルは終わり、次の街へと進む

ことができる。そしてそれから個人の自由だ。

ちなみに次の【城下町：アルザス】からは、他のプレイヤーと出会うこともあるため、行ったらまず翔に似た人を探さなければならぬ。

「お、いたいた」

森の出口付近で、小さな獣の影が五つほど、動き回っているのが見えた。

頭の中で「ウィンドウ表示」等と思うと、目の前に「MAP」「キャラクターデータ」「アイテムインベントリ」といった、これまたM M O R P Gではおなじみのウィンドウが現れる。

もつともこれらすべてが一斉に表示されるわけではなく、「MAP」と思えばマップが、「現在のステータスを確認したい」と思うとキャラクターデータが表示される。

今回の場合、＜チャイルドウルフ＞の上には、それぞれのHPバーとレベル、＜チャイルドウルフ＞という名前が表示されている。もちろん、見たくなければ見えないようにすることも可能だ。

僕はもらったばかりの装備、＜初心者の上着＞＜初心者ズボン＞＜初心者靴＞＜初心者短剣＞をつけて、チャイルドウルフにこつそりと忍びよる。

そして、気付かれないまま、彼らまで五メートルの距離に達した時、僕は勢いよく飛び出した。

手に持った短剣を振り上げ、一気に切り下げる。

腹を切り裂かれて、紅いエフェクトを弾けさせたチャイルドウルフの身体が小さく弧を描いて飛び、鈍い音を立てて落下する。

僕はその子狼から眼をそらし、僕に気付いて襲いかかってきた他の四匹に向き直る。

正面にいた子狼を蹴飛ばし、体を捻って首筋にかみつこうとしていた別の子狼の背中に思い切り振り下ろす。

そして横から鋭い爪でひつかこうとする子狼を、攻撃が当たる寸前で斬る。

その子狼の体がオレンジに光り、一瞬でライフが〇になる。どうやらクリティカルヒットしたようだ。

が、ほぼ同時に背後から襲ってきた二匹をかわすのは不可能だった。

僕の満タンだったHPが、大きく削られ、残り七割となった。

「ちっ」

右肩と脇腹に鋭い痛みが走るが、それを無視して、腕を素早く振るい噛みついた二匹を払い落とす。

そしてそのまま片方を左手で地面に押さえつけ、手早く急所を攻撃する。

紅いエフェクトが迸り、その子狼はHP0になって霧散した。

ゲームだから、ゴミを捨てようが、モンスターを倒そうが、全て粒子となって土に還る。

もっとも、ゴミを捨てるのはマナーに反するため、インベントリに備え付けられている「ゴミ箱」に放り込むか、備え付けのゴミ箱に入れるのが礼儀、だそうだ。

チュートリアル時に「豆知識ですよ」と言って教えられたけど、道徳的に常識だと思う。

「おっと、こんな考え事をしている暇はなかったな」

グルルル、と低く唸る子狼が眼前に迫ってきて、我に返った僕は、短剣を振り上げ、切っ先を子狼に突き刺した。

そのまま真横に引き裂くと、その子狼はもう慣れたエフェクトと共に消失した。

残るは初めに弾き飛ばした二匹のみ！

「ここらで一つ、スキルでも使ってみようかな！」

僕は、にやりと不敵に笑って呟いた。

スキルと言うのは、所謂技の分類のこと。

全種類の武器＋ 分だけ存在しており、レベルアップ時に得られる三のスキルポイントと、武器を使うことで得られる熟練度を振り分けて、「アーツ」と呼ばれる個々の技を習得することになる。

たとえば、【片手半剣】というスキルに、五スキルポイントを振り、熟練度を五まで上げると、二重連斬 というアーツが使えるようになったりする。

だから、「あ、間違えたアーツだった」と小声で言いなおしたりしたが、それは一生誰かに話すこともないだろう。

このスキル制度が原因で、『ユグドラシア・オンライン』には、明確な職業が存在しない。

【長剣】スキルを極めれば剣士、【魔法】スキルを究めれば魔法使いを自分で名乗ることはできても、あらかじめ決められているわけではないから、剣を持って魔法を使うことも可能ではある。

杖のスキルには、魔法攻撃力増加のものがたくさんあるので、魔法が使いたければ杖を持つのが薦められるけど。

＋ としては、【索敵】や【収集】、【見切り】、【魔法】など武器を使わなくてもいい物、「レアスキル」と呼ばれる、その名の通り一定の条件を満たさなければ使えないものもある。

「レアスキル」の取得方法では、称号と呼ばれるシステム、が力ギとなっている。

土属性の魔法を最後まで究めれば【錬金術師】という称号がもらえ、レアスキル【錬金術】がGETできる、などといった風に。

そして、『ユグドラシア・オンライン』をプレイする全てのプレイヤーが、一番憧れているのが【パーソナルスキル（PS）】で、「全プレイヤーの中でただ一人しか使えない固有スキル」。

真っ先に特定の条件をクリアした人に与えられるそれには、とても強力なものが多い。

これに関しては、欲しいからと言って攻略サイトなどを見ることもない。

つまり、「誰かがとり方を発見して攻略サイトに載せた」場合、それはもう取得されている可能性が高いため、見るだけ無駄な場合が多いからだ。

それに誰も、対人戦では重要な切り札となる自分の固有スキルなんて掲載しようとは思わないだろう？

今の僕が使えるアーツは、一番初めに貰ったスキルポイントで得た【雷系魔法】の第一段階目、つまり熟練度0でも使える初級アーツ ライトニング のみ。

これは威力もまあまあで、攻撃速度も速く、なおかつ貫通性能と麻痺を持っているという優れ物だ。

フェアに聞いたところによると、テストからプレイしていた人でも、使うことがあるのだとか。

そろそろ回復して立ち直った子狼二匹が、同時にこちらに向かって駆け出す。

脳裏に ライトニング と思い浮かべただけで、手が勝手に動いて何も無い空中に魔法陣を刻む。

（分かってはいたけど、やっぱり魔法は発動に時間がかかる・・・！）

詠唱式と魔法陣式の二つの発動方法があり、魔法陣式の方が時間はかからないが攻撃力、効果範囲（範囲魔法でなければ飛距離、有効射程）が三分の二になってしまい、詠唱式の方だと時間がかかるが性能に優れている。

子狼が僕の無防備な身体に到達するのと、魔法陣が書きあがると、どちらが早いかな！

「グアルルルッ！」

「喰らえ！」

もう子狼の牙が柔らかい僕の喉元まであと二十センチぐらいに迫ってきたその刹那、魔法陣が完成した。

明るい黄色に輝いた魔法陣から放たれた雷撃が、二匹の子狼をまとめて葬り去った。

「グア、ガル・・・・・・・・ル・・・・」

断末魔の呻きを漏らして、子狼は霧散してその姿を消した。

「ふう……。お、レベルが3に上がってる！」

スキルポイントは温存し、自分のステータスを強化するパーソナルポイントは、一レベル上昇につき三ポイントもらえるため、STRにDEX、VITやINT、AGI、LUKのうち、AGIに3とINT6を振った。

さっきまで持っていた短剣を腰の鞘に戻し、僕は次の街、アルザス目指して歩き出した。

現実時間

A  
M  
0  
1  
:  
0  
0

## A c t 2 チュートリアル（後書き）

よくわかる解説）

クリティカルヒット・・・急所に命中させた物理攻撃や、暴走して威力が上がった魔法のことを指します。

デレイトタイム・・・一度使ったアーツがもう一度使えるようになるまでの時間です。

S T R・・・筋力、物理攻撃力、アイテムの所有量に影響します。

アイテムを持ちすぎると、実際に重い荷物を持っているのと同じで動きが遅くなってしまうです。

D E X・・・命中力、クリティカルヒット率に影響します。これを上げると生産系スキルの成功確率も上昇します。

V I T・・・防御力、被物理、魔法ダメージに影響します。これは防具で底上げも可能です。

I N T・・・は、知性、魔法使用に影響します。魔法攻撃力、射程距離などが向上します。

A G I・・・は敏捷、呪文の詠唱時間や魔法陣を書く時間など、デレイトタイム、移動速度などに影響します。行動全般の速度、言い換えてもいいかもしれません。



### Act 3 仲間との合流

城が見える方向へ、しばらく歩いて行くと、急に森の木々が途絶え、辺りに明るい日差しが差し込んだ。

その先に広がる光景は。

「うわぁ！凄いリアル！」

空は現実世界と同じ青く澄んでいて、ところどころに雲が浮かんでいる。

そして目の前には、川が流れていて魚も泳いでいる。

かかっている橋を渡って少し歩けば、もう次の街、アルザスだ。

家も木でできたものからコンクリートを使った物までさまざま。

家の木材にある木目や、大通りの石畳の模様まで、細部までリアルに作りこんであって、とても綺麗だった。

森の中でも小鳥の囀りや木々のそよぐ音、一枚一枚模様の違う葉など、本当にゲームなのか、と疑うことはあつたけど、こうもリアルな世界を再現できる技術があつたとは。

そんなことを考えていると、脳裏にピロリンツという効果音が鳴り響いた。

ウィンドウを開けてみると、どうやらメールが届いているようだ。NEW！というマークが描かれているが、受信ボックスにはまだ運営からのメールと、【送信者：クラウド】となっている件のメールだけなため、一発でどれが新着のメールかは判別できる。

ウィンドウを指でたたくと、ブーンと音を立てて、メールが開いた。

【送信者：クラウド

件名　：合流しようぜ

本文　：よお、お前は高校生の仙崎竜哉か？違ったら悪い。まあ竜哉なら俺が誰かぐらいわかるだろうから、マップで『シドの酒場』を探して、そこまで来てくれ。待ってるぞ】

「翔だな。妙なハンドルネームにしたな、あいつ。よりもよって『雲』とはね」

メールの送り主が誰か察した僕は、指示通りマップを開いてみる。「シドの酒場・・・シドの酒場つと。げ、かなり距離があるな」

マップに表示されている僕の現在地は、南街道の入口付近。それに対して、シドの酒場があるのは、東街道の中間地点ぐらいか。

【送信者：リユウヤ

件名　：R e　合流しようぜ

本文　：了解。今南にいるから、そっちに向かう】

そう返信すると、僕はウィンドウを閉じて、やや速足気味に歩き出した。

本当はゆっくり見て回りたかったがしょうがない。

歩いている途中、大柄なプレイヤーにぶつかってしまったが、これも普通のMMORPGとは違うところだな、とVRSの技術を改めて実感した。

そして歩き始めてから十分後。

『シドの酒場』と書かれた看板を発見し、その店の中に入る。

中世ヨーロッパ風の石造りの建物で、大きさは現実の店と変わらないくらい。

木製のドアを開けると、チリンチリンと来客を知らせる鈴の音が鳴った。

「いらつしやいませ、お一人様ですか？」

「いえ、待ち合わせをしているんですが・・・」

NPCとは思えない自然な動きで現れた受付嬢に返事をしようとする、それをさえぎるかのように大きな声がした。

「よ、見つけたぜたつ・・・じゃなかった、リュウヤ。こっちだこっち」

叫びながら手招きしている男の方に意識を向けると、<クラウド：LV3>と表示された。

リュウヤと同じく長身で、短い金髪に碧眼。現実の顔を元にしているはずだけど、結構様になっていた。

「今行くよー！・・・すみません、連れが呼んでいるので失礼します」

翔、いやここではクラウドの方に向かって叫び返すと、受付嬢の方に向き直って、一言謝罪した。

いえいえ、どうぞどうぞ。と終始笑顔で応対していた受付嬢は、どう見ても感情のある、普通の人間にしか見えなかった。

他の客の迷惑を顧みず、二人用のテーブルに座って大声を上げていたクラウドの向かいの席に僕が座ると、クラウドが口を開くのが同時だった。

「よし、リュウヤ。さっそくフレンド登録申請するから、承諾よろしく！」

「了解。ん、承諾したよ」

頭の中に、『クラウドからフレンド申請がありました。承諾しますか？』というテロップが効果音とともに現れたので、その下にあ

ったYESの方を押すイメージを浮かべると、文字列が切り替わって、『フレンド申請を承諾しました』と現れた。

「どうやら、指で操作しなくても、イメージだけで動かすことが可能らしい。」

「OKOK。じゃ、飯食ったら早速パーティ組んで、レベル上げ行こうぜ」

「そうだね、今武器とか防具買ってもすぐに新しいものが必要になるわけだし、これでいいや」

今の僕たちが装備できるのは、どう考えても一番安い、性能の低い装備だけ。

ならばばらくはこれで我慢して、レベルがある程度上がった後にそろえた方が、節約にもなるし、時間も省ける。

それにこの世界でも腹は減るし、喉も渴く。睡眠はとらなくても問題ないけど、状態異常に罹りやすくなるらしい。

メニューを見ると、「ハンバーグ」「ステーキ」「パスタ」など、割合元の世界にもあるような品物が並んでいた。

「どれにす「熟成牛のステーキ」・・・一番安いもので」

どれにする？と聞こうと思った時には、既にクラウドは店員を呼んで注文をしていたため、仕方なく一番安いものを選んだ。

「よりにもよってステーキって。金かかるよ？」

「いいのいいの。ユグドラシア・オンライン初の食事なんだから、盛大にやれば」

小一時間ぐらい、「節約」という熟語について、クラウドにみっちりと説教したい気分だが、もちろん実行移したりはしなかった。代わりにグーで殴っておいたが。

「いってえな！何するんだよ！」

「お前なあ・・・今財布に何円持つてるんだ？」

個々の通貨の単位は「セル」だが、1セル＝1円が相場なので、プレイヤーは皆分かりやすく円で通しているようだ。

「きつかり1000円」

「すこし足りないだろうが！」

さっきのステーキは、消費税込みで1050円。

そこまで再現しなくてもいいと思うが、どうやら此処の王に払う税金らしい。

「あ、やべホントだ。リュウヤ　！少し貸し」

「きつぱりと断る！」

て、まで言う前に断った。

自分の所持金もちょうど千円だし、一番安い品物を注文しても、残り七百円しか残らない。

「そ、そんなあ・・・」

「稼げ」

頭を抱えて悲嘆に暮れるクラウドだが、現実は厳しかった。

「お待たせしました」

テーブルに突っ伏していたクラウドが視線を上げると、そこには出来たてで湯気が立ち上っている、美味しそうなステーキと、その隣に載っているおにぎり三つが視界に入った。

トレイを持った女店員は目に映っていない。

ごくっ・・・

そんな擬音が今にも聞こえてきそうな表情でトレイを凝視するクラウドをしり目に、僕は立ちあがって店員からおにぎりとステーキの載ったトレイを受け取った。

「あれ？食べないの？クラウドさん？」

あらかじめ言うておくが、僕は断じて、サディストではない。

「五十円ぐらい貸してくれてもいいだろ？ ケチかお前は」

「しょうがないなあ・・・」

溜息をつきながらしぶしぶ五十円を取り出して渡すと、クラウドの眼がキラんと輝いた。

「でもステーキは半分もらうよ」

が、次に放たれた僕の言葉で、ゴンツという音と共にテーブルに倒れ込んだ。

「鬼かお前は！」

「失礼な、守銭奴だよ」

すました顔で言うのと、ずずつとコップに入った水を飲む。

「十分酷いじゃねーか！」

「で、くれるのくれないの？」

「誰がやるか！」

なお抵抗するクラウドの方を見て、ぼそつと一言。

「五十円」

「その手には乗らないっ！」

「おねーさん。この人千セルしか持ってないのに千五十セルのステーキ頼んでまーす」

わざわざ右手を拡声器の形にして店員の方を向いて叫ぶ。

「ちょ、おまつ！ なにいつて」

「で、くれるのくれないの？」

「・・・あげますよ、あげばいいんでしょこの野郎」

「分かればいいんだ」

こうして僕は、五十円でステーキを五百円分、食べることができた。

「あー、食べた食べた」

おにぎり三つとステーキ半分を食べ、腹を満たした僕と哀れなク

ラウドは、パーティを組んで狩りに出かけることになった。

「不幸だ・・・」

空になった自分の財布を眺め、溜息をつくクラウド。

「不幸じゃない、不注意だよ」

「原因のお前が何言ってるんだ！」

「いやいや、君が財布の中身も確認しないで『いいのいいの。ユグドラシア・オンライン初の食事なんだから、盛大にやれば』とか言っただけでしょ。僕は止めたよ？一応」

正確には止める前にすでに注文しちゃってたのだが、なおさら僕に責任はない。

「まあいい、狩りに行くぞ！」

「OK、ドロップアイテムでも売って、金を稼がないとね」

「そのことはもう言わないでおこう、うん！」

東側にある初心者森を抜けると、『カベルネ湖』というところがあり、そこでレベル5の<sup>シルバール</sup>銀狼を狩ることになった。

目的地に向かって走りながら、僕は今回のネタをずっと忘れないと、心の中で誓った。

「お、もう着いたみたいだな」

表示されていたマップが「初心者森」から「カベルネ湖」に切り替わった。

「だねー。ところでまだ聞いてなかったんだけど、これからどんなふうに育てるつもりなの？」

「剣使いかな。まず目標としては、称号<守護者><sup>ガーディアン</sup>とか<闘剣士><sup>グラディエーター</sup>とかを狙ってる」

なるほど。なら魔法使いの僕とは相性がいいたいだ。

これで回復職が一人と、もう一人ぐらい盾役がいれば、完璧なパーティーになるだろう。

「僕は魔法職だから、前衛は頼むよ。今は ライトニング しか使えないけど、レベルが上がったらもう少し強力なものも使えるようになるだろうから」

「おう、任せとけ！」

どん、と胸をたたくクラウドは、まあなかなか頼もしかった。



## Act 4 レベルアップ

「ふう・・・よし、これで十三匹目だ！」

銀狼を狩り始めてから約二十分。

クラウドは「どつちがたくさん狩れるか勝負だ！」と言って走り去っていき、僕が盛大にため息をついていたことは記憶に新しい。

あの時のクラウドは、「前衛は任せとけ！」とか言ってた人と同一人物とはとても思えなかった。

前言撤回できるなら、「なかなか頼もしかった」とかいう発言は取り消したいよ。本当に。

それでも順当に経験値は溜まり、今はレベル6になった。

パーソナルポイントは相変わらずA G Iに3、I N Tに6振って、スキルポイントは全部雷系魔法に。

おかげで新しいアーツ、ホーミング・サンダーとフラッシュユを覚えることができた。

二十分間、できるだけライトニングを使うようにしていたら、熟練度が上がっていたみたいだ。

追尾型のライトニングと、辺りに膨大な光量を出現させて、敵の眼をくらませる、スタングレネードみたいなアーツ。でも自分には効果がないっていうなかなかに優れ物。

それに、まだ試していないけど、面白いことも思いついた。

「クラウドー、何匹狩れた？」

「今十二匹目狩り終わったところ。そっちは？」

僕は、自分の狩れた数を知っているため、にやりと笑った。

「知りたいか？」

「おう、もったいつけないで早く教えろ」

少し間をあけて、効果を高めると、弾んだ声で言った。

「十三匹だ」

「んなあ！負けた！防御が紙のこんな奴にいいい！」

「当たらなければ問題ない！」

AGIを上げているせいか、結構素早く動ける。

不意を突かれなければ、噛みついたり引つかいたりするしか能のない、銀狼にはそう簡単にやられはしない。

パーティを組んでいるから、経験値も平等に分配なんだし、と銀狼に特攻をかけようとするクラウドを押しとどめ、湖の近くに座る。「そろそろもうちょっと奥に行かない？銀狼狩りも飽きてきたし、あいつらレベル5だからそろそろ経験値も足りないしね」

鞆を開いてみると、銀狼がドロップしたらしいポーションがいくつかと、およそ七百円、そして嬉しいことに杖が入っていた。

INTが5上がる補助効果付きで、このレベル帯で装備できるものにしてはそこそこ高性能だった。

早速装備してみると、手のあたりに光の粒子が舞い、細長いカシの木でできた杖が召喚された。

先端が銀色に輝いていて、アイテムの名前が「シルバーロッド」。安直な命名だけど気にはいけない。

「そうだな、ポーションも手に入っだし……っておいリュウヤ！良いもん持ってたな！」

「銀狼がドロップしたんだよ。たしか十三匹目のが落としたかな！」もちろん嘘です。そんなことは覚えていないし、戦闘ログを見てみると、だいたい六〜七匹目のが落としていた。

「マジで！よし俺も防具や長剣、片手半剣、短剣のどれかが出るまで戦つて」

「いいから行くよ。奥にいるモンスターの方が強い装備とかドロップするだろうしね」

それに、他のプレイヤーがいればパーティ組めるかもしれない。むしろそれが結構大きい理由かな。

クラウドはどうも当てにならないし……。

「そうか。それもそうだな。じゃあ出発！」

「やれやれ、扱いやすい奴」

やや呆れ気味に肩をすくめると、意気揚々と歩きだしていたクラウドがくるつと振り向いた。

「何か言ったか!？」

「いやいや別に」

耳いいんだな　とか思いつつ、顔の前で手を振ってごまかし、彼の後について行った。

歩いても歩いても、辺りに広がる景色はところどころにある湖と草原、林。

ときどき出てきたモンスターは普通に倒せたが、狩り場にするほどでもなかった。

数人のプレイヤーとも出くわしたけど、一心不乱に狩りに集中していて、気付かれずらしなかった。僕は影が薄い方だとは思ったことがないんだけどね・・・。

「そろそろじゃないか？次のエリア、『カベルネの泉』」

「そだね。どんなモンスターがいるんだろうな。銀狼の次はあれか、  
ゴールドウルフ  
金狼か」

金狼ってどこかの神話に出てくるライカンスロープを漢字に直したものであるらしいけど、多分ゴールドウルフの方の線が強いな。  
「あー、ありそうだなそれ・・・っておい、あの辺に何かいるよーな」

クラウドが指さした先には、金色に輝く何かが、二匹いた。

「もしかしくなくても、あれってどう見ても金色だよな」

「予想的中、って感じたな」

少し近寄ってみると、<金狼 LV10>と表示された。

「………なんというか、アレだな」

「ネーミングに困ってたんだろうね、きっと」

予想通り過ぎて、少し呆れたが一応相手はLV10。

物音をたてないように、こっそりと近づいた。

「ポーシヨンの準備は良いな」

「もちろん」

「よし、じゃあ勝て」前衛は今度こそ任せたよ」……任せられてやるよ」

また勝負とか言いそうだったから、先に言葉の槍で封じておいた。

「行くよ、フラッシュ！」

これは、魔法陣や詠唱を必要としない魔法。

攻撃力も状態異常もない代わりに、即効性を求めた魔法なわけだ。

もちろん、一回使った後は五分間使えない。じゃないとMPが尽

きるまで連発できることになる。

そんなことを思ってる最中には、眩しい光が出現し、辺りにいる

自分以外の生き物全ての眼をくらませている。

「ぎゃああああ！眼が、眼が！」

「あ、わるいわるい ライトニング ホーミング・サンダー」

それはクラウドも同じだったようで、眼を抑えながらのたうちま

わっていた。

心を込めていない謝罪を一応しておく、僕は順番に二つの魔法

を発動し、一匹目の金狼に攻撃を仕掛けた。

「ギャルルッ！」

二つとも命中したが、それだけで死んではくれない。

レベル10にもなると、HPが結構ある。加えて狼系は攻撃力と

スピードも高い方だ。

「援護するから行け！クラウド！」

「委細承知！」

フラッシュ による閃光も晴れ、見事復活を果たしたクラウド

は、うりやあああつと奇声を上げながら、金狼目掛けて突っ込んでいく。

「ったく、バカかあいつは。忍び寄るとか背後とるとかできないのかな、まったく。ライトニング ホーミング・サンダー」

同じく二連発で魔法を発動。

「ギャ、ル、ル」

クラウドが向かって行ったのとは違う方の金狼に仕掛けたのだが、何か様子がおかしい。

何でだろう、と考えてみたが、すぐに答えは見つかった。

そういえば今まで一度もかかったことはないけど、この魔法は一応麻痺効果付き。

あの金狼は麻痺状態になったに違いない。

「ほんつと便利だな、この魔法」

M P の都合上、このまま乱発するのはよろしくない。

持ち前の A G I を活かして素早く接近すると、杖を使って、噛みつきと跳びかかってきた金狼を叩き落とす。

パソコンでやるのとは違って、こういう応用技も自由自在なのが、この V R S を使った『ユグドラシア・オンライン』。

「クラウドー、ほれ。パス！」

テニスのラケットのように杖を振り、ボカッという音がして、金狼の身体が弧を描いてクラウドの方に跳ぶ。

一匹相手に善戦中のクラウドは、突然の乱入者に一瞬、相手の金狼から注意がそれる。

「危ない！ ライトニング」

僕が叫ぶと同時に、二匹の金狼がクラウドの腰に噛みついた。クラウドの H P バーが半分ぐらいまで削られる。

「ちっ・・・痛えな、この野郎！」

シュツと空気を裂く音がして、クラウドが 連衝斬 を発動したと分かった。

あの技の止めの一撃、突きが初めの金狼の腹に命中する。

残りの一匹には、僕の放った雷撃がぶつかった。

僕も二匹の金狼に向かって走りながら、鞆ウィンドウを開いて装備をナイフに持ち変える。

手元で光の粒子が舞って、それが収まるとさっきまで持っていた杖は消え、手には細身の短剣が握られていた。

「行くぞ！トドメだ！」

「喰らえ！」

別々の掛け声だけど、発動したアーツは同じ。

「「連衝斬　！」」

紅いエフェクトが弾け、二匹の金狼はついに消滅した。

大量の経験値が入り、レベルが7から9に上がったことを知らせる効果音があった。

まだ6だったはずだけど、どうやらここに来るまでにレベルアップしていたらしい。

ポイントの振り分けはいつも通りに行った。

「お、おいリユウヤ！アレ見ろ、アレ！」

「何？そんなに慌て・・・て・・・！！！」

興奮と驚きの入り混じった声がして、彼の指さす方を見ると、僕も絶句してしまった。

先ほどまで木が生えていただけのところに、蒼い光が現れていて、奥に行けるようになっていた。

「怪しくないか？」

「滅茶苦茶怪しいね。うん」

行かない方がいいと思うよーと言おうとしたけど、やめておいた。無駄に決まってる。

「よし、行ってみるぞ！嫌とは言わないよな！」

「あーうんそうだねー。行ってみよ　か　」

分かりやすい友人の行動に、僕は今まで一番大きな溜息をついた。



## Last Act 牢獄までのカウントダウン

「うりゃー！待ってるよ、未知の世界！」

「はぁ・・・未知の世界を求めたいんなら、そんな怪しそうな所に行かなくても、大抵のところは未知な場所だよ。今の僕らにとって最後の最後に、光の中に足を踏み入れるまで、いや一歩中に入った途端、足元から身体が消えるような感覚と共に、転移させられてからも、今回の冒険には、心情的に反対だった。」

「やっぱりこうなったあああああーーーーー！」

転移の瞬間、僕の叫びが虚しく辺りに響いたとか響かなかったとか。

ヒュオンツと言う音とともに、僕たちは湖の前に出現した。

穏やかな光が木々の間から差し込んでいるが、それすらも今の僕らにとっては死亡フラグになりえる状況だった。

だって、どこからどう見ても、どう考えてもこのエリアのボスモンスターとの戦闘、としか思えない。

マップで確認してみると、【カベルネの精霊湖】とかいうボスが住んでいそうなネーミングだし、ちょうど戦闘しやすいような円形の草地の真ん中に、一本の樹と湖があり、近寄った瞬間、ボス戦が始まりそんな感じになってるし、しかも戻る方法がないし！ここに



転移させられた光はもうないし、ここでボスを倒すか、逆にパーティが殲滅するしか帰る方法がなさそうだし。

ふう・・・落ち着け、まずは冷静に状況を把握しよう。

僕が持っているのは、HP回復ポーションが四個、MP回復ポーションが二個。

そしてクラウドが持っているのはHP回復ポーションが六個。大丈夫、まだ勝ち目はある。

そう思った瞬間、僕の甘い思考は打ち崩された。

あのクラウドが、ぶるぶると震えながら、前に足を進めようとなない。

拳句の果てに、こっちを見ながら、とんでもないことを言い出した。

「な、なあ・・・知ってるか？このエリアのボスモンスターってさ、『カベルネの泉』の最奥部にあるんだよ、決してこんな精霊湖にはいないんだ」

なんだ、じゃあ思い違いか・・・とホツと胸を撫で下ろしたら。

「ここ、レベル二十のボスモンスター、アクア・ドラゴ＜水精竜＞の住処。レベルはそこそこでも、攻撃力や防御力はエリアボスのおよそ二倍・・・そんな強さを持つ、竜の眠る湖なんだよ、ここは」

「お前、確実にバカだろおおオオオ！」

「言い返せねえなあゝいやゝ、あはは」

「あははゝじゃない！」

この時の僕は焦りすぎて、気が付いていなかった。

さつきから、随分大声を出していることに。

そして、空気を重々しい唸り声が支配していることに。

「グ…グルウオオオ！」

「………！」

ギギギギ、と錆びついた歯車が鳴らすような音が、実際になっ  
ているかのような錯覚。

それぐらいゆっくりと、僕は恐る恐る、横を向いた。  
するとそこにはやはり、青色の炎を鼻から噴き出した、全身が蒼  
い西洋風のドラゴンが。

「しゃーないな、やるだけやってみるか！眼を閉じててよ！

なんだか、この世界に来てから、諦めが良くなった気がする。

「フラッシュ！」

この魔法は、どうやら閃光を発するのは一瞬のことらしい。

その後は、眼をやられた敵が一時的に失明のバッドステータスが  
付加されるとか。

これは、眼を剣で斬ったり、弓で狙撃したりした場合にも起きる  
ことだ。

だから、初めの一瞬だけ目を閉じていれば、後は普通に行動でき  
る。敵も、味方も。

「行くぜ！」

両手で眼を覆っていたクラウドにもそれは伝えてある。

すぐさま飛び出していったクラウドの手には、短剣が握られてい  
た。

が、ここで大きな誤算があった。

………

・

眼が見えなくなった水精竜は狂ったように暴れ出した。

「がっ！」

ブオンツと音を立てて振り回された、水精竜の尻尾がモロに腹に命中し、クラウドは大きく後方に跳び、近くの樹にぶつかった。今の一撃だけで、もう彼のHPは残り三割を切っている。

「ライトニング！」

が、クラウドが飛び出すと同時に発動していたアーツにより、雷撃が水精竜を襲う。

詠唱時間はAGIによって短縮することも可能なうえ、熟練度によっても長さは変動するようだ。

今の僕は、ライトニングなら五秒で発動できるようになっている。

「ライトニング！ ホーミング・サンダー！」

作戦変更。

あいつの眼を、ホーミング・サンダーで集中的に狙う！

「クラウド！ 立てるか？」

矢継ぎ早に魔法を連発しながら、唸るように尋ねた。

その瞬間、水精竜が生み出した水の弾丸が辺りに降り注ぐ。

大急ぎで後方にさがって回避すると、仕返しとばかりにライトニングを打ち込む。

もう僕のMPは残り半分。

対する水精竜のHPは、ようやく一割削れたかな？という程度しか減っていない。

「おう、畜生・・・舐めやがって、あのくそドラゴン！」

「舐められて当然かもね。それぐらいの差はあるよ」

溜息がまた漏れる。これもまた癖になってるみたいだ。いやだなあ・・・。

「グギヤアッ！」

「うおっと」

水精竜の羽ばたきによっておこされた突風が、渦となって辺りを襲う。

「あいつ、魔法も使えるの！」

「みたいだな！」

うわあ・・・厄介な。

こりゃ勝ち目はないな、うん。

「ホーミング・サンダー　　ホーミング・サンダー　！」

剥き出しになった水精竜の眼を、集中砲火で狙い続ける。

「短剣のアーツに便利なのはいいのか？」

「あいにくと、衝連斬　と　ダガースロー　！これしかねえな。

ナイフをもう一つ生み出して、それを投げつける技だ。これで俺も目を攻撃するか」

ダガースロー・・・あまり強そうな名前じゃないな。

むしろ遠隔攻撃ができるっていう以外に特徴あるアーツではなさそうだ。

「仕方ないな、あまりやりたくなかったんだけど、新技行くぞ！

ライトニング　ホーミング・サンダー　　ライトニング　　ホー  
ミング・サンダー　！」

順番に発動しているだけに見えるけど、実は違う。

一番初めの　ライトニング　は、魔法陣。

ホーミング・サンダー　は詠唱。

次の　ライトニング　は魔法陣。

最後の　ホーミング・サンダー　は詠唱。

魔法陣を書いている最中に詠唱をし、魔法陣を書き終わったらまた新しい魔法陣を連続で描く。

裏技を使って、魔法の多重発動。これが僕の最大の新技。

レベル上げ中に思いついて以来、試したことはなかったけど上手くいった。

鞆の中からMP回復ポーションを取り出し、親指で蓋を弾く。

ひと思いに一気に飲み干すと、また魔法を発動する。

その間も、麻痺効果がかかったのか、水精竜は攻撃を仕掛けてこない。

「今のうちに行くよ！」

「応！」

威勢のいい返事を残して、水精竜に向かって突撃するクラウド。それに反応してか、ピクリと水精竜が動く。

麻痺状態が解けたのか！

「お前完全にバカだろ！　ダガースロー　使えって！」  
「あ！」

思い出したようにはっと口に手を当てるクラウドだが、それは同時に大きな隙を作ったことをも意味する。

水精竜の口から、蒼い炎のブレスが放出される。

水とは対極の存在ともいえる炎だけど、ドラゴン種だけあってブレスによる攻撃もできるようだ。

黒い影が猛スピードで動くのが視界に入った。

紅いエフェクトが弾け、思わず僕は目を閉じてしまった。

ファンタジー小説なら、ここで誰か テストの時からプレイしていた強い人が助けに来てくれるんだろうが……。

あいにく、そういうことはなかった。

「クラウド！」

クラウドのHPは、一瞬で〇になった。

「ちっ……これまで……か。これを……使ってくれ」  
ポイツと放られたのは、ポジションと短剣。

それを投げ終える頃には、クラウドの身体は薄れていき、しまいには光の粒子となって消滅した。

「グギヤアアアッアアッ！」

なんの意味も持たないはずの竜の咆哮が、今の僕には「よし、次

はお前だ！」と勝ち誇っているように聞こえた。

「くそっ！負けてたまるか！　ライトニング！」

何かないか・・・何かないか。状況打開の手が！

「とりあえずこれでも喰らえ！」

ホーミング・サンダー　を詠唱しながら、僕はさっきもらった短剣を投げつけた。

万が一にでもあたってくればいい、と思って投げたその短剣は、見事に水精竜の右眼に命中した。

が、そんなまぐれのような幸運でも、HPはあまり削れない。

水精竜のHPは残り五割。

が、怒らせる程度には十分だったようだ。

「グギヤラアアッ！」

今までに倍する音量で、雄たけびを上げる水精竜。

と、不意に僕は今までに読んだことのある、ファンタジー小説の中にこういう場面があったことを思い出した。

自分が撃っていた電撃に負けないスピードで、脳裏を思考が駆け巡る。

「できるかどうかは分からないが、やってみるしかないな！」

もうひとつ、自分が持っていた短剣とHPポジションを握りしめ、腕や尻尾を振りまわす水精竜に接近する。

自分のAGIがどれだけ有効なのか分からないけど、どの道死ぬなら、せめて一撃でも入れておきたい。

ズシャッ

僕の腰を、水精竜の腕の爪が挟む。

が、緩和された痛みは、まだ耐えることができた。

そして空中にホバリングしている水精竜の真下に潜り込むと、力いっぱい短剣を投げ上げた。

プスツという軽い音がして、短剣の切っ先が数センチ、水精竜の腹にめり込み、紅いエフェクトが表示される。

「こ、これでどうだ！」

もちろん、それだけでダメージを与えようとは思わないし、実際ほぼノーダメージに近いようだ。

HPとMPのポジションを飲み、もう一度今度は肩に爪の洗礼を浴びるが、ぎりぎりHPは残っていた。

「ライトニング！」

狙うは、水精竜の翼の付け根。

ホーミング・サンダーの陣を描きながら、発動したライトニングは、狙い過たず命中する。

ほぼ同じタイミングで、湖の水を凍らせて作ったのであろう、氷塊が飛来する。

氷も水の一部なため、水を操る竜ならこれぐらいしてもおかしくないというのは予測済みだ。

それを現実世界より格段に上がった反射神経で、横に身をさばいてかわすと、「先ほど短剣を投げつけたところ」にホーミング・サンダーを撃ちこむ。

高電圧の塊は、金属製のナイフの柄にぶつかった。

これだけなんなんということはない。

が、電流というものは流れやすい方に流れ込む性質を持っている。



水精竜の体内に流れ込んだ電流は、次に出るところを探す。

それが、クラウドからもらい、今は水精竜の右目に刺さっている短剣。

水精竜の体内を駆け巡った高電圧は、確かに皮膚や鱗に護られている身体の表側とは違い、柔らかい内臓を焼く。

この世界のモンスターも、倒せば「生肉のかけら」等のアイテムが手に入るといふ。

つまり、内臓や何かも、一応ある設定になっているということ。

ならば、一番弱いのは守られていない体内！

追撃とばかりに、今使える二つの攻撃魔法を同じところに放った。

水精竜の身体がビクツと震える。

「グラアアアッ！グオオオオツ！」

が、一撃で止めを刺すには至らない。

HPは二割を削った程度だった。

「くそ・・・ライティング！」

最後の悪あがきとばかりに、慣れ親しんだアーツを使う。が、これもあまり効果は得られない。

そして、今の攻撃でもう僕のMPは残っていないし、ポーションもない。

「僕の負けか・・・」

観念して、自分のHPが〇になるのを待った。  
が、いつまでたっても衝撃も痛みも来ない。  
不審に思ってみると、いつの間にか水精竜は事切れていた。  
ボスモンスターだけあって、すぐには消滅しない。達成感を与え  
るための措置だろうが、今の僕にはどうでもいいことだった。

「何で死んでるんだ・・・？」  
思わずつぶやく。

確かにさっきは、誰かが助けに来てくれればいいなーと現実逃避  
したりもしたが、それは叶わなかったはず。

「やあ、こんにちワ。今日もいい天気ですネ？」

それでも、言葉遣いのおかしな、変な人が竜の頭の上に座って、  
こちらへ手を振っていた。

で、あれから一時間ほどが経過して、僕らは『シドの酒場』に来  
ていた。

メールではなく、直接 心話 という電話みたいな機能で、呼び  
出したクラウドにまだ自分でも整理できていない事情を説明すると、  
死ぬほどうらやましがられた上に一発殴られた。

当然だろう。トドメは持って行かれたとはいえ、水精竜がくれた  
大量の経験値で今や僕はレベル十五。

そしてレアドロップ【水精竜の涙】と呼ばれるアクセサリをも  
手に入れていた。

火耐性と、魔法攻撃力の向上効果付きで、見た目にも蒼い宝石の

に、碧色の樹の葉がついた綺麗な品だ。

あの後、湖に生えていた樹に、大量の花が実って、新エリアマップ【カベルネ：陸の孤島】が追加された。

その新エリアマップを狙って、単身乗り込んできたのが、語尾のおかしい、僕を助けてくれたシウエルさん。

アルザス城の東西南北に、このゲームの発売を記念に、テストのときはなかった、特別な新エリアが追加されるという話を聞きつけ、知り合いと協力して攻略に臨み、死にかけの僕を見つけた、とのこと。

肝心の彼は、レベル98とかいう異常な数値。

もう想像がつくだろうが、彼も テストの対象者。

その中でもトップクラスの实力を誇る・・・らしい。

なぜ「らしい」というと、彼が自分で「私はねえ、このゲームの中でも、上から数えて五本の指に入るぐらい強いプレイヤーなんですヨ」と言っていたただけだから。

「いやあ、途中から見物させてもらってましたけど、君、なんの役にも立ってませんでしたネw」

「うっさいなあ！見てたんなら助けてくれればいいのに！」

「あんな面白い戦い、普通止めませんヨ」

そう言って、ケラケラと笑っているシウエルさんは、とてもそんな強い人に見えない。

「で、これからまた、レベル上げに行くんですか？手伝いますヨ」

「いや、もう落ちます。今日は疲れました・・・」

さすが幼馴染。ぴったりと細部まで同じセリフを、同時に言うなんて。

「そうですか。また何かあったら言ってくださいネ。フレンド登録でもしておきますカ」

こうして、僕たちは自称最強のプレイヤーと、フレンド登録を交わした後、近くの宿屋に戻ってログアウトした。

そして、朝。

目覚めた僕たちは、始業式に臨むことになった。

運がいいことに、翔とは同じクラス。

「よっ！また同じクラスになったな」

「そうだね。よかったよかった・・・。あー、眠い・・・」

僕は昨日、あれから自室のパソコンを開いて、攻略サイトののな  
い『ユグドラシア・オンライン』の情報を、あるだけ探していた。

テストの参加者のブログ、公式サイト、消されるのを承知で作  
ったとは思えない攻略サイトもどき。

最後のは見る最中に削除され、画面がフリーズするという事態  
に陥ったせいで、PC再起動も面倒だったから、電源切って寝た。

そんなことや全くゲームに関係ない話などを続けているうちに、  
始業式が始まった。

「・・・・・・・・zzz」

校長の話？そんなもの寝てるに決まっている。

先生が言うには、今日は何時もより多くの生徒が寝ていたらしい。  
そして先生はそれを怒らない。何故か？簡単なこと。

先生自身も、長すぎる校長の話にうんざりして、体育館の壁にも  
たれて眼を閉じていたからだ。

「では、LHRを始めます。全員席について」

去年と同じ、担任の辻前真衣先生が、教壇から頑張って叫んでも、その声は届くことがなかった。

教室中で、かわされている会話のほとんどが、新しい技術を用いたゲーム、『ユグドラシア・オンライン』のことだ。

「あれ欲しいよなー。聞いたところによると、もうこの辺の店で売ってることはないらしいぜ」

「値段も結構高いしな。それにうちの親がアホでバカでカスだから、そんなよくわからないものに手を出すなー！ってうるせえんだよ」

「おいおい、いいのかそんなボロカスに言っで。でもま、そんなの無視して買っただろ？どうせ」

「愚問だな。決まってるじゃないか。今度の休日、『ユグドラシア・オンライン』探して激戦区巡りをしないと」

そんな会話が繰り返り広げられている中、僕と翔に、もう一人の幼馴染と言ってもいい、楓星羅かえで せいらが近づいてきた。もちろん彼女のあだ名は、小公女。

「で、どうせあんたたちはもう買ったんでしょ？あのゲーム」

「もちろんさ」

「あんな夜中に、行列まで作ってゲームを買いに並ぶなんて・・・よほど暇人なのね」

さすが幼馴染。僕らの行動は予測できるって？いやいや、違うな、こいつの場合。

「うるさいわ。それに小公女も見に来てたんだろ？で、並ぶのが嫌になって家に帰ったと。そういうわけだな」

「うつ・・・何でバレた！それに小公女言うな！」

あ、墓穴掘った。

「だって『あんな』ってことは、どこから見てたってことじゃないか。で、見てたんなら目的は一つ。お前も買いに来てたんだ、ってことぐらい予測付くだろ？な、翔」

星羅のセリフの後半はスルーすることにする。

「お、おう！もちろんわかってたさ！」

絶対気付いてなかったな、こいつ。

「はぁ……。で、小公女、じゃない星羅は、結局買ったの？」

「残念ながら買えなかったわ……。どこの店でも売り切れだった」  
「だろうね。あの程度の行列なら、どこの店でも同じだろう。」

行列が嫌だからって言うて帰るようじゃ、まだまだだな。

あらかじめ、三つ買っておいてよかった。

「翔、持ってきた？」

「もちろん」

先ほどと違って、同じセリフでもこっちは自信が満ち溢れていた。

「ジャジャーン！」

わざわざ口で効果音をいい、僕と星羅に引かれているのにもかまわず、鞆の中から一枚のゲームディスクを取り出す翔。

ごくつ……。と唾を呑む音がした。もちろん星羅が音源だ。

「これを星羅に売ってあげてもいいよ」

「い、いくらで！」

「野口英世さんを六枚で」

「原価は五千元よね。もうちょっとまけてくれてもいいんじゃないの？」

その後も交渉は続き、結局五千五百円で落ち着いた。

「ありがとね」

今にもスキップでも始めそうなぐらい、上機嫌な星羅の姿に、僕とカケルはそろって嘖き出した。

「おーい、待ってって！どんなキャラでログインするつもりなのか教えてー」

僕が呼び止めると、くると振り向いた星羅は、若干言いたくなさそうに、それでも口を開いた。

「くせーラ>よ、なに、文句あるの！」

「いや、ないない。僕は<リュウヤ>で翔は<クラウド>だから、また一緒にプレイしようね」

やっぱり小公女だーとは言わない方が良かっただろう。

「わかった。じゃあまたねー」

「其処の三にーん？不要物は持ち込まないようにね？先生の目の前で出すとはいい度胸ですね・・・」

げ、先生の存在を忘れてた。

「あーなんというか、すまん星羅」

「翔のバカ！」

間違はなく、没収されるだろうな（御愁傷さま）とクラス中のメンバーが思った時、先生の口から思いもよらぬセリフが発せられた。  
「私もプレイしてるのよね、そのゲーム。また先生ともプレイしようねー」

「……………それでいいのか真衣先生！」「……………」

「……………」

そんな楽しい日の夜。

僕たちはそろって、歴史に名を残す大事件に、巻き込まれることになった。



## Last Act

### 牢獄までのカウントダウン（後書き）

第一章終わりました。

と言ってもこれまでは実は序章みたいなもので、次から本格的に話に入ります。

よくわかる解説

LHR・・・ロング・ホーム・ルームの略。

激戦区・・・電化製品を取り扱っているところ等によくある、「他の店より安いのが売り！」と言うように書いてあったりする店が、一か所に集まっているところのこと。

そこでは「あ、隣の店の方が安い」「あ、さっき値下げしてもらったからこつちの方が高いかもー！」などと言えば、大幅な値下げが見込めたりする。

ではまた明日、第二章の始まりです！

# 幻想の牢獄

「はい、これで今日は終わりです。部活がある人は残って、それ以外の人は帰ってもかまいません。では起立！気をつけ！礼！」

「ありがとうございました！」

⌋

今日は始業式だから、学校は午前中までしかないし、僕たちは今日部活もない。

「竜哉！早く帰ろつぜ！」

「そうだね、早く続きプレイしたい、し！」

肩に鞆を引っ掛け、教室を飛び出そうとした僕の足に、箒がひっかけられた。

「ちょっと待って。掃除手伝って？」

もちろん、攻撃の主は星羅。

「あーはいはい。わかったよ。やればいいんでしょ、やれば」

翔のツツコミが入るが、ここで抵抗しても無駄だというのは、長年の経験上分かり切っている。

なら、さっさと終わらせた方が得だ。

「翔も手伝え（いなさい）！」

「あーわかった、わかったから！」

翔の腕をつかんで、強引に引き寄せる。そしてその手に箒を握らせた。

「しょーがない、ちゃっちゃっとならざるぞ！」

およそ十分で掃除は片付いた。

「やれやれ、やっと終わったな。帰るぞ、竜哉！」

「そうだな、後はよろしく。星羅！で、翔。おまえんちに行っているか？」

「なんで？」

「うちの親がさ、一日中家で寝転がってゲームしてることを許してくれると思うか？」

翔の家は両親が共働きで、夜になるまで帰ってこない。

うちの親にも、「翔んちに遊びに行ってくる！」と言えば何も怒られない。

それを説明すると、なるほど納得。と言わんばかりに、ポンツと手を打った。

「なるほど、分かった。問題ないぜ。じゃあ飯食ったらうちに来てくれ」

「ちよーつと待ったあ！あたしも行っている？」

星羅は、性格はともかく、物凄い美少女と言っても差支えない。

クラスメートからも人気があり、こんな会話が聞かれれば、翔が殺されるか、逆に大勢の男子が集まってしまっただろう、というぐらいいい。

僕の好みじゃないとはいえ、幼馴染じゃなかったら、到底縁がない人だっただろうが、そんな美少女が家に遊びに来てくれるとなれば、普通はうれしい、はず。

が、僕たちはそうじゃなかった。

「遠慮させてもらっよ」

「無理だな」

即座に返された冷たい答えに、ピキツと言う音を立てて、星羅のこめかみに血管が浮く。

「なんでよ！別にいいじゃない、減るもんじゃないんだし！」

「あのなあ・・・まあ前が気付いてないならいいけど。道徳的にどうかと思うがな、なあ竜哉？」

翔の言いたいことは、なんとなくどころかはつきりとわかった。

「確かにね、まあ星羅だし問題ないんじゃない？どの道翔んちには誰もいないわけだし」

「なんのことよ！」

まだ理解できてないのか、と僕と翔はそろってため息をついた。

「別にもう来ていいって言ってるんだから気にするな。じゃあまた後でな」

「また後でー」

僕たちは、「待ちなさいよおお！」という星羅の声をBGMに、そそくさと教室から逃げ出した。

飯食べてから、翔の家に行くまでの過程は、どうでもいい話だから割愛する。

何はともあれ、無事に翔の家に着した僕と星羅は、「お邪魔しまーす」と言ってドアを開ける。

誰かが家に遊びに来る時は、ドアに鍵を掛けないのが翔一流の迎え方。

それを知っている僕らは、「不用心だな」と思った程度で、特に気に留めることもなく中に入った。

手には、しっかりとヘッドギアとゲームディスクの入ったカバンを持って。

「お邪魔しまーす。はい、おみやげ」

星羅の家は、洋菓子店をやっており、滅茶苦茶うまいお菓子を持ってきてくれる。

「おう、来たな。さっそくプレイするか？」

「だね。こっちの世界で四時ぐらいになったら一回起きて、星羅が持ってきてくれた菓子食べて、再度ちよろっとプレイしたら帰ろうか」

「OK。じゃあ俺はこの辺で」

翔は、二回にある自分の部屋のベッドで。僕はその下の床で、寝転がってヘッドギアを装着した。

この姿勢じゃないと、本体には意識がなくなるわけだから、結構危ない。

もちろん、星羅は一階の別の部屋で横になっている。

「じゃあ行くよ・・・ログイン！」

僕達は、ヘッドギアにゲームディスクを挿入し、ボタンを押した。

僕とクラウドは、この前ログアウトした宿屋で眼を覚ました。

「これから、チュートリアルを終えてセーラが出てくるまで、しばらく時間があるな・・・何する？レベル上げでも行くか？」

クラウドの提案に首を横に振ると、僕は今朝ネットで調べた興味深い情報を話した。

「それよりさ、『職業スキル』っていうのがあるみたいなんだ。取りに行かない？」

その名の通り、「料理人」や「剣士」などの、職業にちなんだアイツが使えるようになるスキル。

クラウドの目指す「守護者」や「剣闘士」と違い、誰でもいつでも簡単に、特定のNPCに話しかければもらえる、珍しくとも何ともない「レア」スキル。

僕は、空中を歩いて、足音を立てない サイレント・ムーブ 無音移動 や、姿を隠すことのできる ハイドینگ・ムーブ 透明移動、AGIを上昇させる、バッシュ 常時発動型アイツ アクセラレーター 加速者 などがある「暗殺者」を狙っている。

フラッシュ で眼つぶししたと、無音移動 で背後をとり、威力の高い魔法のクリティカルヒットで大ダメージ！そして相手の反撃からはそのスピードを生かしてするりと逃げる・・・なかなかいいと思わない？

「クラウドはどんなにするの？」

「俺か・・・何にしようかな」

とりあえず、誰かに話を聞きながら目的の職業スキルをくれるNPCを探さなければならぬ。

僕の場合、だいたいの場所は絞り込めてるから、そのあたりにいる、青アイコンのプレイヤーと違って、意識を向けた時に出るその人の上に出るアイコンが緑のNPCに、片っ端から声をかけるっていう方法もあるけど。

「じゃあまた見つかったら連絡してくれよな」  
「互いにね」

しばらくすると、僕もクラウドも職業スキルを手に入れていた。時間的には、ちょうど星羅のキャラクター設定と、チュートリアルの説明が終わったぐらいか。

僕は念願の「暗殺者」、クラウドはなんと「鍛冶屋」を選んでいった。

本人曰く、「んなもん、全部戦闘一色じゃつまらないだろう。それに自分の武器ぐらい自分で作りたいしな」とのこと。

職業スキルは、50レベルに到達すると、二つに増やせるので、その頃には僕も生産系の職業スキルを手に入れようかな、と考えている。

「早速武器作ろうぜ！」

「ああ、良いね。中央に鍛冶ができるところがあるから、其処に行こうか」

僕は、レベル15に上がった時のスキルポイントを、新しく解禁されたLV15のスキル、中級炎系魔法と暗殺者に振り、エターナルフレアと無音移動を習得した。

「暗殺者」のアーツは、他のアーツと併用が可能。つまり、ダメージを受けて中断されない限り、隠れたままアーツで攻撃することも可能なわけだ。

まさに暗殺者の名前にふさわしい。

で、エターナルフレアは、任意の対象の周りに、超高温の焰を出現させ、継続的にダメージを与えつつ火傷状態にする魔法。

この魔法の恐ろしいところは、新しく他のアーツが使えないことに目をつぶれば、MPが尽きるまでずっと、相手の身体を、揺らめく焔で覆っていることができる。

ゆえに、中級魔法 永久揺焔（エターナルフレア）。

僕は 無音移動 を発動して、クラウドと鍛冶のできるところ、『鍛冶屋の空き家』に向かった。

「よおっし。早速欲しかった長剣作るぜー！」

必要もないのに、腕まくりをする動作とともに、インベントリから「鉄鉱石」を出して、どこからともなく取り出した金づちでたたき始める。

たまに近くにある炉に入れたりするうちに、だんだんと剣の形になってきた。

もっとも、金属塊の端の方だけ叩いていても、剣の形にちゃんと仕上がるのだが。

そして、眩しいエフェクトともに、ついに仕上がった。

「よっしゃできたー！って……ええええええええええ！」

「何があつたの？」

「そ、それがさ……これ見てくれよ」

見せられた長剣に意識を向けると、＜アクセル・アイアンソード＞とあった。

普通のアイアンソードと違って、剣腹に紅い模様が描かれている。能力も、普通は攻撃力＋3のところを、攻撃力＋7なのに加えて、AGI＋3が付いている。

「もしかして……『クリティカルメイド』？」



生産スキル持ちが、夢見ているのが、このクリティカルメイド。稀に、叩く力加減や炉に入れる時間の長さなどが良いと、普通より能力の高いアイテムや、付加効果のあるアイテムが作れることがある。

そして一度クリティカルメイドに成功すると、以後同じものを作る時は、絶対にクリティカルメイドになる。

それを説明すると、クラウドの眼が驚愕に見開かれた。

そりやそうだろう。なんてったって百回やっても成功しないような確率のクリティカルメイドが、一発目から成功したんだから。

「俺、コツつかめたかもしれない。何か鉱石持ってたらくれない？」

僕が持っている鉱石は、銀狼を倒して得た「銀鉱石」。

「ああ、いいよ。ただし、作るなら杖をよろしくね」

銀鉱石で杖を作れば、僕が今持っている<シルバーロッド>が出来るはず。

クリティカルメイドだと、シルバーロッドの前に、「オフェンス」とか「アクセル」等の形容詞がつくことになる。

ちなみにこの形容詞は、武器だと英語、防具やアクセサリだと日本語なのだから。

「しょうがねえな。でもリュウヤはシルバーロッド既に持ってるだろ？」

「僕の鉱石だからね」

「まあ、クリティカルメイドの方が性能いいからな、分かった。作ってやるよ」

またクラウドが金づちで銀を叩き始める。

それから数分後、また眩しいエフェクトが瞬いた。

「ほーら、出来たぜ、＜マジカル・シルバーロッド＞」

自慢げに語るクラウドが渡してきたの杖には、僕の持つシルバーロッドと違い、先端の銀の部分に魔法陣が書かれていた。

能力は、魔法攻撃力＋７の、僕のシルバーロッドと違い、INT＋７、MP＋５０。

「いいねー、良いね　　！ありがと。でも、そのクリティカルメイドを作るっていうのは、話さない方がいいね。皆がクラウドに殺到しちゃうよ。だから僕とかセーラとか、あとシウエルさん以外には話さない方がいいと思う。でもまあ、金を稼ぐ分には困らないね」

強力な装備をもらって上機嫌な僕の耳に、プルルル、という効果音が聞こえてきた。

これは心話が来たことを知らせる効果音。

メールと並んで、この世界で連絡をとる手段で、オンラインゲームで言うところの「チャット」に当たる。

「もしもし、竜哉？いえ、ここではリユウヤね。今チュートリアルが終わったわ。レベル上げ手伝ってくれない？今は【城下町：アルザス】の北側入口にいるわ」

「了解。じゃあ今から行くから、中心に向かって歩いてきて。途中で出会えるから」

「分かった。よろしくね」

プツツと言う音を立てて、心話が途切れた。

「クラウド、鍛冶はおしまいだ。セーラを迎えに行くぞ！」

無事、セーラと合流した僕たちは、現実世界で四時になるまで、ずっと三人でレベル上げをしていた。

セーラは流れるような銀髪と紫の眼で、一瞬僕たちがポカーンと口をあけて突っ立ってしまっぐらいに綺麗だった。

が、目の前にいるのが星羅だと思うと、格段に色褪せて見えたのは何故だろう？

それはさておき、彼女は回復職志望だった。

僕たちの編成を知っていたから、「三人でプレイするなら、回復職の方がいいでしょ？それにあたし、前衛とかには向いてないし」って。

でもおかげで、バランスのいいパーティになった僕たちは、順調にレベルを上げることができた。

隠されたエリアの発見者は、そのキーとなるボスと何回でも戦うことができる。

ストーリー的には、『また来たな・・・今度こそ倒してやるぞ！』とのことらしい。

だから僕ら二人がいるパーティか、忘れてはいけないシウエルさんのいるパーティは、水精竜と好きなだけ戦える。

数時間が立つて、僕がLV23、クラウドがLV16、セーラがLV10になった時、再チャレンジしてみるとあっさりと勝てた。

何度も何度も水精竜と戦って、最終的には僕がLV30、クラウドが25、セーラが20になった。

そして、宿屋でまたログアウトすると、僕たちは現実世界へと帰って行った。

「たっただいまっつと！」

僕とクラウドは、どこぞのゾンビよろしく、むくりと起き上がった。

これから頂く、星羅の持ってきてくれた菓子は、旨そうなケーキだったため、冷蔵庫に仕舞ってある。

僕らが階段を降りてリビングに行くと、既に星羅がケーキを皿に並べている最中だった。

「ささ、席について。早く食べましょ。また続きやるんでしょ？」

僕が「うん、そうだね」と答えようとしたとき、僕の携帯に電話があった。

僕が好きな、某映画の主題歌のサビの部分が流れる。

相手は僕の従弟で、自衛隊に所属している「仙崎直弘」。数人居る従弟の中では一番仲の良い人で、まだ二十五歳だったかな。

他の年上、年下と違って、何故か話が合う。

翔たちに断って座ったばかりの席を立つと、廊下に出て通話ボタンを押した。

「どうしたの？電話してくるなんて珍しいね」

「ちょっと物騒な噂を聞いてな。竜哉たちにも知らせるところと思っただ。もちろん先に竜哉の両親にも知らせてある」

自衛隊内での噂だろうけど、そんなに簡単に部外者に話して良いのか？という思いが頭をよぎるが、今回は好奇心が先に立った。

「どんな噂？」

携帯電話の向こうから、すーっと思を吸う音が聞こえる。

「今夜、大規模なサイバーテロが起きるらしい。勿論未然に防ぐ用

に努力するけど、念のためパソコンをネット回線から外しておいた方がいい」

それが本当なら、確かに危ない。

個人情報とかが漏れないよう、インターネット回線からの切断はしておいた方が良さそう。

「分かった。気を付けるよ。知らせてくれてありがとう。直弘兄さんも気を付けてね」

「勿論。まあ物理的な被害は無いだろうけど、今晚は徹夜確定だな。じゃ、また明日連絡するよ。じゃあな」

そこで、ブツツと通話が切れた。

僕が携帯を閉じて席に戻ると如何にも興味津々といった様子で、翔がテーブルに身を乗り出してきた。

「何の電話だったんだ？」

「・・・翔、もうちょっと礼儀とかそういった物を身につけた方がいいよ。間違いなく」

でもまあ、この二人にも注意を促しておいた方がいいか。

「えーっと、今夜サイバーテロが起こるかもしれないから、ネット回線には接続するな、ってさ」

たっぷり三秒間は固まった後、二人は一斉にわめきだした。

「どういうことよ！そんな情報を仕入れられるなんて、竜哉はどんな知り合い持つてるのよ・・・」

「げ、そんな物騒なことが起こるのかよ・・・教えてくれてありがとうーで、信憑性はどのくらいあるんだ？デマじゃないのか、そん

な話は」

耳をふさぎたくなるようなマシンガントーク・・・いや、ガトリング砲トークの方が表現としては正確かもしれない。

「うわ、うるさっ！おい、ちょっと落ち着いてっ！今のは自衛隊に所属してる従弟の教えてくれたことで、結構信用できる情報だよ。少なくとも『そういう噂がある』というのは事実だよ。そのうわさが正しいかどうかは別として。だからまあ用心しておいて損はないんじゃない？別にパソコンを使う用事なんてないでしょ？」

「まあな、後でネットから切断しとくよ。それより、今は早くこれを食べちゃおうぜ」

「「食い意地張りすぎだよ（でしょ）！」「」

と言いつつ、僕も自分の分のケーキをフォークで一口サイズに切って口に入れる。

「美味っ！すげえうまい！」

「これは美味しいな。さすが楓洋菓子店製」

チョコレイトを使ったスポンジに、イチゴ等のフルーツが乗った、甘さ控えめなケーキは、本当に美味しかった。

「レシピあとで教えてくれる？」

「それは無理ね。うちのお菓子の作り方は、門外不出なの」

意外に思われるかもしれないが、僕たち男二人も料理は得意だ。翔に関しては、親がいないときに自分で作らなきゃならないから、僕に関しては趣味で。

よく翔の家に遊びに行つては、晩飯も作って食べて帰っていた記

憶がある。

そのうちに、だんだん料理が上手くなったんだ。

「あーおいしかった。これはVRSじゃ再現できねえな」

「ホントだよ。あつちの世界の飯も美味しいけど、あくまで普通レベルだからね」

「そう？良かったわ、喜んでもらえて！」

いや、作ったのお前じゃないだろ。等と突っ込むような野暮な人は、今この三人の中にはいなかった。

が、予想を裏切るセリフの続きが語られた。

「これは、お父さんに教えてもらいながら、あたしが作ったのよ」

「うつ・・・急に腹が痛く」

翔が、胃のあたりを押さえてテーブルに倒れこむ。

もちろん演技だ。

「何よ、失礼な！あたしだってケーキぐらいまともに作れるわよ！」

「まあまあ落ち着いて。翔もふざけるのはいい加減にしたら？」

二人をなだめると、これからどうするか話し合った。

さすがにVRSばかりやってるのも身体に悪いだろうということになり、頭のいい星羅の手伝いのもと、残っていた春休みの宿題を仕上げると、晩飯作りを開始した。

ちょうど午後六時ぐらいに晩飯は完成した。

メニューは、ハンバーグとオムライス。

僕が作ったのがハンバーグで、翔が作ったのがオムライスだ。  
ケーキのお礼も兼ねての料理だけど、ちょっとカロリーが高いメ  
ニューになっちゃったかな。

「いただきますーす！」

礼儀正しく食前のあいさつをした僕と星羅の眼の前では、がつが  
つともう半分ぐらいを胃の中に収めている翔がいた。

「あいつはもう放置でいいよね？」

「ええ。構わないわよ」

以降、食べ終わって僕たちが自分の家に帰るまで、翔はシカトさ  
れ続けた。

4月8日 19:00

「ただいまー」

もう晩飯は翔ん家で食べて帰ってきたから、母親や姉に呼び止め  
られることもなく自分の部屋に向かった。

パソコンを立ち上げ、いつも見ているサイトの更新をチェックし、  
『ユグドラシア・オンライン』の攻略情報を少し探すと、インター  
ネットから切断した。

八時になったら、また三人でログインすることになっている。



部屋にある時計を見ると、もうそろそろ時間になるところだった。ベッドに横になると、ヘッドギアを装着し、ディスクを挿入する。ウィーンという音がして、内蔵されたコンピューターが起動したのがわかる。

「なんだかいつもよりも時間がかかるな・・・」

そうつぶやいた時、作業が完了したらしく、僕の意識は闇に包まれた。

そしてついに、悲劇へのカウントダウンが0になった。

<このゲームでの死は 現実世界での 死を 意味する>

<元の世界に 帰れるのは 三万人 だけ>

<では、お休みなさい。よい幻想ゆめを>

何もない、真っ暗闇の中で。

そんなテロップが、禍々しい赤色で表示された。

テロップが消えた瞬間、僕はまた意識を失った。

## 第二章 A c t 1 幻想の牢獄（後書き）

最後の方時間を飛ばしました。  
次回から事件が始まります。

では、感想等お待ちしております。

## Act 2 デスゲームの始まり

今度こそ僕は、宿屋で眼を覚ました。  
でも、さっきの異常のことは、しっかりと記憶に残っている。

ふと横を見ると、他の二人もログインしていた。  
クラウドは首をかしげているし、セーラは何かに脅えたような表情をしている。

「二人とも・・・さっきの、見た？」

恐る恐る問いかけてみると、二人は同時に、こっくりとうなずいた。

何とも言っていないのに、こうもすぐに反応できるっていうことは、疑いようなない事実だということ。

「なんなの、あれ・・・このゲームでの死は、現実世界での死を意味する。元の世界に帰れるのは三万人だけ。では、お休みなさい。よい幻想<sup>ゆめ</sup>を。だったっけ？という意味？」

「さあ・・・とりあえず、今は違和感がないだろ？特に実害はないんじゃないか？ただのイベントとか」

クラウドが、あえて楽観的な意見を述べるが、この場を支配している重い空気は払えない。

「なあ、一端ログアウトしようぜ。何かおかしいことがあるんなら、戻ればいい。ただのゲームなんだしな」

僕も、なんとなくさっきから嫌な予感がぬぐえない。

クラウドが、ログアウトのために行ったん眼を閉じる。  
普通ならこれで、だんだんとプレイヤーの身体が薄れていって、  
しまいには見えなくなるんだが・・・。

今回は、少し事情が違い、数十秒がたっても彼の身体は実態を保  
ったままだった。

「ロ・・・ログアウト、できない？」

「・・・・・・・・どうやらそうみたいだな」

クラウドの眉間に、深々としわが刻まれる。

「じゃあ、もしかして本当に、あたしたちは・・・」

「ということは、よく小説にありがちな・・・」

「おそらく・・・・・・・・」

前置きは三人とも違うセリフ。でも、思っていることは同じ。

「「「この幻想世界から出られない!?」「」「」

「おい、運営！なんなんだ、さっきのは！」

「ログアウトできないぞ！どうなってるんだ！」

「ゲームオーバーが死につながる？どういうことだよ、おい！」

僕たちはとりあえず情報が欲しいため、宿屋の外に出てみると、  
半ば予想通り、大パニックが起きてい

た。

僕が今思っていること、それは「そういや、このゲームもネット回線使ってるんだったな・・・畜生、このことか！」だ。

そういう事情を知っていて、仲間が二人、一緒にいるからこそ、僕たちは落ち着いていられるのかもしれない。

「やっぱり、僕たちだけじゃなかったみたいだね」

「ちっ、そうみたいだな。脱出できるのは『三万人』ね・・・」

「とんでもない事態になりそうな予感がするわね」

今、ここに何人が捕らえられているのかはわからないけど、何者かが「三万人しか生き残れない」っていうなら、少なくともだれかが殺されることになる。

「今のうちに、レベル上げに行っておいた方がよさそうだな。PKに合ってしまったくないように」

今僕は、結構な特権を持っている。

そう、滅茶苦茶おいしい狩り場を三人占め。

でも用心する必要がある。

確か、テストのテスターは五千人。

彼らは高確率で生き残れるだろうけど、代わりにさっさと脱出しようとして、他の人を殺しまくるかもしれない。

「そうだ！シウエルさんに連絡してみよう！」

もしあの人がかつちに来ていれば、強力な味方になってくれることは間違いない。

フレンドリストを開いてみると、「クラウド」「セーラ」の他に

も、ログイン中の人は何人がいた。

レベル上げの途中で知り合いになった人たちで、一緒に水精竜を買ったりした仲間だ。

そして・・・

「いた！シウエルさんもこっち来てる！」

「本当か！よし、今すぐ心話しよう！」

僕が連絡するから、必然的にクラウドが、セーラにシウエルさんについての説明をすることになる。（初めて水精竜とたたかった下りが、どうなることかわからないけどね）

『もしもし？シウエルさん？大丈夫ですか！？』

『ああ、この可笑しな事件のことです。私は大丈夫ですヨ。なあに、始めたばかりの初心者ぐらい、何人集まるうが余裕で蹴散らせます』

まるで今戦闘中みたいな言い方が引つ掛かるけど、無事ならよかった。

『良かった。今から合流できない？どこにいる？』

『君たちには到底来れないようなダンジョンですヨ。私が今から帰還呪文で戻ります。「シドの酒場」・・・分かります？』

『分かります。僕たちも待ち合わせによく利用しているところですから』

『よし。目の前の雑魚どもをかるーく蹴散らしちゃいますから、ちよつと先行って待っててくださいネ』

うーん、俗に言う死亡フラグを立てられても困るんですけど。でも、あの人なら大丈夫だろう。

シウエルさんが負けるところなんて、想像もつかない。

『ちよつと野暮用ができたんで、お遊びは終わりです さようなら。  
ダイヤモンドダスト  
金剛氷塵』

『え？ちよつとシウエルさんって魔法使えたの！？』  
場違いな質問とわかっていても、言わずには居られなかった。

が、心話の向こうで「うわあっ！」とか「ちよつ、これはないわー！」とか、「助けておかーちゃーーん」とか、何人かの悲鳴が聞こえてきた。

最後の「いまどきあんなセリフ言う人いたんだあ……」って若干引いたけど、何が起きているのかは想像がついた。

『ちよ、シウエルさん？相手死んじゃうんだから殺さないようにね？』

『いやあ、これで本当に死ぬのかどうか試してみるのも大事かと思えますが……分かりました。命はとらないであげます』

最後に、そんな甘い考えではだめですヨ……という声が聞こえてきたけど、僕はあえて聞こえなかったふりをした。

男たちの悲鳴を最後に、ブチツと音を立てて心話が途切れた。

『二人とも！『シドの宿屋』に行くよ！』

「ん、了解！……辺りに気をつけてな。セーラ、回復呪文がすぐ使えるように準備しておいて。リュウヤは防御が紙だから、透明移動を発動しておいたほうがいい」

「わかったわ」  
ハイディング・ムーヴ  
「確かにね。透明移動！」

僕の身体は、フレンド登録している人、今はいないけどギルドの



メンバー、パーティのメンバーには半透明に、他の人には全く見えなくなる。

後、足音や気配を消せるかどうかは、本人の技量次第だ。

こうしていると、どこかの額に稲妻形の傷持った、魔法少年の気持ちがよくわかる。

ピロリンツと言う効果音が頭の中に響いて、メールの着信を知らせた。

【送信者：クラウド

件名：無し

本文：これから、目的地に着くまではこうやって会話しておいた方がいい。声だけ聞こえてたら怪しいからな。ちょっと面倒くさいけど】

さすがクラウド。

こういう時には本当に頼りになる。僕も思いついてたことだけど。

【送信者：リユウヤ

件名：無し

本文：了解。まあもうすぐ目的地だけど】

すかさず返信を送り、僕はまた歩き出した。

それに街中には、「衛兵」と呼ばれるレベル120のNPCがいて、非戦闘区域の街中で戦闘行為をした者を、その場で殺して、復活地点に送り返す役目の人がいる。

このゲームで、最高レベルの人でも、ぎりぎり負けるっていう強さを持った衛兵たちがいるおかげで、街中での僕たちの安全は守られている。

正直、レベルの低い僕たちじゃなくて、「メインのストーリーは、こいつらが進めればいいじゃん？」とか思ったりもしなくもないけど、そこはまあゲームだからね。

実際、特に誰かに襲われることもなく、僕たちは何事もなく『シドの酒場』に辿りついた。

僕も 透明移動 を解除すると、ゆっくりと木製のドアを開けた。すると既に、白髪で僕と同じ赤色の眼をした、シウエルさんが文字通り「テーブル」に座って、手を振っていた。

さすがに高レベルなだけあって、装備も見事なもののだが、ちぐはぐ感が否めない。

だって、「全身鎧」に「魔法の杖っぱいの」って、どう考えてもおかしい。

魔法使いと言えば、軽装なのがオンラインゲームの常。

そして、これまたすごく似合っている、剣と杖が交差して、後ろに盾が描かれた、ロケット付きの金属製のネックレス。

「どこに座ってるんですか！」「」

「え、会っていきなりつつこむのそこですか？」

ふー。落ち着け僕。

多分、結構な緊張で、疲れた脳がこういう形で息抜きを求めたのかもしれない。

そう思うことにしよう。

「まあまあ、座ってください。ああ、もちろん『椅子に』ですよ」「分かってますって。そんなところに座るのは、小さい子どもか貴方ぐらいです」

さらりと返すと、僕らはそれぞれ、シウエルさんが乗っているテーブルの椅子を引いて座った。

何気に、四人席なため人数がちょうどいい。

「で、いつまでそこに乗ってるんですか、シウエルさん」

「堅苦しいこと言わないでくださいヨ」

「引き摺り降ろしますよ」

繰り広げられるクラウドとシウエルさんの漫才は、見てて面白かったけど、いつまでもこうして和んでいるわけにはいかない。

不毛な言い合いを続ける二人を止めると、僕は本題を切りだした。

### Act 3 危険と差異

「シウエルさん、今回の事件、どこまで情報を把握してますか？」

ピタツと、騒いでいた二人が止まる。

さすがにこの話題を聞いて、ふざけていられるほど心に余裕はないようだ。

かくいう僕も、自分でこんなに冷静にいられることが、物凄くおかしく感じる。

でも、他のありとあらゆる異世界転移の小説より、僕たちはまだ恵まれた方だ。

VRMMORPGは、その中でも「生活」することができる。

実際に物を食べることもできるし、安全なところもある。

3万人しか生き残れない、という制限がなければ、普通に助けを待って日々を過ごすことができないわけでもない。

制限があったとしても、街からでなければ安全と言ってもいい。

うっかり者が、少しずつその数を減らしていけば、もしかしたら自分は楽して生き残れるかもしれない・・・という、淡い妄想を、希望と言う名のオブラートで包んで、後生大事に抱いていることもできる。

僕は、ネガティブ思考というわけでもないけど、そんな楽観的には考えることができない。

まず、ゲームオーバーになった者を、リアルでも殺す、そういう方法がないわけでもない。

脳からの電気信号をいじくるのが、VRSなんだから、手を加えていない「脳から心臓や各内臓器官に送られる、生命維持のための電気信号」を、ちよつと遮断してやれば、そのまま死にいたる。

強制ログアウト+電気信号。この二つがあれば、強制ログアウト

で現実に戻ってみれば、心臓が動かなくて死亡。  
そして、もうひとつ。

この事件の後と前で、「『ユグドラシア・オンライン』の設定はいじられていないのか？」ということ。

ここまで疑り深いのは、このメンツの中では僕だけだろうけど、「自分たちで確かめたこと以外、保証できることは何にもない」のだから。

「うーん、情報交換です力・・・なら、こちらからも一つ、条件を出させてもらっていいですね？」

僕は、シウエルさんが考え込むように呟いたおかげで、思考の海から戻ってきた。

「どうぞ、あまりにも無理なものでは無ければ」

パチパチと、僕とシウエルさんの間で、火花が散った気がする。

「まあ、君たちにとっても悪い話じゃないと思いますガ・・・」  
そう前置きすると、少しクラウドやセーラをちらりと見ると、深々と息を吐き、しっかりと僕の眼を見据えて言った。

「三人とも、私のギルドに入ってください」

「はい？」

「別に・・・想像してたよりは良い話じゃないか。シウエルさんがギルドマスターだったってのは驚きだけだな」

「ギルド？なにそれ」

反応は、三人とも異なっていた。

一番落ち着いていたのは意外にもクラウド。

「シウエルさんがギルドに入っているって知ってたの？」

「当たり前だろ。ギルドに所属しているのを示す、ネックレスがかかってるじゃないか」

「え！？あれそういう意味があったの？」

初耳だ。

もしかして、アレをデザインしたのもシウエルさんだろうか。

ずいぶん似合ってるなーとか、これ作った人センスあるなとか思ってたけど、それが音を立てて崩壊していく気がする。

「なんとなーく、物凄く失礼なことを考えられている気がするんですけど。私はこんなのを作った覚えはありませんし、製作者にもう少し良い柄のしよう、と言ったんですガ・・・急ごしらえなもので、これぐらいしか思いつかなかったそうです」

げ、バレてる？別に気にもしないけどさ。

「でも、初めて会った時はつけてなかったよね？」

「当たり前です。ギルドを作ったのは、ここに閉じ込められてからなんですか。で、入るんですか、入らないんですか？」

もう少し詳しく話を聞かせてもらったけど、要約すると、どうやらシウエルさんの知り合いや、またその知り合い・・・という風に、仲の良い、信じられる者だけでギルドを作ったらしい。

この良くわからない状況の中、一人に対処するより、何人かで集まって行動した方が何かと便利だろうし、PK対策等も練りやすい、っていうことだ。

なら、ためらう理由なんて、どこにもない。

他の二人も同じ意見だったようで、視線を合わせただけで、ゆっくりと首を縦に振った。

「こちらこそ、よろしくお願いします。入らせていただけると嬉しいです」

そういえば、クラウドには「クリティカルメイド」の特技があるんだった。

そして、セーラは、あまりこのゲームにおいてその数が多くない、回復職。

・・・このメンツじゃ、僕が一番いらな子じゃないか・・・。

「うんうん、これでこちらからの条件はおしまいです。今からギルドに招待するので、承諾してくださいネ」

シウエルさんが言い終わるなり、パツと目の前にウィンドウが開いて、「シウエルさんからギルドに誘われています。承認しますか

？」という文面が現れた。

一瞬もためらわずに、YESのボタンを押す。

「良かった。では、なんなりと質問してください。分かっていることなら何でも教えますヨ」

「じゃあまずは一つ。シウエルさんはいつからここに閉じ込められていたんですか？」

そう、さっきの言い方だとまるで、結構前からこの『ユグドラシア・オンライン』の世界から出られなくなっているみたいだった。

「えーと、確か現実世界で4月8日の正午にログインしましたが、それ以来新しく入ってきた人も、前からいた人も、ログアウトできたつていう話は聞いてませんネ。おそらく、その正午からこの事件は始まっていたと思われマス」

「だから、シウエルさんは心話の向こうで、PKに襲われていたんですね。なるほど、何でこんな早くから？と思ってたけど、前からいて、『三万人しか生き残れない』って知ってる人が他にもいれば、レベルの高い人から、大勢で潰そうつてういう人の心理は理解できます」

あれ？でも、確かサイバーテロの噂があったのは、夜からじゃなかったつけ？

「そんな噂は、私も聞いていませんネ・・・」

「まあ、分からないことは置いておいて、次は俺からの質問だ・・・シウエルさん、今この世界に、だいたい何人の人がいるとか・・・分かりますか？」

「それは分かりませんネ。数える手段がありませんカラ」



確かに、ゲームのときからいじられていないなら、設定上はこのゲームの舞台は、日本のおよそ三分の一の広さがある国。

ユグドラシア大陸には、今後新しい国がアップデートごとに追加されていくことになっていた。

「でしようね。僕からの質問は次で最後です……。『ユグドラシア・オンライン』と、この世界で違うところがありますか？」

僕が聞くと、「お、いいところに気がきますネ」とでも言いたげににやりと笑うと、まず第一に、と指を折りながらシウエルさんは口を開いた。

「大きく違うのは、『戦闘方法』。HPとかMPとか、各ステータス是一緒でも、アーツの出し方などがぜんぜん違います。……。いわば、『制限なし』の状態で、『再発動待機時間』リキャストタイムというものがありますし、早口で詠唱すれば、魔法も短時間で発動できます。そして、もしレベル1の初心者でも、元の世界で剣道の心得があったりすれば、セーラさんぐらいなら倒せるかもしれません」

「うわ……。魔法系のスキルを上げておいてよかった……。」

火力が高くて、詠唱時間と再発動待機時間が長いのが魔法だったけど、デメリットが全て帳消しになっている。

「もちろんそれだけじゃありませんヨ。落とし穴みたいな罠を作って設置しておくこともできれば、『銃使い』の弾薬を、爆弾代わりにして一斉に起爆することもできます。どうやらこの状況を作り出した存在ハ、デスゲームにあまり時間をかけてほしくはないようです」

「確かに、これだけ改変されてたら、それに気づかなかつたり、適応できなかったプレイヤーは、早々に脱落することになりますね」  
ふうう・・・と、特大のため息をつく、まだあるんです、と言いたくなさそうに、でも毅然としてシウエルさんは、僕らに告げた。

「それもそうですが、一番違うところは、『安全地域がなくなつた』ことです」

「「「え!」「」」」

### A c t 3 危険と差異 (後書き)

よくわかる解説

ギルド・・・ゲームの世界にある、会社みたいなもの。

同じギルドに所属しているメンバー同士で、狩りに行ったり、チャットをしたりして楽しむことができる。

## Act 4 幻想の脱出者

「先ほど、街の中でPKに遭いましたが衛兵は来ませんでシタ。戦闘禁止区域での戦闘が可能になっています……。聞いた話によると、初心者向けエリアにも、高レベルモンスターが出現し、しかも全てのモンスターがアクティブ化……。こちらを見つけ次第襲ってきます。どうやらこの事件を起こした人……。もしくは人たちは、何があっても私たちを殺し合わせたいみたいですネ」

「それはまずいですね……。まだみんなレベルが低いから、何も知らないときに、高レベル者に街を襲撃されたりしたら、相当な数の人が犠牲になります」

「で、君はどうするつもりなんです力？この世界でおびえながら生きていきますか？それとも、テストからプレイしている人に喧嘩を売りますか？それとも、ひたすら自分が元の世界に帰ることを目指しますか？厳しいですが、『誰も殺さずに自分は元の世界に帰る』なんて、甘い考えは捨ててください」

うつ……。と僕はとっさに返事ができなかった。

完全に正論なシウエルの言葉は、僕からすべての反論の語彙を奪っていた。

「ですが、まあ私のギルド、幻想の脱出者《ファンタジーエスケープ》では、自分からPKを仕掛けることは禁止しています。もちろん、正当な防衛や誰かが襲われているのを助けたりと言った、正当な理由があれば話は別ですがネ」

「……。そうですね、僕たちが甘かったみたいです。いわゆるPKKのためには、まずは、戦闘訓練を兼ねて、レベル上げに行

つてこようかと思いますが・・・それでいいよね、二人とも？」

「モチのロンだぜ」

「当然よ。あたしだって死にたくはないしね」

二人とも、全く迷わずに即答した。

やっぱり頼りになる仲間たちだよ、本当に。

「その前に、 幻想の脱出者 の他のメンバーに合流することは可能ですか？ 挨拶と、他に一緒にレベル上げに行ける人を、後何人が追加で募集したいのですが」

横では、クラウドとセーラもうんうんと頷いている。  
というか、二人とも何かシウエルさんと話しろよ！

「すみませーん、紅茶を一つお願いしまーす。 まだ合流は難しいですネ。 後三時間後ぐらいに、皆がこの町に揃うと思いますので・・・それまでは、私が同行します。 少しレベルの高い所に行きますヨ。 その方がPKに遭う確率も減りますカラ。 そしてここは酒場ですヨ？ 何か注文しないと迷惑です」

「紅茶がいいかな」

「俺はコーヒーで」

「あたしも紅茶で」

この世界では酒を飲んではいけなんて法律はないけど、日本で育ってきた僕らは、まだ未成年なために、酒を飲む気にはなれない。

「酒場に来て注文するような飲み物じゃありませんよネ・・・人のことは言えませんが」

「うるさいですね。僕らはまだ全員未成年なんですよ。いくら日本と違ってそんな法律はないとはいえ、到底そんなアルコール類は・・・」

「あ、そうだここでは禁止されてないんだっただけ。店員さん、赤ワインも一つ追加でぶっ！」

迷わず、僕とセーラはそれぞれクラウドの頭と頬を張り飛ばした。スパーン！という音が鳴って、クラウドの頬にはもみじ型の赤い痣ができた。

「未成年の飲酒禁止には、アルコール依存症になりやすいっていう立派な理由があるんだよ！それはこっちの世界でも変わらないんじゃないかな」

「赤ワインより白ワインの方がおいしいっていうのは常識じゃないのよ！」

「「「つつこむところそこの！？（かよ！）（です力？）」「」」

ひとしきりワイワイと騒いだ後、さきに頼んでいた紅茶とコーヒーが届き、それを飲み終わると、僕たちはシドの酒場を後にした。

「で、どこに向かうの？」

「【カベルネ：陸の孤島】・・・そう、私たちが解放した、あの新エリアです。北や南の新エリアはレベルが50とか60で、西側の方に至っては、新エリア前のボスが倒せていないそうですから。前からあるエリアのレアアイテムは取りつくされていますが、陸の孤島なら、君たちに合ったレベルの強力なレア装備もドロップするかもしれません・・・」

「あ！すっかり忘れてた！」

装備と言えば、クラウドは『クリティカルメイド』の製作が可能なんだった。

まだ熟練値やスキルポイントが足りないから、特殊効果付与とかはできないけど、純粋な付加効果なしの装備なら、かなり強力なものが作れる。

「クラウドは、『クリティカルメイド』の製作が可能です。おそらく、全ての武器や防具のを、ね」

視線によるやり取りによって、何故か本人でなく僕が言われると、証拠として僕は<マジカル・シルバード>を、クラウドは<アクセル・アイアンソード>を見せた。

「これはこれは・・・凄いものですネ。後でまたこれをお願いします」

そう言っただけで差し出されたのは、<金剛石>の塊。所謂ダイヤモンド。

「もちろんっ！そして俺にも余った素材はもらえますか？」

「どろどろっ！」

がしつと握手を交わす二人。

そんな二人を、僕とセーラは生温かい視線で見つめた。

「もう一度確認しておきますが、今回の目的はレベルと熟練度上げ。もし途中でPKに遭っている人を見つければ優先的に救助、自分たちがPKに遭ったら、問答無用で返り討ち・・・ってことでいいですね？」

「もちろん・・・敵のレベルが45っていうのはどうかと思います  
がね」

僕がLV30、クラウドがLV25、セーラがLV20。

シウエルさんはなんと100LVに達しているとはいえ、こので  
こぼこPTで上手く45レベルのモンスター相手に立ちまわれるとは  
あまり楽観的に考えない方がいい。

それにしかも、ゲームとここでは、どこがどれくらい変わってい  
るかわからないのだ。

敵が異様に強化されている可能性も考えなくてはならない。

「大丈夫ですヨ多分。いざとなったら私が救出に行きますから」

「頼りにしてますよー。セーラ、回復頼むね」

「まっかせなさい!」

「できるだけシウエルさんに頼らなくても済むように頑張るぞ!」

こうして、僕たちの壮絶な死合いは幕を開けた。



#### A c t 4 幻想の脱出者（後書き）

短くなってしまつてすみません（汗）

感想、ポイント評価等いつでもお待ちしております。

## Act 5 聖光十字の四重奏

目の前に広がる、周りを森に囲まれた大きな広場。数人の人が、一心不乱に敵を狩っている。

いかにも何か出てきそうな雰囲気の中、今いる敵は、グレートサラマンダー＜巨火蜥蜴＞。

通常の27レベルの火蜥蜴の10倍はあろうかというぐらいの巨大なのが、ばら売りのジャガイモよろしく転がっている。

名前からもわかる通り、おもに火を噴いて攻撃するモンスターだが、普通に打撃攻撃を食らっただけでも相当HPが削られるかもしれない。

「では、行きますヨ。間違えて誰か殺してしまわないように、気をつけてくださいネ。どうせ常にPKモードになってるんでしょうカラ」

「それ、滅茶苦茶あり得ますね」

小型の拳銃を構えたシウエルさんを見て、僕もゆつくりと杖を構えた。

今の僕の装備は、＜深遠なる永夜の杖＞。

レアドロップのこの杖には、INT+10、魔法攻撃力10%アップの効果がある。

見た目は、漆黒と紫の模様に包まれた、柊製。長さはちょうど身長と同じぐらいだ。

クラウドやセーラも、両手剣と片手杖をそれぞれ使いやすいように構えている。

「無音移動」

全ての気配を断ち、僕はこっそりと一番近くにいる敵の背後に回る。

ほぼ同時に、シウエルさんのアーツが発動した。

「クラスター・レイン」

上空に向けて、一回引き金を引く。

放たれた赤い弾丸は、空中で幾つにも分裂して、辺りにいる巨火蜥蜴に突き刺さる。

予想通り、一斉に十数匹もの巨火蜥蜴がシウエルさんたちの方を向いた。

火を吐くのもいれば、見た目を裏切る敏捷さで体当たりをかまそうとしている奴もいる。

が、おそらく狙い通り、僕たちに近づいたのは間違いない。

ここなら、広範囲にわたる魔法を使おうと、誰かを巻き込む心配もない。

「今の動きを見たところ、別にプログラムから解放されて、敵の頭がよくなったりしたわけではないみたいだね。エターナルフレア」

リキャストタイムがなくなったおかげで、次々と魔法を発動できるようにになったため、全ての巨火蜥蜴に一回ずつ、継続ダメージを与える。

揺らめく高温の炎が、巨火蜥蜴の身体を包む。

「目には目を。歯には歯を。炎の敵には焰の魔法を！」

「バカなことを言っていないで、さっさと倒すの手伝ってください。強化されてるのが敵だけだと思ってるんですか？」

慌てて前に目を戻すと、巨火蜥蜴の口が、こちらを向いて大きく

開けられている。

その口から、ゴウツという音とともに、一直線に僕めがけて火炎が放たれる。

「甘い！『迅雷、万物を超える速度をもって、我に害なす輩を撃ち滅せ。ライトニングビーム』！」

突きだした杖先から、高電圧をレーザー状に収束させた光線を放つ。

眩しい残光を煌めかせながら、火炎と雷撃が衝突する。

が、火が広範囲を高火力で殲滅する魔法なら、雷は一点に全力を込める、貫通力と攻撃力が高い魔法。

「ちょっとだけ分が悪かったね！」

拮抗していたのはほんの数瞬だけ。

すぐに雷撃が火炎を打ち破って、僕に向かって攻撃を放った巨火蜥蜴に直撃する。

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。グラン・サンダーフォール』」

スキル【高位雷系魔法】のアーツ。

大気中の電子を敵の上空に集め、其処から激しく輝く剛雷を落とす。

轟音や閃光を伴った光が、密集する巨火蜥蜴の中に放たれる。

もちろん、敵の方がレベルは上。これだけで倒せるほど甘くはない。

それに、僕の無音移動も解除されている上、防御力はまだまだ紙

だから、狙われたらひとたまりもない。

「クラウド！今だ、いけ！」

「任せろ！」

一気に間合いを詰めようと踏み込んだクラウドによって、全長二メートルぐらいの長剣が振り降ろされ、赤いエフェクトが弾ける。僕に攻撃をしようとしていた巨火蜥蜴が、次々と標的をクラウドに変えている。

シウエルさんが完全に傍観者モードに入っているため、前衛はクラウド一人。

セーラが付いているとはいえ、油断はできない。

「どうした！？レベルだけか！ グラビティ・ストライク」  
移動速度減少効果付きの、上空から重力を利用して剣を叩き込む一撃。

「僕がトドメ行くよ！」光の加護を受けし聖神の怒りをここに！必殺の意を込めて贈る。 ホーリークロス・カルテット 聖光十字の四重奏 ♪

現在、僕の中で最高火力を誇るアーツ、【聖白魔術】スキルのホーリークロス・カルテット。

まず、辺りを飲み込む白い光を発生させ、防ぐ間もなく小さなダメージを与える。

一回限りの効果を持つシールドなどを消し去り、時間経過による防御術までも無効化する。

そして、対象を交点にして白く太い光線が車線上の敵を焼き尽くす。

最後にとどめとばかりに、上空に魔法陣が浮かび、アーツ発動からダメージを受けた敵全てにぎりぎり当たる程度の太さの光線が降り注ぐ。

四つの攻撃を一つに合わせた魔法だから、カルテットと名付けられた。

だとしたら、演奏している曲はおそらく、敵を冥界へと送る鎮魂

歌になるのだろう。

「ighsoiu!afhoiga・・・」

よくわからない叫び声とともに、HPバーをぎりぎりまで減らしていた巨火蜥蜴たちは、粒子に還った。

経験値が大量に入り込んでくる。

「おし！レベルアップ！」

「僕も」

「あたしも！すごい、何これ！」

僕は一気にレベル35に。パーティのステータスを確認すると、クラウドは32、セーラは27になっていた。

いつも通りパーソナルポイント（PP）をINTとAGIに振り、スキルポイントは計十五分温存。

今使えるスキルは、【初級雷系魔法】と【中級火系魔法】、【高位雷系魔法】に【高位光系魔法】。もちろんそれに加えて【暗殺者】。初級雷系魔法や中級火系魔法には、もう役に立ちそうなアーツはない。

今上げているのは、高位魔法系の二つ。

暗殺者スキルからは、＜無音移動＞＜透明移動＞＜加速者＞＜急所適殺＞の4つを覚えている。

最近知ったことだが、魔法にもクリティカル判定はあるらしく、最後の常時発動型アーツ＜急所適殺＞によって、通常なら出にくいクリティカルヒット率を底上げしている。

その上、クリティカルヒットの時の与えるダメージがさらに1.5倍になるというありがたい効果付きだ。

でも、次に【究極〇系魔法】のスキルが使えるようになった時のために、SPは温存していた方がいい。

そう思ったが、35％スキルの一つ、【常態強化】に目を止める。これは、もとのステータスや、パッシブアーツの効果を一時間だけ引き上げることができる物。

その中で、一番弱いアーツ デュアルパッシブアーツ 多重常態呪文 を取得することにしておいた。

これは、パッシブアーツの効果を、任意の時間だけ3倍にする物だ。

ただし、使うと時間経過とともにMPが削られていく。

浮かんできたウィンドウを意識で操作すると、チャットキャラと新しいアーツの習得を教える効果音が鳴った。

同じく、近くの樹にもたれて座っていたクラウドの操作も終わったようだ。

ゆっくりと、剣を杖代わりにしながら立ち上がる。

「よっし。後何回か行くか！」

「分かったわ。ちょっと支援呪文掛けるから、動かないでね」

セーラが何か魔法陣を描くと、僕たちの身体から紅白それぞれの光が立ち上った。

「MPの自動回復と、攻撃、魔法攻撃力の上昇よ。頑張ってきてね」  
「三人とも、私のこと忘れてません力？こんな所より、もう少し奥にさらに効率のいい狩り場があります。そこに案内しますヨ」

何となく嫌な予感がするが、僕らはシウエルさんについて、奥へと歩を進めて行った。

その先に、何が待ち構えているのかも知らずに。

## A c t 5 聖光十字の四重奏（後書き）

主人公が若干チートっぽくなってきましたね・・・。

30レベルで使える技にしては強すぎないか！？等という疑問があるかもしれませんが、作者の中では、「強いけど消費MPが半端なく大きい技」としてアリにしています。

どうかお許しください。



## Act 6 魔術繚乱（前書き）

すみません！！！！一日分飛ばしてました！

申し訳ありませんでした・・・。

なお、ストックが尽きかけているので、不定期更新気味になるかもしれないかもしれませんが。

執筆は頑張りますので。感想等お待ちしております。

## Act 6 魔術繚乱

歩き始めたころから感じていた嫌な予感が現実のものとなるまでに、そう長い時間はかからなかった。

「『げ』」

ズシン、ズシンという地響きの音が聞こえてくる。

歩くだけで思わず耳をふさぎたくなるほどの大きな音を鳴らすのだから、巨火蜥蜴とは比べることすら許されないような、相当な巨体の持ち主に違いない。

「えーっと、もしかしてシウエルさん？あの、でたらめな音を鳴らしている敵に挑みに行くんですか？」

それだけは勘弁してくれ、という思いが、クラウドの口にした疑問に染みわたっている。

が、それに気付いていないのか気付いていながら黙殺したのか、シウエルさんの返事は簡潔だった。

「もちロン。他に何があるっていうんですか？」

「………はあ。で？敵の名前と強さと攻撃方法ぐらい教えてくださいよ？」

ジャイアントオーガー

「敵は＜巨人獣兵＞。もう分かる通り、一部の例外を除いて、この辺にはサイズが大きいモンスターしかいません。巨体ゆえか動きは鈍重。魔法耐性は高いですが、打撃攻撃はかなり有効です。ただ、攻撃範囲と威力が高いため、一撃でも喰らえば、リユウヤ君とセーラさんは、即死でしょうネ」

「それって僕と相性悪すぎでしょ！」

「「そんな物騒な敵の前に連れていくなよ！（かないでよ！）」」

クラウドとセーラも叫ぶ。

ゲームと違って、これは一度でも死ねばその場で人生が終了の、デスゲームだ。

PKに遭って殺られるとかならまだともかく、不相応なモンスターに倒されるなんて屈辱すぎる。

「・・・ですが、経験値は先ほど狩った巨火蜥蜴三〇体分・・・どうです？効率がいいでしょう？再出現までの間隔が短いため、何匹も連続して狩ることが可能です。しかも！リュウヤ君には・・・特別に、パーティを組んで同じエリアにいれば経験値が入るシステムを利用した、個人任務があります！」

「ななななんだってー！！！」

滅茶苦茶経験値いいじゃないか！って驚くところ違った。個人任務！？

「さらに少し奥に行ったところに、<闇魔賢者><sup>アークメイジ</sup>がいます。それを狩ってきてほしいんですヨ。一人で」

「上手くいくわけないだろうがああああっ！」

「そうすればセーラさんやクラウドさんの負担も減りますシ、はっきり言って要らん子な君の時間を有効に活用できますッ！」

ぐつと拳を固めて力説するシウエルさん。

それを見て、クラウドとセーラがアイコンタクトで対処を決定した。

「「行つてらっしゃーい」」

「裏切り者おツ！」

「まあまあ落ち着いテ。＜闇魔賢者＞はその名の通り、もともとは人間だった者が、闇の魔法を行使して悪魔の力を得たとされているボスです。が、43レベルとはいえ魔術系の敵。装甲は紙ですし、HPも多くない。攻撃を受けなければ死ぬことはありません。他の三人と違い、リュウヤ君なら、勝てますヨ」

「その間、シウエルさんは何をしてるんですか？」

納得したわけではないが、まだ何かシウエルさんが口にしていない裏がある気がする。

僕が疑惑の色を載せて、じつと彼の眼を見つめると、怪しげにふつとほほ笑んだ。

「＜巨人獣兵＞の討伐の方に参戦しておきます。はつきり言って、危険度でいえばリュウヤ君の方が楽ですヨ。AGIを上げてるんだから。ですがまあ、これだけは貰って行ってください。代替人形

」

ポンツと投げ渡されたのは、ウサギにピエロの服を着せたような感じの、どこか禍々しいぬいぐるみ。

なるほど。ゲームじゃないから、アイテム交換の過程も省略されているのか・・・じゃなくって！

「なんだこれ？」

「時機に分かりますよ。分からない方がいいのですがネ」

謎めいたセリフが僕の耳に届くか否か、というタイミングで、ひよいと軽く襟元をつかみ上げられると、そのまま僕の身体は宙を舞った。

「行つてらっしゃーい」

「シウエルううううッ！帰ってきたら一回殴ってやるうううううッ！」

空中で回転しながら飛んで行っているせいか、声にエコーがかかる。

「そんな死亡フラグは立てない方がいいですよ」

ひらひらとハンカチを振っているシウエルさんを見て、僕は一発どころか、三発ぐらい魔法を当てることを決意した。

が、ぐつと拳を固めた途端に身体が落下を始める。

下には、シウエルさんたちのいる方角を睨みつけている黒いフィードの人型モンスターが。

意識を向けると、それは<闇魔賢者 LV43 AREA B O S

S>

「ええい！男は度胸、先手必勝！フラッシュ 無音移動！」

覚悟を決めると、モーションによる発動が可能となった、詠唱なしの魔法を発動する。

フラッシュ は両手をパチン！と合わせて拍手を打つ、 無音

移動 は左手の指を鳴らすと発動するように登録した。

ちなみに、あまり使わないけど 透明移動 は逆に右手の指を鳴らすと発動するようにしてある。

こうしてまとめてみると、魔法だけが強化されてるように思えるけど、武器系のアーツは、連続発動が可能になっている。

たとえば、十字型に切り払うアーツの後に、『横に切り裂くことで発動する』と登録してあるアーツを、タイムラグなしで使うことだってできるし、この場合、縦と横の切り裂く順番を入れ替えることだって可能。

こうしていくつかのアーツをつないでいけば、限らない剣舞で敵を追い詰めることができるのだ。

クラウドは今、目下これを練習中。

「『顕現せよ、永遠の炎。揺らめく影となり、敵を包め！ エターナルフレア』！」

閃光で目くらましをした後、地面に激突することもなく空中を走って背後に回る。

そして、新しいアーツを発動しながらふと思った。

こうして宙に浮くことのできる技を持っているのは、シウェルさんを除いて、三人のうち僕だけ。

それは、道を見張っている<闇魔賢者>に、地面に激突した際のダメージや音もなく不意を打つことげ出来るのは、僕以外にいないということでもある。

さらに言うと、MPの都合上、気配のつかめない、姿も見えない敵にやみくもに攻撃を放つわけにもいかない魔法系の敵とは僕がかなり相性がいい。

まして、セーラによるMP自動回復の支援呪文がかかっている状態ではなおさら。

「ったく、そこまで考えてたんだな、あのタヌキ野郎は」

この世界に閉じ込められてから、つい口調が荒くなっている気がする。

まあ、それだけ自分でも自覚のないままに、緊張していたのかもしれないけど。

立ち上った揺らめく炎を見ながら、僕は次の魔法の詠唱を開始する。

もちろん、出所を悟られないようなものしか使わない。

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール 』！」

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール 』！……！」

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール 』 ツ！……！！！」

同じアーツを、何度も連続して発動。

これは、上空からの攻撃のため、自分がどこにいるかばれることはない。

「チツ・・・poiuytrewqlkjhgfdsamnbc  
xz、 闇夜の世界 ！」

何を言っているのか相変わらずわからない呪文の後、急にクリアな音声で魔法が発動された。

<闇魔賢者>の上空に、光の魔法陣を覆い尽くすかのように闇が広がる。

そしてその闇は、物凄い勢いで辺りを飲み込み、僕の視界を漆黒一色に染めた。

「範囲魔法！？でもまだ甘い！」

先ほど、僕が掛けておいた エターナルフレア は、明るい炎のエフェクトを常に伴って継続ダメージを与える。

だから、外界からの光を遮断しようとも、焔に包まれた本人の位地ぐらいはつかめる。

「『迅雷、万物を超える速度をもって、我に害なす輩を撃ち滅せ。』」

ライトニングビーム」

言下に、眩しい閃光とともに高電圧のビームを撃ち出す。

これだけやっても、＜闇魔賢者＞のHPはまだ七割ほど残っている。さすがはボスといったところか。

「q w e r t y u i o p a s d f g h j k l z x c v b n m !  
イトメアスライア 闇の力弾 !」  
常<sup>ナ</sup>

魔法は発動した物の、辺りに異変はない。

不発か！？と思っていると、辺りにジュツという音とともに、焦げ臭いにおいが漂った。

「うわっ！卑怯くさい技だな！」

漆黒の世界の中で、同じ色の弾丸を放つ。

攻撃を予測できないばかりか、どういう技かすらつかめない。

実際、一発だけのビーム状の攻撃なのか、連続的に弾丸を放つアイツなのか、とまだその全容は把握できていない。

「くそっ！ 多重常態呪文：加速者<sup>アクセラレーター</sup>！」

僕が開発した、他のオンラインゲームや、家庭用携帯ゲームにも登場する、「緊急回避」に似た技。

急増したAGIを活かしてその場から飛び退く。

予想通り、敵の放った漆黒の攻撃が、先ほどまで僕がいたところに命中する。

「セーラがくれた支援呪文のエフェクトでこっちの居場所突き止めてるのか・・・」



奇しくも、敵の索敵方法は僕とほぼ同じ。

そうとわかってても、MP自動回復や魔法攻撃力上昇の支援効果がなくすのは痛い。

「こりゃ、早めに決着つけないとな。『聖なる世界の創造主、私の敵を束縛する光を！ ホーリーバインドローズ！』」

僕が使える、もうひとつの【高位光系魔法】アーツ。

輝く光で作られた棘のある茎が、＜聖魔賢者＞の身体を締め付ける。

じわじわと少しずつHPを奪い、魔法発動からの経過時間が十秒に達した時、茎は蕾だった薔薇の花を咲かせ、儚く散る。

見た目もかなり綺麗な魔法だが、このアーツの真価は、十秒の間、敵の動きを封じるところにある。

もっとも、常に飛んでくる弾丸の精密さは変わらない。

もう、無音移動 は解除してある。

位置がばれてるんだから、気配なんて隠しても、MPが減るだけで何のメリットもない。

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。グラン・サンダーフォール』！ ライトニング！ フラッシュ！」

詠唱しながら魔法陣を書く、魔法の多重発動。

そういや、フラッシュの「再発動待機時間」がなくなったら、それだけでだいぶチートだよな。

フラッシュの場合は、「再発動不能時間」になるから、制限時間が消えないのかもしれないけど、それよりは、誰かが人為的に、無詠唱で発動できる攻撃魔法に関しては「再発動不能時間」を残した

という方が可能性が高い。

つまり、今回の事件の裏には、コンピュータのバグやエラーなんかじゃなく、れっきとした人間がいるということ。

「無意識のうちに『事件』って言ってたもんな、僕も。『事故』だとは全く思っていなかったし。でもこう確実になると若干驚くなつと！」

少し考えている間に、＜闇魔賢者＞は失明状態から回復したらしく、また漆黒の攻撃が放たれる。

僕の残りのMPと、敵のHPはともにおよそ三〇％。次の一撃で沈める！

「やっぱトドメはこれだな！『光の加護を授けし聖神の怒りをここに！必殺の意を込めて贈る。聖光十字の四重奏』」

「ok mi j nu h b y g v t f c r d x e s z！」  
ホーリークロス・カルデット  
インターセプト・アン・アリア 詠唱妨害！

シュイインという効果音がして、僕の放った閃光が打ち消される。

当然、その後の絶大な火力を誇る十字型の白光もない。

「ちつ・・・やっぱボスだけあって、強力な切り札持ってやがったってか・・・？」

もうMPは尽きた。支援呪文による自動回復を待つしかない。が、そんな隙は与えないとばかりに、敵のさつきまでより長い詠唱が始まる。

「q a z w s x e d c r f v t g b y h n u j m i k o l p l p m  
k o n j i b h u v g y c f t x d r z s e a w q ダークネス・

アローレイン」

ずがががががつ！という音と共に、上空から闇で造られた矢が、大量に降り注ぐ。

魔法障壁でも生み出して防ぎたくとも、そのためにはMPがいる。万事休すか・・・。

「ええい！やらないよりまだ！」

両手に握った杖を構えて、身体を前に倒して疾走する。

強化されたAGIは、今回も遺憾なくその力を発揮した。腕を矢がかすめるが、致命傷には至らない。

「うおらあっ！」

闇魔賢者に近づくなり、僕は杖の柄を敵の方に向けて突きだす。支援魔法によって、物理的な攻撃力も上昇しているため、少しはダメージを与えられるはず。

杖を槍や棍代わりにして、突く、叩く、殴る。

しかも、エターナルフレアの継続ダメージもある。

持ち前のAGIのおかげで攻撃のスピードは速いものの、攻撃力の低さが枷となって、なかなかダメージを与えられない。

が、通常攻撃を加えると、その分少しずつMPが回復する仕様が。

「q w e r t y u i o p a s d f g h j k l z x c v m じふっ」

「残念でしたあ！」

接近すれば、詠唱を妨害するのに、敵が使ったような魔法は必要ない。

頬を殴れば問題ない！

「q a z w s x e d c ぶっ」

満を持して、僕はアーツを発動した。

詠唱をしながら、パンツという音を立てて、＜闇魔賢者＞の目の前で両手を合わせる。

喰らえ、必殺最強猫だまし！

「フラッシュ！ ライトニング」

バリバリっという音と、閃光、爆音の三つが、至近距離で炸裂する。

自分の耳もおかしくなりそうだったが、何とか耐えた。

次の詠唱をしながら、大きく跳躍する。

A G Iを活かして、三メートルほど飛び上がると、杖を振り降ろす。

そして、＜闇魔賢者＞が上を向いて詠唱を始めたのと同時に、僕は先ほどから唱えていたアーツを発動した。

「ライトニングビーム！」

ビームというだけあって、約二秒ほど、発射し続けるこの攻撃。

僕の放った雷撃は、まるで長大な剣のように、＜闇魔賢者＞の身体を真つ二つに焼き切った。

## Act 6 魔術繚乱（後書き）

さて、今回書いてて思ったんですが、毎回毎回詠唱の部分をコピーすると、読みにくいと思いますので、次からは、連続して魔法を放つ場合、詠唱を省略して書かせてもらうことになります。  
申し訳ありませんが、お許しください。

## Act7 パーソナルスキル

僕が<闇魔賢者><sup>アークメイジ</sup>を倒した後、いくつかのことが連続して起こった。まずは、レベルアップ。一気に38レベルになった。

そして、辺りが真っ白に染まり、水精竜のもとへ転移させられたときと同じように、足元から身体が消えていくような感覚を味わう羽目になった。

さらには転移の直前。

僕のもとに、一人の男が駆けこんできた。

そして、男が僕に触れた瞬間。

二人まとめて転移することになった。

「こ、ここは・・・？」

ふと気がつくと、辺りには夜の森の景色が広がっていた。

まだ昼だったはずだ。

それに、いかにも怪しい石碑や、祭壇に置かれた杖なんかもない。『起きたか。お前は、初めて<闇魔賢者>を独力で倒した者だ。よって、その栄誉をたたえ、称号【闇殺の魔術師】を与える。パーソナルスキルは、【聖生秘術】だ。武具<聖帝の蒼光の杖>もお前に譲ろう。これからも精進するがよい』

「・・・は？」

頭の中に、声が響いた。

その声が聞き取りにくかったわけではない。

内容が、理解できなかったわけでもない。

あまりにも信じがたいことに、思わずもれた呟き。

「パーソナルスキル・・・そうか、そういうことか・・・。あんの腹黒タヌキiiiiiii!」

きっとシウエルさんは、このことを知っていたに違いない。

で、僕にパーソナルスキルを覚えさせようと、単身で<闇魔賢者>のもとに送り込んだ。

あのシウエルさんの怪しい笑みを思い出し、僕は思わずこぶしを固めていた。

どうやら、三発ではなくその十倍ぐらいは魔法攻撃を当てなければこの怒りは晴らせないようだ。

まあ、回避力と命中力の差で、全く当たらないし、当たったとしても蚊に刺された以下のダメージしか与えられないのだろうけど。

もしかすると、痛覚が大分緩和されたこの世界では、それすらも無理かもしれない。

「おい！私を無視するな！」

「あー、くそっ！一刻も早くレベル上げて、あの人にまともなダメージを与えられるようにならないと」

「私の声が聞こえてないのか!？」

「でもあの人の強さって、レベルだけじゃなさそうだよね・・・。スキル+戦闘経験の差もあるだろうしな」

「そ！こ！の！ひ！と！聞！こ！え！て！ま！す！か！」

「ま、別に悪いことじゃなかったしそう怒ることもないか」

あ？さつきからわめいてるのは放置しておいていいのかって？  
もちろん。あんな怪しい輩はまともに相手しない方がいい。

「うつ・・・私って・・・グスッ」

うん。無視、シカトを決め込もう。

というか、さっさと帰らせてもらえないのかな？

「こらあつ！人の話を聞けえええええええつ！」

ズドッ！

氷でできていると思われる弾丸が、辺りにめり込んだ。

ここまで来ると、さすがに無視もできない。

「どうしたんですか？僕に何か用でも？」

「やっと聞いてもらえたあ・・・じゃなくって！私、道に迷ってあの辺りをうろろしていたら、貴方を見つけまして。で、初心者なもので右も左もわからないから、街への教えてもらおうと思って。後、ログインした時に変な文字列が表示されたんですけど、あれって大事なイベントの予告か何かですか！？それにここがどこかわからないし、さつきからぶつぶつと独り言を言っているようですけどどうしたんですか！」

「いや・・・聞いたの僕だけど、そんないろいろ並べたてられても」

何というか、今で物凄く疲労感が増した気がする。

誰かがしゃべっているのを聞いているだけで疲れたのは、これが初めてだよ。ホントに。



「そうですか。もう一回言いなおしますね！」

「・・・・・・・・」

最早、つつこも気力も失せた。

また目の前の女の子がしゃべっている間、僕は彼女の奇抜な風貌を観察していた。

まず、特徴的なのはかなり綺麗に整った顔。

いくらゲームの補正があるとはいえ、現実の顔が元になっているのだから、現実世界ではさぞかしモテていることだろう。

深い緑の長髪に、ライトグリーンの眼も、彼女によく似合っていて、センスがいいと言わざるを得ない。

僕みたいなまがい者じゃなく、正統派魔術師という感じの彼女の装備は、両手杖に翡翠のネックレス。

服はさすがに緑にしないつもりらしく、白と金であつらえられた、初心者が好むローブ。

「って、聞いてるんですか!？」

「うん聞いてた聞いてた。で、僕に何をしてほしいの？」

全く聞いていなかったが、適当に流すと決意した僕は、あーうんうん、と首を縦に振る。

「結局聞いてなかったんじゃないですか!できれば、【城下町：アルザス】まで送っていつてほしいなあーって。後は今何が起こっているのかとか、教えてほしいなあー」

結局厚かましい女だなオイ!

つつこも気力がないと言いながら、思わず心のなかでツツコミを入れてしまった。

「ひ、酷いです!貴方だってアルザスに帰るんでしょう?案内して

くれたっていいじゃないですか！一人で帰るより二人で帰った方が安心です！」

「他にパーティーメンバーいるしね（それに君みたいなのうるさいのがあるより一人の方がましだよ！）」

もち、（ ）の部分は心の中で言っている。

「う、うるさい！？そっか・・・私うるさいんだ。じゃあ静かにするから連れて行ってください！」

げ、心読めるの？んなわけないか。

ま、そんなことよりもっと差し迫った問題がある。

「あーもう分かった分かった。とりあえずここから戻らないとね。で、パーティーのメンバーに同行の許可貰ったらいいんじゃない？ここから出る方法わかる？」

「あ、分かんないけど、あの石碑みたいなものの上のくぼみに、杖を刺してみればいいんじゃない？ほら、有ったですよ？アーサー王の伝説。アレの逆バージョンで、刺してみれば何か起こるかもしれませんよ！」

なるほど。確かにあんな怪しげな石碑が、ただの飾りであるわけがない。

青白い光を放っている杖を手にとってみると、初めて触るのに、何故か心地よく手になじんだ。

まるで、何年も前から扱っているかのように。

どんな効果があるのかは・・・今見るのも楽しみが減る。後に残しておこうか。

そして、石碑の方に向き直る。

石碑の上側にある円柱状に彫られた穴に、思い切りよく杖を差し込んだ。

途端に、僕の視界はまた白光で満たされた。

## A c t 7 パーソナルスキル（後書き）

質問です。

対巨人獣兵戦は書いておいた方がいいですか？

主人公目線なので、別行動中の他のメンバーについての話はどうしても抜けてしまいがちで。

希望があれば、サイドストーリーSSとして書かせていただきます。

## Last Act 背負わされた業

「で、出られたー!」

「ねえねえ、貴方のパーティメンバーはどこにいますか?案内してください」

僕が白光から視界を取り戻し、辺りを眺めまわすと、景色はまた昼の森に戻っていた。

「ああ、ついてきて。多分向こうの戦闘もそろそろおわ・・・ってタイミングいいな、今敵を倒し終わったみたい」

効果音と共に、レベルアップが確認できた。

えーと、今現在のレベルは42。危な・・・、多分さっきのところにいたらこれだけおいしい経験値が入らなかっただろう。

悔しいが、目の前にいるこの小さいサイズの女の子はとても役に立ってくれた。

当然、何らかの形で恩返しをしなければならない。

「INTとAGIに振り。SPはそうだな。せっかくだから【聖生秘術】に振ってみるか。何かいいのがでるかな?」

パーソナルスキルなんだから、当然強力なアーツが使えるようになるはず。

僕は、これまでためておいたスキルポイントを、惜しげもなく全部【聖生秘術】に振りこんだ。

「あ、そうだ。君の名前を聞いていなかったね。なんて名前?」  
処理が終わるまでの時間を、適当な雑談で潰す。

名前は、<エリーナ LV35>と出てあるから、本当に名前を聞きたかったわけではない。

「私は、エリーナと言います！以後よろしくお願いしますです！」

「あ、終わった終わった。えーと、何を覚えたのかな？」

「自分から聞いておいて無視するな！」

「聞いてる。聞いてるって」

結果、ゲットできたアーツは四つ。

それは、【灼音の命撃】と【転現蘇生】に【創世防壁】【魔光砲撃】。  
サイレント・キル トワイライト クリエイトプロテクター マジカルビーム

残念なことに、【創世防壁】はMPが足りず使えない。

というより、レベル70ぐらいにならないと使えない気がする。

さらに、【転現蘇生】は一回しか使えない単発のアーツ。  
トワイライト

一回使うと、もう二度と使うことはできない。

「まともに使えるのは【灼音の命撃】【魔光砲撃】だけか・・・」  
サイレント・キル マジカルビーム

「ねえねえ、何の話です？あ！そういえば貴方はあそこで何をしていたのです？」

どうしようか。

パーソナルスキルといえば、周りの皆が欲しがるような物だ。

しかも、この事件の後じゃ強力な戦力になる。つまり、先に排除しようとする者、無理やりにも仲間に引き入れようとする者が現れてもおかしくない。

そんなものを、「僕持つてるんだよー」などと迂闊にホイホイ言いふらすわけにはいかない。

「ああ、間違えて轉移させられちゃってね。出ようにも出方がわからなかったんだよ」

「そうなんですかー。で、いつになったら会えるんですか？リユウヤさんのパーティメンバーに」

どうやら、エリーナはあっさりと納得してくれたようだ。

この子、本当に天然なんだなあ・・・。

「そろそろ行こうか。スキルポイントも振れたしね」

「行っきまっしょう」

「りょーかい」

マップウィンドウを表示すると、パーティメンバーの現在地がアイコンで表示される。

ざっと、北へ五百メートルといったところか。

「ちょっとごめんねー、しっかり背中に捕まってね」

何のことかわからない、と首をかしげているエリーナをひょいと担いで背中に乗せる。

そのままの状態で意識を集中して、多重常態呪文：加速者を発動する。

超加速状態になった僕は、百メートル五秒台の速さで疾走することが可能だ。

まあ、単純計算で五百メートルは二十五秒弱で走りきれることになる。

これで百キロとか走ろうとすると、MPと体力が切れてしまうため、長距離の移動にはあまり向いていないが、短距離ならこの世界で僕に勝てるプレイヤーは少ないだろう。

「ひゃういっ！ななななななななんですか！滅茶苦茶速い

ですよっ！」

「この世界じゃ、ステータスとアーツで足を速くすることができるからね」

慌てに慌てて、まさに文字通り右往左往と身じろぎしているエリーナに、若干苦笑しつつも、しゃべっている最中にもう目の前に幾十人分もの人影が見えていた。

「ん？『幾十』？」

まだクラウドたちが巨人獣兵と戦い始めてから、まだ十五分ぐらいしかたっていないはず。

それなのに、これだけの人に囲まれているとなると・・・

「PKか！」

「はわわ、PKです！」

奇しくも、僕とエリーナのセリフはかぶってしまったが、そんなことに注意は払っていない。

シウエルさんが付いているとは言っても、敵のレベルや正確な人数がわからない現状では、最大限に警戒するべきだ。

僕は、小声でエリーナに囁いた。

「君も、戦える？無理ならここでアルザスに帰らせてあげるけど。戦えるなら、ついてきてくれると嬉しい」

さすがに一緒に来るのをためらうかと思ったが、意外にも全く躊躇うことなくすぐに首を振った。

上下に。



「もちろん行きますっ！」

「良く言ってくれた！じゃあ僕が フラッシュ を発動したら、すぐに魔法を発動してね。できれば範囲魔法がいいと思う」

「ふえ！なんで私が魔法を使うつてわかったんですか！それに フラッシュ ってなんですか！」

「持つてる装備からして一目瞭然だし。 フラッシュ っていうのは、一閃光弾 スタングレネード みたいなものだよ」

教えながら、クラウドに心話を送る。

同時に、手元にウィンドウを生じさせて軽くいじる。

『クラウド！現状を手短に教えてくれ！』

『いいところに来てくれた！今、二十三人のPKに囲まれてる！シウエルさん含めて皆、移動速度減少や攻撃力低下、防御力低下、HP・MP最大値低下、AGI低下の状態異常呪文を掛けられてる！一度に全員を相手にしてシウエルさんが戦ってるけど、敵もかなり強い！平均レベルは45ぐらいあるんじゃないか？』

ギリつと僕は思わず歯ぎしりをしていた。

圧倒的に不利な状況じゃないか！

『今すぐ援護に向かう！何とか持ちこたえてくれよ！』

返事も聞かず、僕はそのまま心話を切つて、エリーナに指示を飛ばした。

「エリーナ・・・行くよ」

「あ、名前で呼んでくれた！じゃないです。分かりました。行きましょう！目を閉じておきますね」

両手をパンツと合わせて、目くらましに閃光を発生させる。

僕の攻撃パターンは、クラウドやシウエルさんたちも知っている

から、援護が来ると分かった瞬間目を閉じていることだろう。

「ハイディング・ムーブ  
透明移動！」

「絨毯炎槍の薙 《クラスター・フレアランス》！」

ゴウツという音と共に、敵たちの上空に幾本もの焰でできた槍が出現する。

「な、なんだなんだ！」

「援軍か！」

「ちっ。怯むことはない！敵はせいぜいレベル40程度だ！あのふざけたテスター野郎を除けば脅威ですらないぞ！」

「そのテスター野郎一人にケチヨンケチヨンにされてる貴方達は何なんでしょうネ？」

透明のまま近づいて見ると、十数人の剣士を片手剣と拳銃だけであしらっているシウエルさんの姿が見えた。

余裕そうな発言とは裏腹に、額に汗が浮いている。

ときどき、鮮血も舞っていた。

「てめえら・・・生きて帰れると思うんじゃないぞ！」

僕は、自分が真剣に怒っていることを自覚した。

「来た！リュウヤのマジギレ状態」

敵の魔法使いと思われる人影に切りかかっているクラウドの軽口も、あっさりと聞きながす。

「ライトニングビーム！」

約二秒間しか持たないとはいえ、長大な射程を誇る雷撃が、蒼白く輝く杖の先から発射される。

シウエルさんに群がっていた敵には面白いように命中した。

「くそっ！さがれ！一端下がって新手の敵に戦力を裂け！テスターと戦うのは最後でいい！」

「グラン・サンダーフォール 聖光十字の四重奏」

「い、いくです！『神上の兵器となりし巨人の吐息。我の手先となり敵を滅ぼせ。風神の破城槌<sup>エア・ハンマー</sup>』」

雷撃がほとばしった後、辺りを覆いつくすようにまばゆい光が生じた。

そして高威力の白光が、十字型に敵を襲うのと、上から音速に迫る勢いで風圧塊が叩きつけられるのが同時だった。

轟音と爆風、閃光が辺りを滅茶苦茶に襲うが、ぼくのパーティーメンバーには何の被害も及んでいなかった。

通常、エリーナの攻撃はクラウドたちに当たってしまうのだが、PKを確認した時に、エリーナをパーティーに誘っておいたため、味方を誤射してしまう心配はなかった。

「ぐはあっ！」

シウエルさんから多くのダメージを被っていた戦士や、盗賊系のプレイスタイルの敵が、数人倒れ伏す。

エリーナはINTに全て振っている、純粹火力の魔法使いタイプなのだろう。

彼女の攻撃は、格下とはいえども、侮れない威力を誇っていたが、それは裏を返せば、防御力や回避力がほぼ皆無ということ。

敵を一人も彼女に近づかせずに、全員殲滅しなければ！

僕は、今覚えたばかりのパーソナルスキルを使用することを決意した。

「魔光砲撃（マジカルビーム）！」

僕の周辺に、幾十もの輝く光の球が出現した。

そして、僕が腕を振り降ろすと、その一つ一つから、猛烈な力を秘めた光線が迸る。

僕がアーツを発動した瞬間、シウエルさんの口元が、ニヤツと歪むのを見た。

まるで「いたずら成功！」と喜ぶ子どものように。

「その調子ですよ、リュウヤ君！さて、私も負けてはいられません  
ネ レールガン 電磁弾発射銃」

シウエルさんが手に持っていた拳銃から、音速の三倍を超える速度で弾丸が打ち出される。

一撃でせつせと回復魔法を発動していた女の心臓を打ち抜く。

彼女のHPバーが一気にゼロになり、断末魔の悲鳴を上げることすら許されずに、姿がぼやけてついに消滅した。

「シウエル！図ったなこの野郎！」

「口と人聞きが悪いですよ、リュウヤ君。強くなれたんだからいいじゃないですか」

「あらかじめ言っておいてくれりゃよかったのによ！」

「いいサプライズになったでしょう？」

言い合いつつも、お互いに寄ってくる敵を仕留めるのは忘れない。

こちらにはたった五人しかいないのにもかかわらず、戦闘開始四分で、二十人以上いたレベルが上の敵の数はその半分以上にまで減じていた。

「ちっ。なめんじゃねえぞクソガキがあああああつ！」

さつきから他の人に指示を飛ばしていたリーダーと思しき男と、その取り巻き二人が、僕めがけて斬りかかってきた。

ここでシウエルさんやクラウドといった戦士系に向かわないところ、あえて一人ではなく三人できたところが、物凄く格好悪い。

「失せる！ フラッシュ！ ライトニングビーム！」

閃光が生じるが、驚くことに三人には効果がなかった。

不敵に笑ったリーダーが、手に持った長剣で僕に切りかかってきたが、ぎりぎりで雷撃で迎え撃つ。

命中するも、敵のHPバーはほとんど削れなかった。

もともと減つてい多分を合わせて、残り3割から2・7割ぐらいになった程度だろうか。

「効かないな！」

意識を向けて、敵のレベルを読みとると、レベル60だった。

三人とも、同じレベルで全員戦士系。

この三人が、このPK団でのさばっていたに違いない。

「そうか。雷撃に対する抵抗力が異様に高いのか・・・よし、エリナ！」

「はうい！やるますよ！ 獄焔の破烈砲<sup>ヘルブレイズ</sup>！」

僕の方にすっかり気を取られていたリーダーたちに、真横から摂氏3000の熱線が直撃する。

バタバタと、二人の男が倒れ伏して消滅した。

残るは、リーダーただ一人。

「甘いぜえっ！俺はなあ、属性魔法無効のレアスキルを揃えてんだよお！つまり、雷に水に風に炎、闇や光の全ての属性の魔法攻撃は、俺にとどかねえ！」

ちっ。相對するのにこれだけ相性の悪い敵はいないかもしれない。

「はっ。ほざいてろ！ホーリーバインドローズ！」

光でできた茎が、リーダーの身体を締め付ける。

「ぐっ・・・ち。まあいい。こいつが消えた時が、お前の命が尽きる時だからなあ！」

瞬時に魔法の効果を悟ったリーダーは、余計な抵抗を諦めたようだ。

確かに、魔法が効かなければ僕に勝ち目はないかもしれない。が、違う。

「『至上の力の根源より導かれし奔流。静かに敵の命を燃やしつくせ。灼音の命撃（サイレント。キル）』」

辺りから音が消えた。

戦闘の音も、爆発音も、木々のそよぐ音すらも、まるで時間が止まってしまったかのように停止している。

そんな空間の中を、一陣の焰を纏った衝撃波が走り抜けた。

数秒して辺りに音が戻ってきたとき、立っている者は、僕たちのPT五人しか残っていなかった。

## S a i d S t o r y 1 対巨人獣兵 前編（前書き）

更新遅れました！

二回、データが飛んでしまったんです。  
申し訳ありませんでした。

今回は、番外編になります。が、おそらく次回からは現実世界での話になると思います。

では、サイドストーリー、どうぞ！



## S a i d S t o r y 1 対巨人獣兵 前編

「シウエルさん！リュウヤをどこにやったんですか！？」

リュウヤが目の前で投げ飛ばされ、驚いたクラウドが抗議の叫び声を上げる。

「ちょっと修行に送りだしました。帰ってくる頃には桁違いの強さを手に入れていると思いますヨ」

シウエルは、どこ吹く風といった様子で、クラウドの抗議をやり過ぐすと、パッチリとウインクを決めながら、クルリと体の向きを変え、ゆっくりと歩き出した。

「ま、心配しなくてもあいつは強いからなあ。精神面は置いておいて。俺たちは自分のレベル上げでもやっておくか」

やれやれ、と肩をすくめたクラウドも、巨大な足音を鳴らしているく巨人獣兵＞の方に向かって駆け出した。

残っていたセーラも、「ま、待ちなさいよっ！」と駆けだしているく。

この時、背後から忍び寄る幾つもの人影には、誰も気が付いていなかった。

いや、シウエルの口元にだけは、まるで獲物を見つけた虎のような、獰猛で、残忍な笑みが浮かんでいた。

「で、でつかーーーーー!」

震源地にたどりつくと、其処にはなんと横幅10メートル、縦二十メートルのでっかい獣がいた。

もう聞かなくても見なくても、あれが目的の<巨人獣兵>だと知れる。

「あああああんなおおっきいのと戦うんですか!」

「いやー、まさかあんなに大きな個体がいるとはネ……。私にも予想外でしたヨ」

答えるシウエルの額にも、若干の冷汗が浮かんでいる。

「まあ、やってやるしかないんだよな!行くぞ!手伝ってくれよ、シウエルさん!」

「君ってさっきからホントに開き直るのが早いすネ」

「ウジウジ悩んでたって、なにも良いことないだろ。前に進んで、がむしゃらに前に進んでいれば、勝手

に道は開けているさ」

クラウドは、呟きながら一歩、前に向かって足を踏み出した。

「やれやれ。単細胞なガキですネ。まあ、嫌いではないですが」

肩をすくめたシウエルも、虚空から光の粒子と共に、二丁の拳銃を取り出した。

慣れた手つきでマガジンを交換し、撃鉄を下ろす。

「あ、あたしだってやればできるんだからね！あの程度、眼をつぶってても倒せるわよ！」

慌ててセリアも杖を構え、支援呪文の詠唱を開始する。

「グギヤアツアアアツアアアアアアアアアアツ！」

耳を劈く様な獣の咆哮が、スタートの合図になった。

「私があいつのHPを三分の一にまで減らしますから、それからは二人で頑張ってくださいネ」

「了解！」

ニヤツと唇を歪めたシウエルは、いつでも発射できるようにしておいた拳銃で、＜巨人獣兵＞の頭部に照準を当てる。

「さあて、ちょっと派手に行きますヨ。」

エレクトリック・チャージバズーカ  
荷電粒子砲」

ドンツ！という音が二発轟き、蒼い光条が伸びる。

加速器を用いた上で、イオン化した原子や電荷を持つ素粒子などの荷電粒子に超高電圧をかけ、高速で発射する、近未来兵器。

この世界では、魔法を用いて必要な大電力を補っているという仕様だ。

発射された荷電粒子の塊は、見事に＜巨人獣兵＞の頭に二つの穴

を穿ったが、致命傷には至らなかった。

「まだまだ行きます。 七神融弾！」

火、水、風、土、雷、光、闇の七つの属性全てを一つにまとめた光線を放つ一撃。

二つの拳銃で同時発射されたそれは、さらに先ほどがたれた穴の周りを決る。

「ガLLLLルルウ・・・グアッアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

HPを半分ほど削られて、獣の苦悶の叫びが、怒りの咆哮に変わる。

「これで終いです。一回新しいこのアーツを使ってみたかったんですよネ。――蒼天に咲く弾幕の雨――！」

クククククツと、悪役同然の意地の悪い笑い声が、シウエルの喉から漏れる。

拳銃が発光した瞬間、眼にもとまらぬ勢いで引き金が次々と引かれる。

ただし、銃口はく巨人獣兵ではなく、晴れ渡った空に向けられている。

「おい、シウエルさん！何を無駄打ちして・・・」

「いいから黙って見ててください。ほーら、面白いことになりますヨ」

このアーツの効果時間は、ちょうど十秒。

引き金が一回引かれるたびに、上空には三十の色とりどりの弾丸が出現する。

そして、十秒間の間にシウエルの二丁の拳銃の引き金は、それぞれ二十五回ずつ引かれている。

25×2×30＝1500。

拳銃がさらに激しく発光したかと思うと、1500もの弾丸が一齐に＜巨人獣兵＞目掛けて襲いかかる。

従来の法則を取り戻して得た、自由落下の上にさらに加速させられる。

「ガガガガガガガガガガガガガガガッ！」

一気に全身に弾丸の雨を浴び、HP云々以前に、大きく体勢を崩してよろめいた＜巨人獣兵＞の足元に疾走したシウエルの蹴りが決まる。

もちろん、ただの蹴りではなく専用のアーツも用いられているが。

獣の巨体が、大きな揺れを引き起こしながら、地に叩きつけられる。

そして、その眉間には、2丁のけん銃がぴつたりと押し当てられていた。

「やっぱりあっけなかつたですネ。だいぶんこれでも手加減したんですガ。ま、ここから先は二人で頑張ってください」

「……………なんていうか、敵が哀れに見えてくるな」

一度も反撃ができないまま、地面に引き倒されたく巨人獣兵の気持ちを推し量ることはできないが、案外「さっさと止めを刺してくれ！」と願っているかもしれない。

「・・・ねえ、なんだかあいつの様子がおかしいわよ」

そんなことを考えていたクラウドは、一瞬、異変に気づくのが遅れてしまった。

普通なら、問題にならないような僅かな隙が、今は『普通』ではなかった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

全身から深紅のオーラを立ち上らせたく巨人獣兵が、のっそりと土煙の中で起き上がった。同時に、辺りの地面を抉って手にした土塊を、クラウドめがけて投げつける。

それが、彼の脇腹を軽く傷つけ、同時に意識を引き戻した原因。

「ど、どうなってんだあれは！説明してくれ、シウエルさん！」

慌てふためいているのが丸わかりなクラウドを見て、ちょこんと首をかしげたシウエルは、何を思いついたのかポン！と手を打ち鳴らした。

「あれ、言っでませんでしたっけ？く巨人獣兵は、残りHPが3割になると、【狂化】するんですヨ。内容は・・・」

大きさ、攻撃力、防御力、スピードなど、全てのパラメータ

が、1・5倍になります

「聞いてねえええええええっ！で、手伝う気は！」

「毛頭ありません！」

「即答かよオイ！」

「漫才やつてる場合じゃないわよっ！」

セリアは、思わず現実逃避をするかのように、シウエルと漫才を始めたクラウドに駆け寄り、彼の身体を抱え込みながら地面に倒れる。

ほぼ同時に、空気を切り裂く音と共に、先ほどまで彼のいたところを、破壊力抜群の土塊が通過する。

「あんたバカ！？まずはあいつを何とかしないと！」

「わ、悪い。ついでにちょっと離れてくれるとありがたいんだが」

は？と首をかしげたセリアは、自分の身体を見下ろし、顔を真っ赤にしながら慌てて飛び退く。

「てえりやああああああっ！燃え尽きろオオオオっ！ 爆炎纏剣

」

セリアがどいた途端、抜剣したクラウドは、大上段に振りかぶった剣を、勢い良く振り降ろす。

敵までまだ数十メートルある今の位置では、到底無意味に思われるが、振り降ろされるその最中に、剣の先から膨大な熱量を持った炎が、うねりを上げながら百メートルほど伸びている。

もつもつと立ち込める土煙を通して、深く傷つけられた地面が見える。

アーツによって生み出された炎が、綺麗に土を蒸発させたため、大きくて長い亀裂が、一直線に走っている。が、どこにもく巨人獣兵の姿はない。

「やったか・・・？」

自身の剣の手ごたえを確かめっていると、彼の後方から甲高い悲鳴が聞こえた。

「クラウド！後ろ！」

思わず振り返ったクラウドは、信じられない物を見た。

物凄い巨体が、超速で動き、いつの間にか背後に回り込んでいたのだ。

もちろん回避も間に合わず、クラウドはく巨人獣兵の蹴りを、正面から食らった。

「クラウド！！！！  
ヒールング・ハートビート  
脈動回復」

一気に八割ほど削られたHPが、セリアの回復呪文によって、次第に回復していく。

おかげですぐに傷も痛みもなくなった物の、不覚を突かれた悔しさと怒りは、クラウドの中に溜まっていた。

「舐めやがって！行くぞ、化け物オオオオっ！」

舐めていたのはどちらだよ、というツッコミを入れるような人はいなかったため、自分たちから攻撃しておいて何様のつもりだ、お前。と言いたくなるような理不尽なセリフを吐き重ねながら、クラ



ウドは再度鞘にしまった剣を抜き放った。

「せえやああああああああっ！喰らえ、俺の今の最大火力  
ホーリーエンチャントソード  
！ 聖なる光の加護の剣 ！」

辺りが、白銀色の光に閉ざされた。

## S a i d S t o r y 1 対巨人獣兵 前編（後書き）

とか言いつつ、前編で終わってしまいましたorz

次こそ終わらせますので、お許しください！

後ついに完全にストックが尽きました。そしてゴールデンウィークには大量の宿題と部活の試合があります。

なかなか更新できなくなると思います。

本当にごめんなさい。

それでも読んでくださっている読者の皆さま、これからもどうぞ拙作をよろしく願います。

S a i d S t o r y 2 対巨人獣兵 後編（前書き）

遅くなりました！

次こそ、第三章に入ります。

．．．．．本当だよ？

## S a i d S t o r y 2 対巨人獣兵 後編

「こ、今度こそ殺れたか・・・？」

白銀色の光が収まり、ぽつりとクラウドが荒い息と共に呟いた。

が、そんな淡い期待は、儚く散った。

「グアアアアアアアアッ！コロシテヤル・・・コロシテヤルウウウウウッ！」

「どうやら、頭もよくなってるみたいね」

答えるセーラの額からは、大粒の汗が流れている。

目の前の＜巨人獣兵＞は、いつの間にか図体に見合う大きさの戦斧を握っていた。

柄の部分は多分ヒノキで造られていて、それ以外は鋼製。

それでも、あくまでクラウドは不敵な笑みを消さない。

「残りHPは後2割程度か・・・。行くぞ、セーラ。支援と回復は任せた！リュウヤが帰ってくるまでに、なんとしても倒しておかねえとな」

「ええい、女は度胸！分かったわよ！了解っ！」

もうセーラの叫びは、ヤケクソに近い状態だった。

が、支援系のアーツはきっちり発動させ、クラウドの身体には色とりどりのオーラが揺らめいている。

「せええええええええやあっ！」

ガキイイン

「がはっ！」

金属音が鳴ったかと思うと、＜巨人獣兵＞に斬りかかっていたクラウドの身体が、大きく吹き飛ばされ、近くの樹にぶつかった。

一部始終を見ていたセーラにも、＜巨人獣兵＞が自らの戦斧でクラウドの攻撃を受け止め、弾き返したのだとは、すぐに気付くことができなかった。

「クラウドっ！ 緊急回復 治癒促進！」

詠唱時間が短い代わりに、回復量の少ない治癒呪文と、自然回復の速度を速める呪文を併用。

「チツ・・・ありがとな。それにしてもあいつ強すぎる」

「確かに。クラウド一人で勝てる相手じゃないわよ！ そうだ、シウエルさんは！ もしかしたらこんなに強い相手なんだし・・・手伝ってくれそうにないわね」

期待を込めた目で後ろを振り返ったセーラは、そそくさと走り出しているシウエルの姿を捕え、聞いただけで同情を誘うような、特大のため息をついた。

「そうだろうな。でもな、何があってもリユウヤの助けだけは借りねえぞ。あいつの手を借りたら意味がないんだよ。あいつが来る前に、サクツと殺してやる。行くぞ！ 聖なる光の加護の剣！」

「ちよっと！ ちゃんと作戦立ててから行かないとさっきみたいないなこ

とに・・・」

白銀色の閃光が眩しく煌めくが、今のく巨人獣兵く大した効果がないうえ、MPの残りがもうほとんどない状態にあることは見て取れた。

「あのバカ！せめてMP回復ポーションぐらい飲んで行きなさいよね！ 天の魔力の御裾分け！」

この世界でおそらく唯一のMP回復呪文。

対象者の最大MPの三分の一を即座に回復する効果だが、二四時間一度しか使えない。

前衛職であるクラウドのMPなんて微々たるもの。その三分の一といったら、大した量ではない。

「グアアツアアアアツ！メガ！メガ！オノレ、ドコニイッタ！」

閃光で、目をつぶされたく巨人獣兵くが、やみくもに斧を振りまわす。

が、そんな攻撃を受け付けるほど、クラウドも甘くはない。

「こ、こ、だ！」

空高くジャンプしていたクラウドは、斧の刃の部分にすんと着地した。

そして、ニヤツと笑って、腕を高く振り上げた。

「ざあゝんねゝん！<sup>フライ・ソニックブーム</sup>天翔ける衝撃の刃！」

クラウドが切り下げた剣の軌跡に沿って、見えない斬撃が走り出

す。

打ち出した方向が悪く、その斬撃は、＜巨人獣兵＞の身体には届かなかった。

「クラウド！どこを狙ってるのよ！」

「時機に分かるさ！」

クラウドは、一端剣を鞘に納めると、勢いよく引き抜いた。

「ええいやややあつ！ 燕返し！」

五回連続で剣を振り、縦、横、袈裟斬り、逆袈裟、剣突を敵に浴びせる。

その間にかかる時間は、およそコンマ三秒。

隙が大きい半面、瞬間攻撃力は打撃攻撃としては最高クラス。

武器の攻撃力がそこまでないクラウドでも、＜巨人獣兵＞程度の物理防御力なら、四割はHPを削ることができる。

が、HPと物理防御が二倍になっている今の状態では、一割しか削れない。

「グアツ！コ、コザカシイマネヲ！」

ブオン！と大きな音を立てて、＜巨人獣兵＞が手に持った戦斧で辺り一帯を薙ぎ払・・・おうとした。

が、肝心の刃の部分が、バツサリと切り裂かれていて、クラウドには届かなかった。

「さっきの攻撃で、刃の部分だけ斬り落としておいたんだよ！分かったか、この脳無しの禿が！」

「クラウドっ！調子に乗ってないで避けて！」

敵を騙した優越感に浸っていたクラウドは、迫りくる<巨人獣兵>の拳に気付かなかった。

ちよつと人体からなっっているいい音とは思えないエグい音がして、またクラウドの身体が吹き飛ばされる。

「くっ・・・そ・・・」

彼のHPバーが一気に僅か数ドットにまで削られる。

しかも敵にも知恵がついたらしく、すかさず追撃を仕掛けてきた。

「コレデトドメダアアアアアアアッ」

<巨人獣兵>が空気を切り裂きながら、毛むくじやらの腕で殴りかかる。

「クラウドッ！」

「ええい、ちくしょう！一か八か！聖なる光の加護の剣！」

セーラの悲鳴と共に、いつも通り白銀の光が弾けた。

運のいいことに、クリティカルヒットを示す光のエフェクトがきらめいたが、一撃で<巨人獣兵>の命を奪うほどの威力はなかった。空中にいるクラウドには、いまさら回避行動をとる余裕はない。

「くそっ！俺はまだ消える訳にいかないってのに・・・」

「このシウエルのボケ禿くそカス冷徹な人外のノータリン野郎！仲間が死にかけてるってのに、さっさと助けなさいよ！」

こんな敵と戦わせた、しかも自分は一瞬で何とかできる力を持つ



ていながら傍観に徹している、シウエルに罵詈雑言を浴びせながらも、必死で回復呪文を唱えるが、間に合いそうにない。

「大丈夫ですヨ、ホラ。リュウヤ君がやってくれたようですね」

近くの森の木陰からひよつこりと顔を出したシウエルが、何やら意味深なことを呟くが、セーラはともかくクラウドにはしっかりと伝わったようだ。

「ったく・・・結局あいつの力を借りることになったじゃねえかよ。天翔ける衝撃の刃　！　聖なる光の加護の剣　！」

空中で無理な体勢から、二つのアーツを放つクラウド。

そしてそれは、実にパンチが彼の身体に当たる一秒前に、＜巨人獣兵＞の身体を貫き、焼いた。

アーツによる強制的な動きによって、体中の腱や筋肉がみしみしと悲鳴を上げるが、クラウドは歯を食いしばって黙殺した。

二つのアーツによって、＜巨人獣兵＞が吹き飛ばされた隙に着地し、「レベルが上がったことによるスキルポイント」を振り分けて得た新アーツを発動する。

「くたばれえええええっ！　召喚されし夢幻の剣インフィニティ・サモン　！」

キラキラと舞うエフェクトと共に、数百本の剣がクラウドの前に出現した。

「斬り尽くせ！」

マシンガンのように、絶え間なく剣が打ち出される。

剣と言うより、日本刀のようなものや、サーベルまでが含まれて

いた。

「ガアアアアアアツ・・・ハッ・・・・・・・・！」

全身を串刺しにされたく巨人獣兵は、辺り一帯に震度三程度の地震を引き起こしながら後ろに倒れ、ついに粒子となって消えた。

「いやぁ・・・終わりましたネ。どうですか？レベルが上がったでしょう」

「代わりに死にかけたけどな！むしろ三途の川が見えてたぞ、こらっ！」

「ま、こういう時も持ち前の開き直りを發揮して立ち直ってください。・・・新たな敵が来ますヨ」

シウエルに言われ、クラウドとセーラが慌てて背後を振り返ると、其処には数多の人影が。

そしてその一人一人から、「PKモード」にしている者特有の殺気を感じ取れた。

「ちっ・・・やるぞ！セーラ、いけるか？」

「あ、あたしはもちろんやれるわよっ！それより、クラウドこそもうMPがほとんどないじゃない！あんな大技を、ただか残り〇・三三三割程度のHPに使うなんて・・・ばあつかじゃないの！」

「何だと！あれは新アーツを試すのには絶好の機会だっただろ？それに、こんなに敵に囲まれてるなんて気付かなかったんだししょうがない！」

「ぎゃあぎゃあ」と言い争う二人に空気を讀んだのか、敵も動こうとはしなかった。

ただ、あきれて言葉が出なかったただけなのかもしれないが。

「はいはい、夫婦喧嘩は其処までデ」

「誰が夫婦だっ（よっ）！」

「ベタな展開をどうもありがとウ。・・・来ますヨ」

シウエルが言った瞬間、人影が斬りかかってきた。

「奴らを殺せええええええええええっ！こっちは人数が人数だ、恐れるこたあないぞ！」

「さあて、あいつらには遠慮がいらねんだよな、シウエルさん？」

「もちろン。今のあなたに何ができるのかは疑問ですが・・・思う存分、やっちゃってください」

クラウドの顔に、余裕を取り戻したような、不敵な笑みが浮かんだ。

S a i d S t o r y 2 対巨人獣兵 後編（後書き）

ついに一万PVを突破しました！

読者の方々、ありがとうございます。

本当なら記念に何かしたいのですが、それはまた次の機会に・・・。  
ではまた今度は現実の世界でお会いしましょう。

### 第三章   A c t 1   異変の始まり（前書き）

今回、だいぶん時間を進めます。

リュウヤたちの居る世界で換算して、ざっと今話だけで二日は進んでいると思います。

それは、時間の流れが違うということで、お許しください。

ちなみに、その間リュウヤ達は、必死でレベル上げと装備揃えにいらしています。

### 第三章 Act 1 異変の始まり

時は少し流れて、四月九日の午前六時

。

自衛隊・警察・消防の三つの機関の電話のベルが、ほぼ一斉に鳴り始めた。

「はい、こちら警視庁奥多摩区支部です。どうされましたか？」  
「こちら119番です、どうされましたか？」

日本全土のあちこちで110番、119番通報がなされたが、どれも内容はほぼ一緒だった。

『VRSゲームをやっていた家族・友人が戻ってこない』

VRの特性上、現実世界の時間で八時間が経過すると、強制的に意識を引き戻される。

もちろん、そうなってしまうとその後一時間はプレイできないことになってしまうのだが、それは公表されていない・・・というより、説明書の端の方に小さい文字で書いてある。誰もそんなところまでチェックしないだろ、という運営側の意図が見え見えだ。

一般人にとってはほぼ未知の技術であるVRに関することだけあってか、通報者の声にもかなりの焦燥感がにじんでいる。

「落ち着いて、詳しい話を聞かせてください」  
「詳細な状況説明をお願いしますか？」

そんな通報者から得られた情報によると、事件の概要はこうい

ことらしい。

『昨日の午後八時以前にログインしていたプレイヤーが、いつまでたつても起きてこない。心配になって見に行ったら、大抵のプレイヤーはVRのゲームの世界から戻ってきていないだけだったが、中には死亡していた人もいる』と。

多すぎる通報の電話に、警察と消防の電話回線はパンク寸前。

警察では、慌てて緊急の対策本部が設立された。名称は【仮想現実神隠し事件対策本部】

消防は、自衛隊にも協力を要請し、何とか通報の嵐をしのいでいる。

そして自衛隊の中で唯一、この事件に関して「上」から任務を与えられているのが、【サイバーテロ対策課】。

事件発覚から三十分後にようやく『電腦の処理者』や『AI：ミコト』を所有しているヴァルハラ社の社長、技術開発グループのリーダーなど、およそ十数名を何故か任意で同行させた警察に比べても、おおよそ、その半分ぐらいの時間しか経過していない。

その任務の内容は、『救出方法の解明・プレイヤーとの連絡方法を見つける』。

全国で五つのチームが編成され、それぞれ「プログラミング」「ハッキング」「コンピュータウイルス作成」「情報処理」「その他」の役割を担っている。

なぜこんな物騒な役割のチームがあるのか？と思われるだろうが、世界最高レベルの厳重なセキュリティが掛けられていた『脳から送られる電気信号の管理プログラム』《レディオジメント》の異変は、明らかに事故では済まされない。

最後のチーム、「その他」は明らかに手抜き×丸投げな感が否めないが。

何者かからハッキングを受けたのは明白。そしてセキュリティを突破できるほどのハッキングの腕を持った犯人、もしくは複数の犯人を相手して確実に勝利を収めるには、このぐらいの用意があった方がいいのだ。

もちろん、「上」が圧力をかけて、ヴァルハラ社から『電脳の処理者』を徴収したため、ただでさえ周到に準備したサイバー戦の勝率がさらに上がった。

が、今回の任務はあくまでも『救出方法の解明』と『連絡手段の確立』。

その過程で、万が一にも争いを回避できるなら、その方がいいに決まっている。

そういう意味では、争いには参加しないであろう、「その他」チームはある意味良い仕事ともいえるのだが……。

「まったく、なんだって『その他』なんていかにも雑用的なチームで仕事しなきゃなんないんだよ」

ボタン！とおそらくわざと大きな音を立てながらドアを閉め、荒々しく与えられた部屋に入ってきたのは、サイバーテロ対策課その他チーム、仙崎直弘。階級は少佐。

自分の従弟がゲームの世界にとらわれていることもあって、『自分も捜査に参加させてください！』と上司に頼み込んだのだが、軽くあしらわれて、『その他』に回されたのがよほど不服らしい。



「落ち着いてください、仙崎少佐。そんなことをおっしゃられては我々の士気が下がります。それに『その他』ということは、ある意味、自分たちで好きにやっていいということに繋がります。それは少佐の気風に合っているのでは？」

「まあ、お前はそういうがな……。なんというか、もうちょっと体面上ましな名前をつけるとか、投げやりすぎだろコラ！とか、給料増やせとか、上に文句がいくつかつたまってな」

がりがりと頭をかきむしりながら、溜息をつく。

目の前の冷静沈着で、直弘より一つ年下の女性は、昔からの仕事仲間の加藤麗華。階級は大尉だ。

整った顔立ちで、いまどきの女性には珍しく、完全な漆黒色の短髪。下手に茶色く髪を染めているよりも綺麗に見える。

のだが、長い間ともに働いてきた直弘には、魅力的には映らない。

「最後の一つは全く関係がありませんね。給料を上げてほしければ、愚痴ってないでさっさと仕事をしてください」

「へえいへい。といっても何をやればいいのかすら掴めてないのが現状なんだけどな」

「それはこの資料に纏めてあります。五分で目を通してください」  
二、三十枚はあるつかという分厚いレポートを、直弘に押し付けて、麗華は自分のデスクにあるパソコンに向かった。

ここから先は自分でどうぞ、と言いたいの丸わかりだ。

「……………良く招集されてからの短時間でこんなに纏められたな」

非番だったメンバーも含めて、招集され、チーム編成が発表されてから、まだ三十分もたっていない。

その割に、レポートの内容は分かりやすく、しっかりとした内容だった。

「そりやもう、麗華先輩ですからね、このぐらいは朝飯前なんですよ」

「あいつのタイピング速度半端ねえからな。ソフトや変換の速度が追い付いてないこともあるってんだから神業の域だろもう」

淡々と呟きに答えたのは、これまたいつものメンバーの、石黒秀吉中尉に、根室静也少佐。

中尉の方は、「豊臣秀吉」から字をもらったため、仕事仲間からは「太閤」と呼ばれている。

生真面目な性格と、シャープな感じの眼鏡がとても似合っているのだが、年若いせいか、いじられやすいキャラのせいか、はたまた両方なのか、「太閤」と言うような威厳は皆無と言っている。

初めは恐縮して、「そんな大層なあだ名をつけなくていいですよ！」と遠慮していたが、皆がからかっているだけだと気付いてからは、そう呼ばれるたびにため息をつくようになったのだが、今ではそれすらもあまり残っておらず、もうどこか諦めている。

静也少佐の方は、直弘の高校からの同級生にして親友。ついでに言うと、『電脳処理者』を開発した技術者、『早瀬<sup>はやせみれい</sup>王伶』とも知り合いだ。

彼を通じて、直弘も早瀬と交流があるから、この事件に関しては比較的密接にかかわっていることになる。

静也と直弘は、今年で二十六だから、おおそ十年ぐらいの付き合いになる。

王伶の方は七年上の、三十三歳。といっても、子どもじゃないから、友人となるのに年齢は関係ない。

王伶はともかく、静也は口や素行も悪く、友達は少なかったのだが、何故か直弘とはとても気が合い、就職したのも同じ自衛隊だっ

た。

驚いたことに、何の口裏も合わせていなかったのにもかかわらず、「俺、人の役に立ちたいから自衛隊に入ろうと思う」と進路を教えられた時、「奇遇だな、俺もなんとなく自衛隊に入りてえって考えてたんだよ。珍しい偶然もあるモンだ」等と本気で驚いた顔をしていた。

「えーっと、これで四人、と。あと一人・・・だれだっけ？」

「知らん。忘れた」

「えーと、誰でしたっけ？」

思惟から戻った直弘が首をひねったが、それに正確な答えを返してくれる者は、男三人の中にはいなかった。

「はぁ・・・。自分の担当チームのメンバーの名前ぐらい覚えておいてください。『神上葵』さん・・・でしたよね？」

「しつれいしま・・・」

「何か偉そうなこと言いつつ語尾が疑問形だったぞ」

「う、うるさいですね。疑問どころか全く思いつきもしなかった少佐に言われる筋合いはありません」

ドアの陰から、問題の人物が完全に麗華をからかう体勢に入った直弘と、見た目は冷静に返答をしている麗華を、生温かい目で見ているのだが、二人は全く気付かない。

真面目な秀吉はそのことを伝えようとするが、面白がった静也に口をふさがれて止められる。

数分が経過して、ようやく堪忍袋の緒が切れた問題の女性が口を開いた。

「私の名前は、『上神葵』です！思い出したかコンチクショウ！」

「いや、さっぱり」

「ああ、そういえばそんな名前でしたね」

実は、とうの昔にいることに気付いていた二人は、最後まで悪ノリを続けた。

直弘はともかく、麗華にしては珍しいことだが、大事件を前にして、若干テンションが上がっているのかもしれない。

「さて、メンバーも揃ったことだし、ちやちやと事件、解決しちやいますか！」

一言叫ぶと、直弘は自分のパソコンの電源を入れた。

### 第三章 Act 1 異変の始まり（後書き）

色々な人物名が出てきてこんがらがった方すみません。  
一覧にすると

仙崎直弘・・・「その他」チームのリーダー。壬伶や静也とは親友。上司とは仲が悪く、良く仕事をさぼるが、今回の事件に関しては本気で取り組んでいる。が、日ごろの行いが悪いためあまり最前線には送ってもらえない。そして現実世界編での主人公。

加藤麗華・・・直弘の副官。優秀だが冷静・・・むしろ冷酷。テンションが上がると、冗談を言ったり悪ノリをすることがあるが、あまり感情を表に出さない。タイピング・ハッキングの腕は超一流。

石黒秀吉・・・通称、「太閤」。いじられやすいキャラで、溜息が口癖。若干かわいそうな人w（作者からもいじられる）

根室静也・・・自衛官というより、ヤから始まりザで終わりそうな、その筋の人に見える。口が悪く、「ん」を「ン」と発音する。おもにこれは作者が直弘と口調を識別させるため。見た目に反して頭は良いが、コンピュータの扱いは苦手。さらに銃器などの扱いや、武道の心得もあるため、今すぐにでも暴力団に転属できそうな人。

上神葵・・・天然キャラだが、空気が薄いため、良くするーされたり忘れられたりする。

秀吉「なんか僕の紹介文短くないですか!？」

葵 「私と大して変わらないですよ」

直弘 「はっはっは！所詮君たちは脇や」

静也 「うるせえンだよ。狭い部屋の中で騒ぐなッての」

．．．．．to be

continue .

## A c t 2 捜査開始（前書き）

前回のあとがきが見苦しかったため、少し手直しさせていただきました。

ですが内容自体は変わっていないので、読めた方は気にしなくてもよいかと思います。

## Act 2 捜査開始

「まずは、中にとらわれている人の現状を把握しないとな。いったい何人が出られなくなっているのか、そしてゲームの中でどういった状況で生活しているのか。さらにまだ可能性の話だが、中にいる人は何らかのきっかけで、現実世界で肉体が死亡することになる。その理由を突き止めないと」

ぐつと拳を握って力説する直弘だが、部下からは白い眼を向けられた。

「つて、麗華先輩のレポートに書いてあったんですね」

「人の言ったことを自分の意見みたいに偉そうに語るのはアホみただぜ」

「・・・・・・・・」

「先輩サイテー！男としてサイテ　！見損なった・・・わけでもないか。もともとの評価が最底辺なんだから」

三者三様ならぬ四者四様の口撃に、あっさり撃沈する直弘。傍から見ても、やはり情けなかった。

「と、とにかくだ！まずは王伶に会いに行く！警察？知らん！監視システムにハッキング・看守には賄賂だ！」

冷汗を垂らしながら、拳で机をドンと叩く。

そう、うちの上司が、学生にやるみたいチーム分けの発表時間ごとに時間かけてるから、先に警察に身柄をかつさらわれてしまった。　と、直弘は思いこんでいる。



「彼らはまだ任意同行の段階ですし、いまどきの刑務所に看守はいませんよ？それに監視システムにハッキングするのは犯罪です。警察相手に犯罪仕掛ける気ですか、少佐は？」

「うっ……」

全ての意見を合理的に否定され、ぐうの音も出ない直弘。

そんな友人の取りそうな行動をキチンと把握している静也は何も言わなかったし、さっきはともかく基本真面目な秀吉も特に触れない。

が、残念なことにそんなスキルがないうえ、お調子者な人が一人。

「やーい、仙崎がまたやりこめられてやんのーっていったああー！」

そう、残り一人の葵。

彼女は一応、一応二年分年上。だが、天真爛漫……じゃない。

天「然」爛漫な性格が災いしてか、男性にはもてるが、全然昇進させてもらえていない。

で、階級としてはまだ少尉にもかかわらず、よく先崎をからかっては殴られている。

「女性に手を上げるなんてサイテ！」

「うるせえ、男女平等だ」

ペツと唾を吐き捨ててもしそうなほど、不機嫌な様子をかくそうともしない直弘。

それでも、男女平等と言いつつ、しっかりと手加減はして、軽く頭をはただけだった。

何度も同じやり取りを繰り返すうち、そうと悟った葵は、普段は

これで引き下がるのだが、今日は違った。

「うわっ！セクハラだ、仙崎い！」

「・・・むかついた。お前、今後三年間は給料五割引きな。俺に決定権がある限りだが」

「それはあんまりな仕打ちじゃないですか、先輩？」

本気で値下げしようとしている直弘を見かねたのか、葵が哀れになつてきたのか、救いの手が秀吉から差しのべられた。

「ちっ、なら今月だけにしてやるよ」

「「結局やるんですか（んだな）（の）！？」「」

「しょうがないな、この事件が今月中に解決するか、上神が活躍すれば考えなおすかどうか検討する気分にはなるかもしれないと言つておく」

これ以上何も言わんぞ、とばかりに、腕を組んで三人をぎろりと睨みつける。

「・・・少佐、それはあまりにも大人げなさすぎかと」

「いいんだ！部下の指導に必要なのは、鞭と罰と少量の飴っていうしな！」

「言いません」

直弘の放った冗談に微塵も顔を動かさず、即座に冷たく返した後、くるりとパソコンに向き直って、カタカタとキーを、神速で打ち始める。

「・・・興が削がれたな。どうでもいい話はここまでだ。俺は壬伶に会ってくる。葵！ヘッドギアと『ユグドラシア・オンライン』の、

事件発生前と発生後の物を手に入れる。麗華と静也は好きなように動いてくれてかまわない。一応忠告しておくが、捜査に関係ないことはするなよ。秀吉は静也から指示をもらって。では行動開始！」

「分かりました」

「はい」

「合点承知、つてな」

「ちよつと！何で私だけそんな厳しい扱いなのよ！」

麗華と秀吉は素直に敬礼を返し、静也はもうすでにスーツを着終えていた。

で、案の定噛みついたのは葵。

「麗華は多分俺より優秀だし、静也に関しちゃ同年齢で同期、しかも同じ階級だしな。それに行動力も十分だから十分に任せられる。で、パソコンいじりとかじゃないやり方で動くだろうから、一人じや厳しいだろう。で、葵か秀吉、どっちをつけるかだが、これはもう仕事の相性の問題だ。秀吉は状況把握とか弁舌とか武術が得意。で葵はいかにもゴリ押しとか延々と食いさがったりするのに必要な精神力を持ってる上に機械の扱いも上手いしな。ハードとソフトの回収兼調査に適性があるのはどっちだと思う？」

長々と相手の反論を許さない、とばかりに捲し立てられては、さすがの葵も頷くしかなかった。

メンバーの特技としては、麗華がパソコン操作を含む、デスクワークが完璧、静也が武術とかの肉体労働＋頭脳戦、秀吉は主に交渉とパソコン以外の機械操作（銃器含む）、担当。葵は元科捜研にいたためか、長時間粘るだけの精神力や解析調査に長けている。

直弘に関しては、普段からあまり必死にやってる様子も見られないというえ、仕事もよくさばるくせに、やるべき事は麗華以外の誰より

も早く終わらせられる。そして柔道が苦手で剣道が超得意、と。

「じゃ、行ってくる」

「俺は一人でいい。太閤はここで麗華の補佐をしておけ。で、葵からヘッドギアが届き次第、その仕組みを詳しく調査。いいな？」

「ぜーったいに給料減らすなんて許さない！頑張って活躍してやる！」

子供っぽい葵に苦笑しながら、直弘と静也はそろって「その他」専用部屋を後にした。

## A c t 2 捜査開始（後書き）

着々とお気に入り登録してくれる人が増えてきていてうれしい限りです。

厚かましいようですが、感想や苦情等ありましたら、報告宜しくお願ひします。

### Act 3 法定速度

部屋を出た直弘は、軽くコキコキと首を鳴らすと、まず何より先に、自衛隊基地の駐車場に停めてある愛車、日産のGT-R Sp ec EX のもとへ向かった。

高い買い物だったが、走りやすいうえに見た目が好みだから重宝している。

なかなか広い基地だけに、駐車場まで行くのに十分はかかってしまった。

一刻も早くいかないと、とはやる気持ちを抑え、自分の愛車に駆け寄った。

手先が震えてなかなかキーが差し込めなくて、思わず舌打ちをしてしまう。

左手で右手の手首を抑えてようやく中に入れた。

「よし、ちよっくら飛ばしますか！」

壬伶は今、任意同行中だからあまり急いでも意味がない。

さしあたっては、『電脳処理者』の回収が一番の急務だろう。

壬伶が削除していない限り、『電脳処理者』にはVRSに関するすべてのデータが残されているはず。

それにあいつの妻とも面識があるから、強制的に押収しなくても、穩便に借りられる可能性もある。

シウルルツとシートベルトを引き出し、しっかりと装着する。

運転の荒い直弘にとって、シートベルトは命綱にも等しい。

「俺の辞書には法定速度なんて文字は載ってないからなあ。非常事

態なことだし、全速力で走らせてやるとするか。確か壬伶の家はここからざつと120キロほど北に行ったところにあっただけな・・・」

何気に物騒なことを漏らしながらニヤツと唇を釣り上げる。

同時に、アクセルを目いっぱい踏み込み加速する。

それでも悲鳴も上げないし、環境にと燃費に悪いブロロロオ・・・という音もしないエンジンはほめてやるべきだろう。

「ま、そんな程度の短距離、助走にもなんねえな！」

一言、威勢よく呟くと、駐車場から抜ける。

と、同時に法定速度を軽く振りきった速度で飛び出した。

白い高級車にぶつかけかけたが、見事なドライビングテクニックで車体を傾けながらかわした直弘は、そのまま元通りに車線に入って加速する。

「あぶねえなこの野郎！警察訴えるぞこら！」

「は！違法プレート使ってる上に、無断で自衛隊基地の写真撮ってたくせに言えるもんなら言ってみやがれてんだああああああああっ！」

走り去りながらの大暴露に、白高級車の運転手は怒りと周りの視線に晒された周知で顔を真っ赤にしながら、ぎりぎりと歯ぎしりをした。

もちろん、彼程度の動体視力では直弘の車体のナンバーまでは見極められなかったのも、さらにそれに拍車をかけていた。

その肩に、ポンツと手が置かれて、慌てて振り向いた彼の後ろには、110通報を受けて近くの交番から駆け付け付けたらしき警察官と、

通報したのであろう自衛隊員が男を睨みつけていた。

「で、カメラ、貸して見せてくれないかな？」

この時の警察官の笑顔ほど怖い笑顔は、見たことがなかったと牢の中でその男が語っていたがそれはまた別の話。

「お、捕まっ たみたいだな、あいつ。だっせ                      ！」

走り去っていくパトカーの音に、彼が逮捕されたことを知った直弘は、社内ではっはっはと大爆笑する。

が、いつまでも消えないパトカーの音に不審を持って振り向くと、交通機動隊の白バイと覆面パトカーだった車が、パトランプをつけながら追ってきていた。

「げええええっ！」

慌ててハンドルを切りながら加速したが、連絡を受け前からやってきた普通のパトカーに道をふさがれ、あっさりお縄となった。

「で？何が目的であんな無茶みたいなさうこつやらかしたんだ？あぁ？」

「……………ホントにすみません。ちょっと自衛隊の急な任務で」



「その任務の内容は！？誰も怪我人も出さない見事なドライビングテクニクだったから、それさえ話してくれば執行猶予になるだろうが！？」

「自衛隊にも守秘義務があるって言うてるでしょ！言えるのはそれが守秘義務にかかるような、超最高機密ということだけだ！」

見た目が猿みたいな刑事と、かれこれ三十分はこんな感じの取り調べが続いている。

薄暗い部屋に閉じ込められた直弘は、（こいつ一人だけならボコして逃走できるよな・・・）などと物騒なことを考え始めたが、辺りにもう一人、有能そうなメガネの刑事が張り込んでいるため、逃走は不可能だとあきらめている。

「いい加減げろっちまえて言うてんだ、このバカ野郎！」

と、ついに猿刑事がこぶしを振り上げ、直弘の頬を殴り飛ばそうとする。

が、気付いたら地面に組み伏せられていたのは猿刑事の方だった。

柔道の要領で、拳を余裕でかわすと、ガラ空きになった腕をつかんで投げ飛ばしたのである。

「誰がわざわざあんな遅い拳に殴られてなんかやるか、出直してこい！」

偉そうに腰に両手をあてて威張っているが、立派に公務執行妨害である。

現に、もう一人の刑事はすでに拳銃を抜いて構えている。

それは、銃器を扱っているだけに、直弘には許せないことだった。

ダツと走り出し、一気に距離を詰め、足で拳銃を持った手を蹴りあげる。

弾き飛ばされた拳銃が、綺麗な弧を描いて監視カメラのレンズを割った。

「そう気安く人に銃口向けてんじゃねえ！撃つ時は心の中で、撃つ正当な理由を十回復唱し、上からの指示があつた時だけにしろ！ボケが！貴様ごときが銃を握るのは億年早いわ！」

「ぐ……はっ……。おまえ……公務執行妨害……」

「知るかバカ。正当防衛に近いんじゃないか？殴りかかってきたのはあの猿顔だし、撃とうとしてきたのはお前だ。警官だからって何やってもいいわけじゃないぞ！？それに、今は俺も政府直々の『公務』中だ。で、自衛隊員の緊急任務中だから、拳銃も携帯していて危険があつたら使ってもいいことになっている……意味は分かるな？」

最後に、訓練で培った飛びきり鋭いまなざしに最大限の気迫を込めて言い放つと、眼鏡の刑事は、言いたかったことを悟ってくれたらしく、顔を青ざめて壁にぺたんと身体をつけると、ずり刷りと崩れ落ちてしまったが、それでもまだ惰性で首をガクガクと上下に振っていた。

それを見た直弘は、身体から一気に力を抜くと、纏っていた気迫も一緒に消す。

あきれるほど早く自然体に戻った彼は、軽く服をはたいてそのまま少し体を伸ばす。

「さて、と。カメラが壊されたのに気付いた警官が来る前に、さつさとトンずらかせていただきますか。おい其処の眼鏡！俺の自動車がある場所教える！」

ジャキン、と取り出した拳銃の銃口を向けて脅すと、あっさりと「ふ、普通に駐車場に放置してありますですはい！だからそんなものを向けないで！」と話してくれた。

コイツ、警察官には向いてないのではないか？と思ったが、拳銃はしまつてやった。

「おまえ、警官やめた方がいいんじゃないか？  
もつとも、辞めさせられるかも、だがな」

地味に怖い事を言いながら、直弘は顔を隠して歩き出した。  
ドアにはもともと鍵がかかっていなかったため、眼鏡の警官を無力化できればそれで十分だったようだ。

その後、無事に逃走し終えた竜哉が、法定速度を無視して、後ろに交機をつき従えながら飛ばしていったのは言うまでもない。

ちなみに二人の警官は、揃ってクビを言い渡されたとか。

### A c t 3 法定速度（後書き）

皆さん、法定速度は守ってくださいね。

何気に直弘、滅茶苦茶重大な犯罪をやっちゃってますが、警察も「VRS」の事故の対応で忙しかったです。

そういうわけで、実際にはこんなことはあり得ません。

あくまでこれはフィクションです。良い子は真似しないでね（笑）

## Act 4 第六感

警察署を脱走した直弘は、文字通り風のような速さでGT-Rを駆つて、壬伶の家へと向かつていた。

すでに秀吉を介して上は説得済みだ。  
今回の事件はもみ消してもらえらしい。

「俺の辞書には、反省つて文字もねえんだよ」

自慢にもならないことをばやいているが、気にしてはいけないということだろう。

逃走からおよそ二十分、有り得ないような速さで目的地にたどり着いた直弘は、持ってきていた線香を手にとって、洋風な豪邸のインターホンを鳴らす。

『何でしょう?』

『すみません、壬伶の友人の直弘です。少しお話を伺いたいです  
が』

『ああ、直弘さんですね。どうぞ中へ』

警戒心バリバリの声音を一転させた、おそらく壬伶の奥さんと思われる人の声が遠ざかり、ボタンが押された音がして門がゆっくりと開き始める。

いつものことなので特に何の感慨も覚えずそのまま中に入っていく。

通された客間では、何時も通り美人の奥様がティーカップから紅茶をすすっていた。

人妻に手を出す気はないが、物凄く王伶がうらやましく感じる。

二人分の紅茶を用意して、砂糖を入れくるとまわしている女性の姿は、実に絵になっていた。

「いらつしゃい、直弘さん。今日は何の用ですか？やっぱり『ユグドラシア・オンライン』関係の話ですか」

「ええ。実は私の従弟もあのゲームの世界に閉じ込められてしましてね。なんとしても救出してあげたいんです。そのためにはまず、あなた方が持つていらつしゃる『電脳の処理者』を貸していただけないかと思ひまして」

「私は、そういうことには本当に疎いので……。どうぞ、ご自由に持つて行ってください。もっとも、王伶が警察から帰ってきたらまた変わるかもしれません。まあどうぞ、紅茶でもいかがですか？其処まで慌てなくても、時間はまだあります」

にこやかな笑顔で、紅茶の入った皿を直弘の方にそっと押す早瀬夫人。

そう言われてはしょうがないので、出された紅茶を一口飲む。

これは、直弘の下になかなかにあっついて、思わずおっと声を上げそうになる。

が、すぐに後悔することになった。

奥さんの美しい顔が見にくく歪み、くつくくと悪役同然の笑みを漏らし始めた。

視界がぐるぐると回り、意識が削られていくのが分かる。

「お、おい・・・やはり、睡眠薬・・・か・・・」

「あはははははははははっ！ええ、あなたが『電脳の利用者』を持つていきたいなんて言うからです。」

あれには、少し人には見せられないデータが入っていましたね。実を言うと、王伶にすら話していない実験が終わりかけなんですよ。今はなんとしてもあれを死守しなければ。大丈夫、死にはしません。近くの裏路地にほうり捨てておくことになりますが」

優しい笑顔などというものはかなぐり捨て、本性をあらわにした早瀬夫人は、軽い興奮状態で、まだ直弘の意識が残っていることには気づかない。

「おそらくそれは・・・ミコトの事件のことに関係があるんだろ？」

苦し紛れの予測だが、直弘が口にした途端、早瀬夫人の顔が驚愕に彩られたのははつきりと見て取れた。

凶星だったのだろう。

「な、なんであの睡眠薬入りの紅茶を飲んでまだ起きていられるのですか！」

「なあに、自衛隊では・・・少しばかり、こういった物に身体を慣れさせることも・・・してきたのでね。で、お前の目的は・・・なんだ？」

慣れているとは言っても、その効果を完全に打ち消せるわけでもなく、直弘には瞼がだんだん重みを増していくように感じ取れた。

まるで、春先に窓側の席で退屈な授業を受けている学生よろしく、ときどきしゃべりながらも意識が飛んでいることがあるが、必死で意識をとどめ続ける。



「もちろん、ミコトをこの世界に蘇らせることですよ！あの子はまだ、ただの『脳死』状態。脳の電気信号をいじることさえできれば、あの子を・・・あの子の笑顔をもう一度、見ることができんです！そのための実験台なら、今たくさんいるじゃないですか！！『ユグドラシア・オンライン』の世界へ入り込んでしまった、『脳死』状態のプレイヤーたちが！」

最早狂っているとか言いようがない早瀬夫人。

そうと分かっているとしても、止めることのできない自分を、直弘はとても情けない存在としてとらえていた。

「そこで、貴方はしばらく寝ていなさいっ！」

もう睡眠薬が体中に回って、動くことすらままならない直弘の脳天に、早瀬夫人の足が振り降ろされる。

「がつ！」

自分の頭蓋がたてる鈍い音を聞きながら、直弘は自分の意識がついに手放されるのを感じた。

（ああ・・・ちくしょう、こんなところで寝てる時間なんてないってのによぉ）

心の中で呟いても、誰に聞こえる訳でもなく。

そして、その数秒後、思考もままなくなっていて、視界がブラックアウトした。

「・・・・・・・・・・てください、起きてください！少佐！」

「ん？・・・・・・・・・・ああ、麗華か。ちくしょう、今は何時だ！？」

目を開けるなり、飛び込んできた麗華の姿に、自分が眠らされていたことを思い出した直弘は、慌てて腕時計を確認する。

が、普段から自分が腕時計はつけないタイプの人間であることを失念していたため、手首を見ても何もない状態に。

「・・・・・・・・・・カパッ」

何とも言えない白けた空気が漂う中、携帯を開けて、時間を確認する。

【4月9日 PM 4：00】

「大分お休みになられたようですが、収穫は！？」

「あ、ああ。今回の事件には、早瀬夫人が一枚噛んでいる。それぐらいしか分かってないな」

忌々しげに、スーツをはたきながら立ち上がった直弘は、体に異常がないことを確認すると、周りを見回してみる。

意外なことに、すぐにどこかは特定できた。早瀬邸が近くに見える、ビルとビルの間。

「しかし、よくここが見つけれられたな、麗華？」

「少佐が持っている携帯電話のGPSから位置情報を解析すればす

ぐです、その程度のこと」

不審そうに尋ねられても、眉一つ動かさず冷静に返す麗華。

実は自衛隊メンバーの携帯にはGPS機能を妨害するロックが掛けられていて、プライベート用とは使い分けられているので、プライベート用携帯の探知ができない麗華にとっては、そう簡単なことではなかったのだが、間違えてもそれを表情には出さない。

麗華に言われてポケットを探ると、意外なことに携帯電話はすぐに見つかった。

普通、人の動きを奪ったら携帯ぐらい持ち去っておくのがセオリーだと思ふのだが、その点、まだまだあの夫人は甘い。

「もつとも、電腦の処理者は手に入らなかったがな。やれやれ。アレがあれば百人力だったんだが。せっかく警察署から脱走までしてきたかいがなくなっただろうが」

はあ・・・とため息をつく直弘と、「そんなことしたんですか」と言いたげな冷徹な目線で彼を見る麗華。

「とりあえず、場所を変えましょう。こんなところで寝ていては体が冷えてしまいます」

「そうだな。次にするべきことは・・・」

「従弟の見舞いに行かれては？色々といいでに調べることもできるかもしれませんし」

実を言うと、それはさつきからずっと考えていたんだが、なかなかが進まない。

自分でもよく分からないが、あそこに行つてはならない、と心の

中で第六感ともいうべきものが告げている。

バカバカしい、ただの一般家庭であるあの家に、いったい何が起ころというのか、と自分に問いかけても、不安の正体は分からない。

「うーん、他にすることもないしな、行ってみるか。何か分かるかもしれないしな」

そう、この時点ではまだ甘く見ていた。

この自分の、第六感がもたらしめている不安の正体について。

## Act 5 見舞い（前書き）

遅くなりました！

最近リアルで色々と試合とか試験前とかバンド組もうぜとか、多忙だったもので書いている暇がなかったです。

久しぶりの更新にもかかわらず、分量少ないしいつにも増して駄文・・・。

更新ペースは当分上がらないと思います。申し訳ありません。

## Act 5 見舞い

またもや法定速度を無視した速度で爆走しようとした直弘を止め、少し体を温めつつ横になっっていることを勧めた本人である麗華は、直弘とは対をなす、華麗なドライビングテクニクで持つて、次々と車両を追い抜きながらも、危なげなく高速道路を走っている。

麗華は多分、高速道路にも法定速度があることなんて、全く知らないか、注意すら払っていないに違いない。

もちろん同乗者もガン寝していて、注意することもないし、万が一起きていようと咎めることはないだろう。

一見、優等生そうに見えて、麗華もなかなかにぶっ飛んだ性格をしている。

「チツ……今日は調子が悪いですね。あまりスピードが出せません」

ハンドルを握ると性格が変わる、というのはこのことか、と初めて麗華の車に乗った時は直弘も驚いた物の、今ではすっかり慣れてしまっている。

法定速度オーバーになれるっていうのもどうかと思うが。

「目的地まで後五十キロですか。もう少し飛ばした方がよさそうですね！」

いやあ、もう十分ですよっ！と叫ぶような同乗者はいない。

すでに車の速度はメーターを振り切っていて正確には分からない。

それでも、さらに踏まれたアクセルのせいで、次第にエンジンの都合上出せる最高速度まで到達する。

さっきまでは「あぶねなこの野郎！」とか、「警察に訴えんぞ！」等の野次が飛んでいることもあったが、今はもうそれもない。度肝を抜かれた他の車の運転手が、「あ、抜かされた」と認識するころには、すでに声が聞こえないところまで走り去っているからである。

約十五分後。

奇跡的に全く事故を起こさず、直弘は従弟の家まで到着することができた。

つまり計算上は平均時速200キロというバカげた速度で走っていたことになる。

「ん？ああ、もう着いたのか。相変わらず運転の腕は確かだな、麗華」

「少佐に教えていただきましたからね。そうそう簡単には衰えませんよ」

首をコキコキと鳴らす直弘と、過去を振り返るような眼に怒りを込める麗華。

おそらく、直弘は過去に、とんでもなく厳しい方法で運転を麗華に仕込んだらしい。

……何をどうしたらあんな爆走ドライバーができるのか。

そもそもそれ以前に、通常の運転を習って免許も取ったのに、な

ぜわざわざあんな危ない運転の指導を受けたのか・・・それは、永遠の謎である。

「さあて、あのトラブル巻き込まれ体質な竜哉の寝顔でも拝みに行くか」

「どこまでも捻くれた言い方しかできないんですね、少佐は」

グサツと心に突き刺さるようなセリフをさらりと言われた直弘は、胸を抑えるようなポーズのまま、達也の家のドアベルを鳴らした。

「あー、すみません、竜哉の従弟の仙崎直弘です。竜哉の見舞いに来ました」

「それでは、私は近くで待機しています」

気を利かせた麗華が引き返していった。

まさに、直弘が止める間もない早業だった。

「いや、別にいいんじゃないか　　ってもういないし。あいつごんだけ行動早いんだよ」

はぁ・・・とため息をついた直弘。この後に待ちうける展開がだいたい想像できているので自然にそのため息は深い深いものになる。

「つたく、気が利くのか危険に敏感なのか、どっちとも断定できない奴だな。ホント」

諦めたようにぼそつと呟いたと同時に、家のドアが開く・・・わけもなく。

「どちらさまでしょうか？」



ドタバタという足音が鳴ったかと思うと、インターホンで返事があつた。

「ああ、おばさん。直弘だよ。入れて？」

「あー、直弘ちゃんね。どうぞどうぞ」

音もなく扉が開けられ、「ささ、何も出せないけど入って入って」と客間に通された。

そして、若干既視感のある、紅茶と奥様の組み合わせが、ここでも出迎えてくれた。

ここまでは、いたって普通なのだが、

「まったく・・・いつまでたっても、直弘ちゃんは一人身なのねえ・・・。たまには彼女の一人や二人ぐらい連れてきてくれればいいのに」

第一声がこれというのは、あまり普通ではないと思う。

「いやあ、なかなかそういうことは無縁の職場だからな。それに二人も連れてきたらそれはそれでおかしいし」

最早おなじみとなったこのやり取りだが、回を重ねるごとに、だんだんおばさんのため息が深くなっていく気がする。

「それで？要件はやっぱり・・・竜哉のこと？」

急に真剣な顔つきになった竜哉母・・・仙崎咲哉は、せんざきくや単刀直入に

切り出した。

「そうだな。今は他の被害者と同様に、昏睡状態にあるみたいだが、幸い、命は落としていないようだ。個人的な見解だが、多分竜哉たちは、ゲームの中の世界に、何者かによって閉じ込められたんだと思ってる・・・というより、自衛隊ではもうその方針だ」

「それで。見舞いついでに情報収集ってわけね。どうぞ、会って行く？」

「お願いします」

案内された竜哉の部屋のドアを開けると、綺麗にベッドに横たわっている、彼の姿があった。

だが、もちろんただ寝ているだけではない。

実質、見えない敵に命綱を握られているような状態だ。

「竜哉君もやはり、午後八時ぐらいにはこの部屋でゲームを始めていたんですね」

しゃべりながら直弘は、持ってきていた工具箱からコードと工具を取り出して、達也のヘッドギアに何やら細工を始めた。

「何をしてるの？危ないことじゃないでしょうね」

「もちろん。ただ、今ゲームのプログラムはどのようになっているのか、それを覗かせてもらっただけだから」

簡単に言っと、パソコンにつないでハッキングを行う、といったところか。

接続完了、とUSBコネクタをノートパソコンにつないでPCを起動する。

「お宝拝見つと。さあて。何をどう書き変えてくださったんでしょ  
うねえ？」

着々と事が進んでいた、まだこの時。

直弘の顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

## l a s t   A c t   ハッカーの正体

（ネットワークに接続、バグの数、584970。こいつはおそらく、今意識不明の人間の数が、すでに死亡した人間も合わせた総数。つまり、仮想空間から戻ってこれなくなったっていうのは間違いな  
いようだな）

手慣れた様子でパソコンを扱う直弘。

高速でスクロールされる文字列を読みふけているその顔は、彼にしては珍しくとても真剣なものだった。

（誰かが、ネットワークにハッキングして、脳から身体へと送る電気信号の送受信にまつわるプログラムを書き換え、「ヘッドギア」からネットワークに送っている電気信号が、元通り「自分の肉体」に送られることを阻止してるのか。相当な腕を持ったハッカーの作業だな。ウイルスと同じ要領で、バグを散布したのかもしれないが、それよりは一回、ネットワークの中心に近い、当時に送られてきているデータすべてをハックした、と考えた方が妥当だろう。嚴重なセキリュティもあっただろうし・・・）

ここまで思考が及んだ時、ピーッ、ピーッという電子音が、直弘愛用のパソコンから鳴り響いた。

それは、何者かからハッキングを受けていることを示す音。

タイミングから考えても、真犯人かその関係者の仕業と見て間違いないだろう。

「はっ、おもしれえ。振り返ちにしてやるよ！」

ニヤツと口角を釣り上げた直弘は、携帯電話から自分の部下全員に指示を飛ばす。

『各自、今やっている作業を中断して、よく聞いてくれ。今、俺のパソコンが今回の犯人の関係者と思しき者からハッキングを受けている。パソコンが今扱える奴は、逆ハックを手伝ってくれ、犯人の素性を洗いだす！』

「了解！」

「悪いな、今こつちじゃ手が話せねえんだよ」

「ちよ、交渉中に電話かけてこないで下さいよ！あたしは今手伝えません！」

麗華と秀吉の手が借りられるようだが、はつきり言つて秀吉のハッキングの腕は、そこらへんのちよつとパソコンの扱いに詳しい高校生の方が上かもしれない。

でもまあ、陽動ぐらいには使えるだろう。

「頼むぞ、麗華、秀吉。他の二人は引き続き仕事を頼む・・・さて、久しぶりに楽しい勝負になりそうだな」

ハッキング用のコマンドを開き、猛スピードでキーボードをたたき始める直弘。

その速度は、麗華に勝るとも劣らない。

（セキリユティが第三レベルまで突破されてる。この短時間にしちやあ上出来じゃないか。まずは敵のパソコンに侵入させてもらいますか）

素人目には何のことか全くわからない文字列が、二つのウィンド

ウで並行して流れていく。

敵のハッカーが直弘のセキュリティを突破すると同時に、新しい上に仕様の違うセキュリティを展開し、同時作業で相手のセキュリティを破っていく。

（そろそろ、終いにさせてもらいますか）

最後の仕上げ、とばかりに、相手のパソコンのハッキングシステムを書き換え、使えないようにつづすと、強制終了しようとする。

その時、直弘のパソコンから、先ほどよりも耳障りな、電子音が響いた。

「な！？もう第十二セキュリティまで破られた？」

先ほど、完全に追い出したと思ったら、僅か数秒の間に全十五のセキュリティ中、十二枚目までが破られていた。

到底、人間業とは思えないほどのスピード。

しかも、それと同時に、直弘が破壊したセキュリティが全て元通りに復元されている。

「うそだろ・・・」

呆然とする直弘の前で、ついに十四のセキュリティが破られた。最後の警戒音が響き、我に帰った直弘は、慌ててパソコンに合った重要なデータを削除する。

そして、今回の事件にかかわるデータは、麗華のパソコンと、自分の携帯に送る。

それが完了すると同時に、直弘のパソコンが異様な熱を発生し、画面が真っ暗になる。

回線が焼き切れたのか、黙々と煙まで立ち上っている始末だ。もう使えないのは見るまでもない。

ボタン、と閉じて、わきに抱える。

「やられたか・・・」

今までハッキングでは負けたことがなかっただけに、今回の完敗は身にしてみた。

ゆったりとした動作で立ち上がると、「今日はお邪魔しました、また来るかもしれませんがよくお願いします」とだけ言って、ふらふらとした足取りで外に出た。

「ちっ、新しいパソコン、経費で落ちるかねえ」

外に出る頃には、強靱な精神力で持つて気分を切り替え、今後の対策を練っていた。

（ハッキングに関しては、多分俺と麗華が二人がかりで挑んでも勝ち目がなさそうだな。複数人でやっているのか、それとも・・・）

漠然と、今回のハッキングの犯人が誰か、つかめたような気がする直弘だった。

だがこの時、彼は気が付いていなかった。

近くの電光掲示板を流れる、『意識不明の「ユグドラシア・オン

ライン」のプレイヤーたちが、次々と命を落としている』というコースに。

．．．to be continue



## l a s t   A c t   ハツカーの正体（後書き）

えー、時間がなくてぐだぐだ感がさらに増した気がします。

次からは、竜哉サイドに視点を移します。このゲームの世界で換算すると約4日間の間の話は書けません、その後から始まります。

さて、直弘を襲ったハツカーの正体は誰なのか。

もうお分かりの方もいらっしゃると思いますが（というか大半の方がお分かりですよ）それはしばらく先の話に。

では、次回もまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2185s/>

---

FANTASY ESCAPER ~ 幻想の脱出者 ~

2011年6月15日14時38分発行